

古事記物語

鈴木三重吉

青空文庫

めがみ
女神の死し

一

世界ができたそもそものはじめ。まず天と地とができあがりま
すと、それといっしょにわれわれ日本人のいちばんご先祖の、天^あ
めのみなかぬしのかみ
御中主神とおっしゃる神さまが、天の上の高^{たか}天原^{まのほら}という
ところへお生まれになりました。そのつぎには、高^{たか}皇^{みむすび}産^{のかみ}霊^{のかみ}神^{のかみ}のお二^{ふた}一^{かた}方^{かた}がお生まれになりました。

そのときには、天も地もまだしつかり固^{かた}まりきらないで、両方

とも、ただ油を浮かしたように、とろとろになって、くらげのよ
うに、ふわりふわりと浮かんでおりました。その中へ、ちようど
あしの芽がはえ出るように、二人の神さまがお生まれになりました。
た。

それからまたお二人、そのつぎには男神女神とお二人ずつ、八
人の神さまが、つぎつぎにお生まれになった後に、伊弉諾神と
伊弉冉神とおつしやる男神女神がお生まれになりました。

あめのみなかぬしのかみ 天御中主神はこのお二方の神さまをお召しになつて、

「あの、ふわふわしている地を固めて、日本の国を作りあげよ」
とおつしやつて、りっぱな矛をほこ一ふりお授けになりました。

それでお二人は、さつそく、天のあめ浮橋うきはしという、雲の中に浮か

んでいる橋の上へお出ましになって、いただいた矛ほこでもって、下
 のとろとろしているところをかきまわして、さつとお引きあげに
 なりますと、その矛の刃先はさきについた潮水しおみずが、ぽたぽたと下へお
 ちて、それが固かたまって一つの小さな島になりました。

お二人はその島へおりていらしつて、そこへ御殿ごてんをたててお住
 まいになりました。そして、まずいちばんさきに淡路島あわじしまをおこ
 しらえになり、それから伊予いよ、讃岐さぬき、阿波あわ、土佐とさとつづいた四国
 の島と、そのつぎには隠岐おきの島、それから、そのじぶん筑紫つくしとい
 った今の九州と、壱岐いき、対島つしま、佐渡さどの三つの島をお作りになりま
 した。そして、いちばんしまいに、とかげの形をした、いちばん
 大きな本州をおこしらえになって、それにおおやまととよあきつしま
 大日本豊秋津島とい

うお名まえをおつけになりました。

これで、淡路の島からかぞえて、すっかりで八つの島ができました。ですからいちばんはじめには、日本のことを、おおやしまぐに大八島国と呼び、よまたの名をとよあしはらのみずほのくに豊葦原水穗国ともとな称えていました。

こうして、いよいよ国ができあがったので、お二人は、こんどはおおぜいの神さまをお生みになりました。それといっしよに、風の神や、海の神や、山の神や、野の神、川の神、火の神をもお生みになりました。ところがおいたわしいことには、いざなみのかみ伊弉冉神は、そのおしまいの火の神をお生みになるときに、おからだにおやけどをなすつて、そのためにとうとうおかくれになりました。

いざなぎのかみ伊弉諾神は、

「ああ、わが妻の神よ、あの一人の子ゆえに、大事なおまえをなくするとは」とおつしやつて、それはそれはたいそうお嘆きになりました。そして、お涙のうちなみだに、やつと、女神のおなきがらを、出雲いずもの国と伯耆ほうぎの国とのさかいにある比婆ひばの山にお葬りほうむになりました。

女神は、そこから、黄泉よみの国という、死んだ人の行くまっくらな国へたつておしまいになりました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、そのあとで、さつそく十拳とつかの劍つるぎという長い劍を引きぬいて、女神の災わざわいのもとになった火の神を、一うちきに斬り殺してしまいになりました。

しかし、神のおくやしみは、そんなことではお癒えいになるはず

もありませんでした。神は、どうかしてもう一度、女神に会いたくおぼしめして、とうとうそのあとを追って、まっくらな黄泉よみの国までお出かけになりました。

二

女神めがみはむろん、もうとつくに、黄泉よみの神の御殿ごてんに着いていらつしやいました。

すると、そこへ、夫の神が、はるばるたずねておいでになったので、女神は急いで戸口へお出迎えになりました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、まっくらな中から、女神をお呼びよかけになつて、

「いとしきわが妻の女神よ。おまえといっしよに作る国が、まだできあがらないでいる。どうぞもう一度帰ってくれ」とおつしやいました。すると女神は、残念そうに、

「それならば、もつと早く迎えにいらしつてくださいませばよいものを。私はもはや、この国のけがれた火で炊いたものを食べましたから、もう二度とあちらへ帰ることはできません。しかし、せっかくおいでくださいましたのですから、ともかくいちおう黄^よ泉^みの神たちに相談をしてみましたので。どうぞその間は、どんなことがありましても、けつして私の姿^{すがた}をご覧^{らん}にならないでくださいましな。後^ご生^{しょう}でございますから」と、女神はかたくそう申しあげておいて、御殿^{ごてん}の奥^{おく}へおはいりになりました。

伊弉諾神いざなぎのかみは永ながい間戸口にじつと待っていていらつしやいました。

しかし、女神は、それなり、いつまでたつても出ていらつしやいません。伊弉諾神いざなぎのかみはしまいには、もう待ちどおしくてたまらなくなつて、とうとう、左のびんのくしをおぬきになり、その片かたはしの、大歯おおはを一本欠かき取つて、それへ火をともして、わずかにやみの中ををたらしながら、足さぐりに、御殿の中深くはいつておいでになりました。

そうすると、御殿のいちばん奥に、女神は寝ていらつしやいました。そのお姿をあかりでご覧になりますと、おからだじゆうは、もうすつかりべとべとに腐くさりくずれていて、臭くさい臭くさいやなおいが、ぶんぶん鼻へきました。そして、そのべとべとに腐くさつたか

らだじゆうには、うじがうようよとたかつておりました。それから、頭と、胸と、お腹なかと、両ももと、両手両足のところには、そのけがれから生まれた雷神らいじんが一人ずつ、すべてで八人で、怖ろおそしい顔をしてうづくまつておりました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、そのありさまをご覧になると、びっくりなすつて、怖ろしさのあまりに、急いで遁にげ出しておしまいになりました。

女神はむつくりと起きあがって、

「おや、あれほどお止め申しておいたのに、とうとう私のこの姿すがたをご覧になりましたね。まあ、なんとにくいう憎いお方かたでしょう。人にひどい恥はじをおかかせになった。ああ、くやしい」と、それはそ

れはひどくお怒りになって、さつそく女の悪鬼わるおにたちを呼よんで、「さあ、早く、あの神をつかまえておいで」と齒がみをしながらお言いつけになりました。

女の悪鬼たちは、

「おのれ、待て」と言いながら、どんどん追っかけて行きました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、その鬼どもにつかまってはたいへんだとおぼし

めして、走りながら髪かみの飾かざりりにさしてある黒いかつらの葉を抜ぬき取っては、どんどんうしろへお投げつけになりました。

そうすると、見る見るうちに、そのかつらの葉の落ちたところへ、ぶどうの実がふさふさとなりました。女鬼どもは、いきなりそのぶどうを取って食べはじめました。

神はその間に、いっしょうけんめいにかけて、やつと少しばかり遁げのびたとお思いになりますと、女鬼どもは、まもなく、またじきうしろまで追いつめて来ました。

神は、

「おや、これはいけない」とお思いになって、こんどは、右のびんのくしをぬいて、その齒をひつ欠いては投げつけ、ひつ欠いては投げつけなさいました。そうすると、そのくしの齒が片かたはしからたけのこになってゆきました。

女おんなおに鬼たちは、そのたけのこを見ると、またさつそく引き抜

いて、もぐもぐ食べだしました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、そのすきをねらって、こんどこそは、だいぶ向

こうまでお遁げになりました。そしてもうこれならだいじょうぶだろうとおぼしめして、ひよいとうしろをふりむいてご覧になりますと、意外にも、こんどはさっきの女神のまわりにいた八人の雷らいじん人どもが、千五百人の鬼の軍勢をひきつれて、死にもぐるいでおっかけて来るではありませんか。

神はそれをご覧になると、あわてて十拳とつかの剣つるぎを抜きはなして、それでもつてうしろをぐんぐん切りまわしながら、それこそいっしょうけんめいにお遁げになりました。そして、ようよう、この世界と黄泉よみの国との境さかいになっている、黄泉比良坂よもつひらざかという坂の下まで遁げのびていらつしやいました。

三

すると、その坂の下には、ももの木が一本ありました。

神はそのももの実を三つ取って、鬼どもが近づいて来るのを待ち受けていらしって、その三つのもものを力いっばいお投げつけになりました。そうすると、雷神たちはびっくりして、みんなちりぢりばらばらに遁^にげてしまいました。

神はそのももに向かつて、

「おまえは、これから先も、日本じゆうの者がだれでも苦しい目に会っているときには、今わしを助けてくれたとおりに、みんな助けてやってくれ」とおっしゃって、わざわざ大^{おおかんつみのみこと}神実命と

いうお名まえをおやりになりました。

そこへ、女神は、とうとうじれったくおぼしめして、こんどはご自分で追っかけていらつしやいました。神はそれをご覧になると、急いでそこにあつた大きな大岩をひっかかえていらつして、それを押しつけて、坂の口をふさいでおしまいになりました。

女神は、その岩にさえぎられて、それより先へは一足も踏み出すことができないものですから、恨めしうらそうに岩をにらみつけながら、

「わが夫の神よ、それではこのしかえしに、日本じゆうの人を一日に千人ずつ絞め殺してゆきますから、そう思つていらつしやいまし」とおつしやいました。神は、

「わが妻の神よ、おまえがそんなひどいことをするなら、わしは日本じゆうに一日に千五百人の子供を生ませるから、いつこうかまわらない」とおつしやつて、そのまま、どんどんこちらへお帰りになりました。

神は、

「ああ、きたないところへ行つた。急いだからだを洗つてけがれを払はらおう」とおつしやつて、日ひゆうが向の国の阿波岐原あわきはらというところへお出かけになりました。

そこにはきれいな川が流れていました。

神はその川の岸へつえをお投げすてになり、それからお帯やお下ばかまや、お上衣うわぎや、お冠かんむりや、右左のお腕うでにはまつた腕輪うでわなど

を、すっかりお取りはずしになりました。そうすると、それだけの物を一つ一つお取りになるたんびに、ひよいひよいと一人ずつ、すべてで十二人の神さまがお生まれになりました。

神は、川の流れをご覧になりながら、

上の瀬は瀬が早い、

下の瀬は瀬が弱い。

とおっしゃって、ちょうどいいころあいの、中ほどの瀬におおりになり、水をかぶって、おからだじゆうをお洗いになりました。すると、おからだについたけがれのために、二人の禍わざわいの神が生ま

れました。それで伊弉諾神は、その神がつくりだす禍をおとりになるために、こんどは三人のよい神さまをお生みになりました。

それから水の底へもぐって、おからだをお清めになるときに、また二人の神さまがお生まれになり、そのつぎに、水の中にござんでお洗いになるときにもお二人、それから水の上へ出ておすそぎになるときにもお二人の神さまがお生まれになりました。そしてしまいに、左の目をお洗いになると、それといっしよに、それは美しい、とうとめがみ 貴い女神がお生まれになりました。

伊弉諾神は、この女神さまにあまてらすおおかみ 天照大神というお名前をおつけになりました。そのつぎに右のお目をお洗いになりますと、

つきよみのみこと 月読命という神さまがお生まれになり、いちばんしまいに

お鼻をお洗いになるときに、たけはやすきのおのみこと 建速須佐之男命 という神さまがお生まれになりました。

伊弉諾神いざなぎのかみはこのお三方さんかたをご覧になつて、

「わしもこれまでいくたりも子供を生んだが、とうとうしまいに、一等よい子供を生んだ」と、それはそれは大喜びををなさいまして、さつそく玉の首くびかざ飾りをおはずしになつて、それをさらさらとゆり鳴らしながら、あまてらすのおかみ 天照大神におあげになりました。そして、

「おまえは天へのぼつてたかまのはら高天原を治めよ」とおっしゃいました。それからつきよみのみこと月読命には、

「おまえは夜の国を治めよ」とお言いつけになり、三ばんめの須す

佐^さ之^の男^み命^{こと}には、
「おまえは^お大^お海^{うみ}の上^のを^を治^ちめよ」とお言^いわ^たし^にな^りま^した。

あめ
 天の岩屋
 いわや

一

あまてらすおおかみ
 天照大神と、二番目の弟さまの
 つきよみのみこと
 月読命とは、おとう
 さまのご命令に従つて、それぞれ大空と夜の国をお治めになり
 ました。

ところが末のお子さまの
 すきのおのみこと
 須佐之男命だけは、おとうさまのお
 おおうみ
 言いつけをお聞きにならないで、いつまでたつても大海を治め

ようとなさらないばかりか、りっぱな長いおひげが胸むねの上までたれさがるほどの、大きなおとなにおなりになっても、やつぱり、赤んぼうのように、絶えまもなくわんわんわんお泣なき狂いになつて、どうにもこうにも手のつけようがありませんでした。そのひどいお泣き方といつたら、それこそ、青い山々の草木も、やかましい泣き声で泣き枯からされてしまい、川や海の水も、その火のつくような泣き声のために、すっかり干ひあがったほどでした。

すると、いろんな悪い神々たちが、そのさわぎにつけこんで、わいわいとうるさくさわぎまわりました。そのおかげで、地の上にはありとあらゆる災わざわいが一どきに起こつてきました。

伊弉いざなぎ諾の命のみことは、それをご覧らんになると、びっくりなすつて、さ

つそく須佐之男命すさのおのみことをお呼びよになつて、

「いつたい、おまえは、わしの言うことも聞かないで、何をそんなに泣き狂つてばかりいるのか」ときびしくおとがめになりました。

すると須佐之男命すさのおのみことはむきになつて、

「私わたしはおかあさまのおそばへ行きたいから泣くなのです」とおつしやいました。

伊弉諾命いざなぎのみことはそれをお聞きになると、たいそうお腹立はらだちになつて、

「そんなかつてな子は、この国へおくわけにゆかない。どこへなりと出て行け」とおつしやいました。

命みことは平氣で、

「それでは、お姉さまにおいとま乞ごいをしてこよう」とおつしやりながら、そのまま大空の上の、高天原たかまのはらをめぎして、どんだんのぼっていらつしやいました。

すると、力の強い、大男みことの命ですから、力いっぱいしんずしんと乱暴らんぼうにお歩きになると、山も川もめりめりとゆるぎだし、世界じゆうがみしみしと震ふるい動きました。

あまてらすおおかみ
天照大神は、その響ひびきにびっくりなすつて、

「弟があんな勢うばいでわたしのぼつて来るのは、必ずただごとではない。きつと私の国を奪うばい取ろうと思つて出て来たに相違そういない」

こうおつしやつて、さつそく、お身じたくをなさいました。女

神はまず急いで髪かみをといて、男まげにおゆいになり、両方のびんと両方の腕うでとに、八尺やさかの曲玉まがたまというりっぱな玉の飾かぎりをおつけになりました。そして、お背中には、五百本、千本というたいそうな矢をお負おいになり、右手に弓を取ってお突きたてになりながら、勢いこんで足を踏ふみならして待ちかまえていらっしやいました。そのきついお力ぶみで、お庭かたの堅い土が、まるで粉雪こなゆきのようにもうもうと飛びちりました。

二

まもなく 須佐之男すさのおのみこと命は 大空へお着きになりました。

女神はそのお姿すがたをご覧らんになると、声を張りあげて、

「命みこと、そちは何をしに来た」と、いきなりおしかりつけになりま
した。すると命は、

「いえ、私はけつして悪いことをしにまいったものではございませ
ん。おとうさまが、私の泣いているのをご覧らんになって、なぜ泣く
かとおとがめになったので、お母上のいらつしやるところへ行き
たいからですと申しあげると、たいそうお怒りおこになって、いきな
り、出て行ってしまえとおっしやるので、あなたにお別れをしに
まいったのです」とお言いわけをなさいました。

でも女神はすぐにはご信用にならないで、

「それではおまえに悪い心のない証しょうこ拠こを見せよ」とおっしやい

ました。みこと命は、

「ではお互いたがに子を生んであかしを立てましょう。生まれた子によつて、二人の心のよしあしがわかります」とおつしやいました。

そこでごきようだいは、あめのやすのかわ天安河かわという河の両方の岸に分

かれてお立ちになりました。そしてまずめがみ女神が、いちばん先に、

みこととつか命の十拳つきの剣をお取りになつて、それを三つに折つて、あめのまない天真名井

という井戸で洗つて、がりがりとおかみになり、ふつときり霧をお吹

きになりますと、そのお息の中から、三人の女神がお生まれになりました。

そのつぎにはみこと命が、女神の左のびんにおかけになつている、八や尺さかの曲玉まがたまの飾りかざりをいただいて、玉の音をからからいわせながら、

あめのまな井あめのまない天真名井まななという井戸で洗います、それをがりがりかんで霧をお吹き出しになりますと、それといつしよに一人の男の神さまがお生まれになりました。その神さまが、あめのおしほみのみこと天忍穂耳命あめのです。それからつぎには、女神の右のびんの玉飾りたまかざりをお取りになつて、先せんと同じようにして息をお吹きになりますと、その中からまた男の神が一人お生まれになりました。

つづいてこんどは、おかずらの玉飾りを受け取つて、やはり真ま名井なで洗つて、がりがりかんで息をお吹きになりますと、その中から、また男の神が一人お生まれになり、いちばんしまいに、女神の右と左のお腕うでの玉飾りをかんで、息をお吹きになりますと、そのたんびに、同じ男神が一人ずつ——これですべてで五人の男

神がお生まれになりました。

あまてらすおおかみ

天照大神は、

「はじめに生まれた三人の女神は、おまえの剣つるぎからできたのだから、おまえの子だ。あとの五人の男神は私の玉飾りわたしからできたのだから、私の子だ」とおっしゃいました。

命は、

「そうら、私が勝った。私になんの悪あくしん心もない印しるしには、私の子は、みんなおとなしい女神ではありませんか。どうです、それでも私は悪人ですか」と、それはそれは大いばりにおいばりになりました。そして、その勢あばいに乗ってお暴れあばだしになって、女神がお作らせになつてゐる田の畔あぜをこわしたり、みぞを埋うめたり、し

まいには女神がお初穂はつほを召めしあがる御殿ごてんへ、うんこをひりちらす
というような、ひどい乱暴らんぼうをなさいました。

ほかの神々は、それを見てあきれてしまつて、女神に言いつけ
にまいりました。

しかし女神はちつともお怒りおこにならないで、

「何、ほつておけ。けつして悪い気でするのではない。きたない
ものは、酔よつたまぎれに吐はいたのであろう。畔あぜやみぞをこわした
のは、せつかくの地面を、そんなみぞなぞにしておくのが惜おしい
からであらう」

こうおつしやつて、かえつて命みことをかばつておあげになりました。
すると命は、ますますず図に乗つて、しまいには、女たちが女神

のお召物めしものを織っている、機織場はたおりばの屋根を破つて、その穴あなから、ぶちのうまの皮をはいで、血まぶれにしたのを、どしんと投げこんだりなさいました。機織女はたおりおんなは、びっくりして遁にげ惑まどうはずみに、おさで下腹したはらを突ついて死んでしまいました。

女神は、命のあまりの乱暴さにととうとういたたまれなくおなりになつて、天あめの岩屋いわやという石室いしむろの中へお隠かくれになりました。そして入口の岩の戸をびっしりとおしめになつたきり、そのままひきこもつていらつしやいました。

すると女神は日の神さまでいらつしやるので、そのお方がお姿すがたをお隠かくしになるといつしよに、高天原たかまのはらも下界の地の上も、一度にみんなまつ暗くらがりになつて、それこそ、昼と夜との区別もない、

長い長いやみの世界になってしまいました。

そうすると、いろいろの悪い神たちが、その暗がりにつけこんで、わいわいとさわぎだしました。そのために、世界じゅうにはありとあらゆる禍わざわいが、一度にわきあがって来ました。

そんなわけで、大空の神々たちは、たいそうお困こまりになりました。て、みんな安河原やすのかわらという、空の上の河原かわらに集まって、どうかして、天照大神に岩屋からお出ましになっていただく方法はあるまいかといっしょうけんめいに、相談をなさいました。

そうすると、思おもいいかねのかみのかみ 金神かみ という、いちばんかしこい神さまが、いいことをお考えつきになりました。

みんなはその神のさしらずで、さっそく、にわとりをどっさり集

めて来て、岩屋の前で、ひつきりなしに鳴かせました。

それから一方では、安河やすのかわの河上から固い岩をはこんで来て、

それを鉄床てつどこにして、八咫やたの鏡かがみというりっぱな鏡を作らせ、八尺やさか

の曲玉まがたまというりっぱな玉で胸飾むなかぎりを作らせました。そして、

天香具山あめのかぐやまという山からさかさきを根抜きぬにして来て、その上の方

の枝えだへ、八尺やさかの曲玉まがたまをつけ、中ほどの枝やたへ八咫かがみの鏡をかけ、下

の枝へは、白や青のきれをつりさげました。そしてある一人の神

さまが、そのさかきを持って天の岩屋に立ち、ほかの一人の神さ

まが、そのそばでのりとをあげました。

それからやはり岩屋の前へ、あきだるを伏ふせて、天受女あめのうずめのみこ

命とという女神に、天香具山あめのかぐやまのかつらのつるをたすきにかけさ

せ、かつらの葉を髪飾りにさせて、そのおけの上へあがつて踊りを踊らせました。

宇受女命は、お乳もお腹も、ももまるだしにして、足をとんとん踏みながら、まるでつきものでもしたように、くるくるくるくと踊り狂いました。

するとそのようすがいかにもおかしいので、何千人という神たちが、一度にどつとふきだして、みんなでころがりまわって笑いました。そこへにわとりは声をそろえて、コツケコー、コツケコーと鳴きたてるので、そのさわぎといったら、まったく耳もつづれるほどでした。

天照大神は、そのたいそうなさわぎの声をお聞きになると、何

ごとが起こつたのかとおぼしめして、岩屋の戸を細めにあけて、そつとのぞいてご覧らんになりました。そして宇受女命うずめのみことに向かつて、「これこれわたし私がここに、隠れていれば、空の上もまっくらなはずだのに、おまえはなにをおもしろがつて踊っているのか。ほかの神々たちも、なんであんなに笑いくずれているのか」とおたずねになりました。

すると宇受女命は、

「それは、あなたよりも、もつととうと貴い神さまが出ていらつしやいましたので、みんなが喜んでさわいでおりますのでございます」と申しあげました。

それと同時に一人の神さまは、例の、八咫やたの鏡かがみをつけたさかき

を、ふいに大神の前へ突き出しました。鏡には、さつと、大神の顔がうつりました。大神はそのうつった顔をご覧になると、「おや、これはだれであろう」とおつしやりながら、もつとよく見ようとおぼしめして、少しばかり戸の外へお出ましになりました。

すると、さつきから、岩屋のそばに隠かくれて待ちかまえていた、手たちからおのみこと力男命という大力の神さまが、いきなり、女神のお手を取つて、すっかり外へお引き出し申しました。それといっしよに、一人の神さまは、女神のおうしろへまわつて、「どうぞ、もうこれからうちへはおはいりくださいませんように」と申しあげて、そこへしめなわを張りわたしてしまいました。

それで世界じゅうは、やっと長い夜があけて、再び明るい昼が来ました。

神々たちは、それでようやく安心なさいました。そこでさつそく、みんなで相談して、須佐之男命すさのおのみことには、あんなひどい乱暴らんぼうをなすつた罰ばつとして、ご身代をすっかりさし出させ、そのうえに、りっぱなおひげも切りとり、手足の爪つめまではぎとつて、下界へ追いかだしてしまいました。

そのとき、須佐之男命すさのおのみことは、おおけつひめのみこと、大気都比売命おおけつひめのみことという女神に、何か物を食べさせよとおおせになりました。おおけつひめのみこと、おことばに従つて、さつそく、鼻の穴あなや口の中からいろいろの食べものを出して、それをいろいろにお料理してさしあげました。

すると須佐之男命すさのおのみことは 大氣都比売命おおけつひめのみことのすることを見ていらし
つて、

「こら、そんな、お前の口や鼻から出したものがおれに食えるか。
無礼なやつだ」と、たいそうお腹立はらだちになつて、いきなり劍を抜
いて、おおけつひめのみこと大氣都比売命をうちに切り殺しておしまいになりまし
た。

そうすると、その死がいの頭から、かいこが生まれ、両方の目
にいねがなり、二つの耳にあわがなりました。それから鼻にはあ
ずきがなり、おなかに、むぎとだいずがなりました。

それを神産靈神かみむすびのかみがお取り集めになつて、日本じゅうの穀こくも
物の種になさいました。

須^す佐^さ之^の男^お命^の
命^{みこと}は、
そのままた下界へおりておいでになりました。

やまた
八俣のおろち
の大蛇

一

すさのおのみこと
須佐之男命は、大空から追いおろされて、出雲いずもの国の、肥ひの
河かわの河上かわかみの、鳥髪とりかみというところへおくだりになりました。

すると、その河かわの中にはしが流れて来ました。命みことは、それをご
覧らんになつて、

「では、この河の上の方には人が住んでいるな」とお察しになり、

さつそくそちらの方へ向かつて探し探^{さが}し探^{さが}しおいでになりました。そうすると、あるおじいさんとおばあさんが、まん中に一人の娘^{むすめ}をすわらせて三人でおんおん泣^ないておりました。

命は、おまえたちは何者かとおたずねになりました。

おじいさんは、

「私は、この国の大山津見^{おおやまつみ}と申します神の子で、足名椎^{あしなずち}と申します者でございます。妻の名は手名椎^{てなずち}、この娘の名は櫛名田媛^{くしなだひめ}と申します」とお答えいたしました。

命は、

「それで三人ともどうして泣いているのか」と、かさねてお聞きになりました。

おじいさんは涙をふいて、

「私たち二人には、もとは八人の娘むすめがおりましたのでございますが、その娘たちを、八俣やまたの大蛇おろちと申します怖おそろしい大じやが、毎年出てきて、一人ずつ食べて行つてしまひまして、とうとうこの子一人だけになりました。そういうこの子も、今にその大じやが食くべにまいりますのでございます」

こう言つて、みんなが泣いているわけをお話いたしました。「いったいその大じやはどんな形をしている」と、命みことはお聞きになりました。

「その大じやと申しますのは、からだは一つでございしますが、頭と尾おは八つにわかれておりまして、その八つの頭には、赤ほおず

きのようなまつかな目が、燃えるように光っております。それからからだじゅうには、こげや、ひのきやすぎの木などがはえ茂しげつております。そのからだのすつかりの長さが、八つの谷と八つの山のすそをとりまくほどの、大きな大きな大じやでございます。その腹はらはいつも血にただれてまつかになっております」と怖ろしそうにお話しいたしました。命は、

「ふん、よしよし」とおうなずきになりました。そして改めておじいさんに向かって、

「その娘はおまえの子ならば、わしのお嫁よめにけれないか」とおっしゃいました。

「おことばではございますが、あなたさまはどこのだなただか存

「じませんで」とおじいさんは危あやぶんで怖る怖るこう申しました。命は、

「じつはおれは天照大神あまてらすおおかみの同じ腹はらの弟で、たった今、大空からおりて来たばかりだ」と、うちあけてお名まえをおっしゃいました。すると、足名あしなずち権も手名てなずち権も、

「さようでございますか。これはこれはおそれおおい。それでは、おおせのままさしあげますでございます」と、両手について申しあげました。

命は、櫛くし名な田た媛ひめをおもらいになると、たちまち媛をくしに化けさせておしまいになりました。そして、そのくしをすぐにご自分のびんの巻まき髪がみにおさしになって、足名あしなずち権と手名てなずち権に向かつて

おっしやいました。

「おまえたちは、これからこめをかんで、よい酒をどつさり作れ。それから、ここへぐるりとかきをこしらえて、そのかきへ、八ところに門をあけよ。そしてその門のうちへ、一つずつさじきをこしらえて、そのさじきの上に、大おけを一つずつおいて、その中へ、二人でこしらえたよい酒を一ぱい入れて待つておれ」とお言いつけになりました。

二人は、おおせのとおりに、すっかり準備をととのえて、待つておりました。そのうちに、そろそろ大じやの出て来る時間が近づいて来ました。

命は、それを聞いて、じつと待ちかまえていらっしやいますと、

まもなく、二人が言ったように、大きな大きな八俣やまたの大蛇おろちが、大きなまつかな目をぎらぎら光らして、のそのそと出て来ました。

大じやは、目の前に八つの酒さかおけが並ならんでいるのを見ると、いきなり八つの頭を一つずつその中へつつこんで、そのたいそうなお酒を、がぶがぶがぶとまたたくまに飲み干ほしてしまいました。そうするとまもなくからだじゆうによいがまわって、その場へ倒れたなり、ぐうぐう寝ねいつてしまいました。

すさのおのみこと

須佐之男命すさのおのみことは、そつとその寢息ねいきをうかがっていらつしやい

ましたが、やがて、さあ今だとお思いになつて、十拳とつかの劍つるぎを引き抜ぬくが早いか、おのれ、おのれと、つづけさまにお切りつけになりました。そのうちに八つの尾おの中の、中ほどの尾をお切りつけに

なりますと、その尾の中に何か固かたい物があつて、劍の刃先はさきが、少しばかりほろりと欠けました。

みこと
命は、

「おや、変だな」とおぼしめして、そのところを切り裂さいてご覧になりますと、中から、それはそれは刃の鋭い、りっぱな劍が出て来ました。命は、これはふしぎなものが手にはいったとお思ひになりました。その劍はのちに天照大神あまてらすおおかみへご献けんじよう上じようになりました。

命はどうとう、大きな大きな大じやの胴体をずたずたに切り刻きざんでおしまいになりました。そして、

「足名あしなずち椎ち、手名てなずち椎ち、来て見よ。このとおりだ」とお呼びよになり

ました。

二人はがたがたふるえながら出て来ますと、そこいら一面は、きれぎれになつた大じやの胴体から吹き出る血でいっぱいになつておりました。その血がどンドン肥ひの河かわへ流れこんで、河の水もまっかになつて落ちて行きました。

命はそれから、櫛くし名な田だ媛ひめとお二人で、そのまま出雲いずもの国にお住まいになるおつもりで、御殿ごてんをおたてになるところを、そちこちと、探さがしてお歩きになりました。そして、しまいに、須加すかといふところまでおいでになると、

「ああ、ここへ来たら、心持がせいせいしてきた。これはよいところだ」とおっしゃって、そこへ御殿をおたてになりました。そ

して、足名椎神あしなづちのかみをそのお宮の役人の頭かしらになさいました。

命にはつぎつぎにお子さまお孫さまがどんどんおできになりました。その八代目のお孫さまのお子さまに、大穴牟遲神おおなむちのかみとおっしゃるりっぱな神さまがお生まれになりました。

大國主神おおくにぬしのかみ、また

むかでの室、へびの室

一

この大^{おお}国^{くに}主^{ぬし}神^{のかみ}には、八十^{やそ}神^{がみ}と行って、何^{なに}十^{じゅう}人^{にん}というほどの、
お^おお^おぜ^ぜい^いの^のご^ごき^きよ^よう^うだ^{だい}い^いが^がお^おあ^あり^りに^にな^なり^りま^まし^した。

その八十^{やそ}神^{がみ}たちは、因^{いな}幡^{はた}の^の国^{くに}に、八^や上^{がみ}媛^{ひめ}という美^{うつく}しい女^{むすめ}の人^{ひと}
が^がい^いる^ると^と聞^きき、み^みん^んな^なて^てん^んで^でに^に、自^{みづか}分^かの^のお^お嫁^{よめ}に^にも^もら^らお^おう^うと^と思^{おも}っ
て、一^{いっ}同^{どう}で^でつ^つれ^れだ^だつ^つて、は^はる^るば^ばる^る因^{いな}幡^{はた}へ^へ出^でか^かけ^けて^て行^いき^きま^まし^した。

みんなは、大国主神が、おとなしいかたなのをよいことにして、このかたをお供ともの代わりに使って、袋ふくろを背おわせてついて来させました。そして、因幡の気多けたという海岸まで来ますと、そこに毛のないあか裸はだかのうさぎが、地べたにころがって、苦しそうにからだじゅうで息をしております。

八十神やそがみたちはそれを見ると、

「おいうさぎよ。おまえからだに毛がはやしたければ、この海の潮しおにつかかって、高い山の上で風に吹かれて寝ねておれ。そうすれば、すぐに毛がいつぱいはえるよ」とからかいました。うさぎはそれをほんとうにして、さつそく海につかかって、ずぶぬれになって、よちよちと山へのぼって、そのまま寝ころんでおりました。

するとその潮しおみず水がかわくにつれて、からだじゅうの皮がひきつれて、びりびり裂さけ破れました。うさぎはそのひりひりする、ひどい痛いたみにたまりかねて、おんおん泣なき伏ふしておりました。そうすると、いちばんあとからお通りかかりになった、お供の大国主神がそれをご覧らんになつて、

「おいおいうさぎさん、どうしてそんなに泣いているの」とやさしく聞いてくださいました。

うさぎは泣なき泣なき、

「私は、もと隠おき岐の島におりましたうさぎでございしますが、この本土へ渡わたろうと思ひましても、渡るてだてがございせんものですから、海の中のわにをだまして、いったい、おまえとわしとど

つちがみうちが多いだろう、ひとつくらべてみようじゃないか、おまえはいるだけのけん族をすっかりつれて来て、ここから、あの向こうのはての、けた気多のみさきまでずっとなら並んでみよ、そうすればおれがその背中せの上をつたわって、かぞえてやろうと申しました。

すると、わにはすっかりだまされまして、出てまいりますもま
いりますも、それはそれは、うようよと、まつくろに集まってま
いりました。そして、私の申しましたとおりに、この海ばたまで
ずらりと一列に並びました。

私は五八十と数をよみながら、その背なかの上をどんどん渡
って、もう一足でこの海ばたへ上がろうといたしますときに、や

あいまぬけのわにめ、うまくおれにだまされたアいとはやしたて
ますと、いちばんしまいにおりましたわにが、むつと怒おこつて、い
きなり私をつかまえて、このとおりにすつかりきものをひっ
ぺがしてしまいました。

そこであるところへ伏ふしころんで泣ないておりましたら、さ
きほどここをお通りになりました八十神やそがみたちが、いいことを教え
てやろう、これこれこうしてみろとおっしゃいましたので、その
とおりに潮水しおみずを浴びて風に吹かれておりますと、からだじゅう
の皮がこわばって、こんなにびりびり裂さけてしまいました」

こう言つて、うさぎはおんおん泣きだしました。

おおくにぬしのかみ

大國主神は、話を聞いてかわいそうだとおぼしめして、

「それでは早くあすこの川口へ行つて、ま水でからだじゆうをよく洗つて、そこいらにあるかばの花をむしつて、それを下に敷いて寝ねころんでいてごらん。そうすれば、ちゃんともとのとおりになおるから」

こう言つて、教えておやりになりました。うさぎはそれを聞く
とたいそう喜んでお礼を申しました。そしてそのあとで言いまし
た。

「あんなお人の悪い八十神やそがみたちは、けつして八上媛やがみひめをご自分の
ものになさることはできません。あなたは袋ふくろなどをおしよいな
つて、お供ともについていらつしやいますけれど、八上媛はきつと、
あなたのお嫁よめさまになると申します。みていてごらんさいまし」

と申しました。

まもなく、八十神たちは八上媛のところへ着きました。そして、代わる代わる、自分のお嫁になれなれと言いましたが、媛ひめはそれをいちいちはねつけて、

「いえいえ、いくらお言いになりました、あなたがたのご自由にはなりません。私は、あそこいらつしやる大国主神のお嫁にしていたくのです」と申しました。

八十神たちはそれを聞くとたいそう怒おこつて、みんなで大国主神を殺してしまおうという相談をきめました。

みんなは、大国主神を、伯耆ほうきの国の手間てまの山という山の下へつれて行って、

「この山には赤いいのししがいる。これからわたしたちが山の上からそのいのししを追いおろすから、おまえは下にいてつかまえろ。へたをして遁にがしたらおまえを殺してしまうぞ」と、言いわたししました。そして急いで、山の上へかけあがって、さかんにたき火をこしらえて、その火の中で、いのししのようなかつこうをして、いる大きな石をまっかに焼いて、

「そうら、つかまえろ」と言いながら、どしんと、転ころがし落としました。

ふもとで待ち受けていらした大国主神は、それをご覧になるなり、大急ぎでかけ寄って、力まかせにお組みつきになったと思いますと、からだはたちまちそのあか焼けの石の膚はだにこびりつい

て、

「あツ」とお言いになつたきり、そのままただれ死にに死んでおしまひになりました。

二

大國主神の生みのおかあさまは、それをお聞きになると、たいそうお嘆なげきになつて、泣なき泣なき大空へかけのぼつて、高たかまの天原においでになる、高たかみむすびのかみ皇産靈神にお助けをお願いになりました。すると、高たかみむすびのかみ皇産靈神は、蚶きさがいひめ貝媛、蛤うむがいひめ貝媛と名のついた、

あかがいとほまぐりの二人の貝を、すぐに下界へおくだしになり

ました。

二人は大急ぎでおりて見ますと、おおくにぬしのかみ 大國主神はまつくろこげになつて、山のすそに倒たおれていらつしやいました。あかがいはさつそく自分のからを削けずつて、それを焼いて黒い粉をこしらえました。はまぐりは急いで水を出して、その黒い粉をこねて、おちちのようにどろどろにして、二人で大國主神のからだじゆうへ塗ぬりつけました。

そうすると大國主神は、それほどの大やけどもたちまちなおつて、もとのとおりの、きれいな若い神になつてお起きあがりになりました。そしてどんどん歩いてお家うちへ歸つていらつしやいました。

八十神^{やそがみ}たちは、それを見ると、びつくりして、もう一度みんな

でひそひそ相談をはじめました。そしてまたじょうずに大国主神をだまして、こんどは別の山の中へつれこみました。そしてみんなで寄つてたかつて、ある大きなたち木を根もとから切りまげて、その切れ目へくさびをうちこんで、その間へ大国主神をはいらせました。そうしておいて、ふいにポンとくさびを打ちはなして、はさみ殺しに殺してしまいました。

大国主神のおかあさまは、若い子の神がまたいなくなつたので、おどろいて方々さがしておまわりになりました。そして、しまいにまた殺されていらつしやるところをおみつけになると、大急ぎで木の幹を切り開いて、子の神のお死がいをお引き出しになります。

した。そしていっしょうけんめいに介抱かいほうして、ようようのことで再びお生きかえらせになりました。おかあさまは、

「もうおまえはうかうかこの土地においてはおかれぬ。どうぞこれからすぐに、須佐之男命すさのおのみことのおいになる、根堅国ねのかたすくにへ遁にげておくれ、そうすれば命が必ずいいようにはからってくださいから」

こう言つて、若い子わかの神を、そのままそちらへ立つてお行かせになりました。

大国主神は、言われたとおりに、命のおいでになるところへお着きになりました。すると、命のお娘むすめの須勢理媛すぜりひめがお取次をなすつて、

「お父上さま、きれいな神がいらっしやいました」とお言いになりました。

お父上の大神おおかみは、それをお聞きになると、急いでご自分で出てご覧になって、

「ああ、あれは、大国主という神だ」とおっしやいました。そして、さつそくお呼びよいれになりました。

媛ひめは大国主神のことをほんとに美しいよい方だとすぐに大すきにお思ひになりました。大神には、第一それがお氣にめしませんでした。それで、ひとつこの若い神を困こまらせてやろうとお思ひになつて、その晩、大国主神を、へびの室むろといつて、大へび小へびがいつぱいたかつているきみの悪いおへやへお寝ねかせになりました

た。

そうすると、やさしい須勢理媛すぜりひめは、たいそう気の毒にお思ひになりました。それでご自分の、比礼ひれといつて、肩かけかたのように使うきれを、そつと大国主神におわたしになつて、

「もしへびがくいつきにまいりましたら、このきれを三度振ふつて追いのけておしまいなさい」とおつしやいました。

まもなく、へびはみんなでかま首を立ててぞろぞろとむかつて

来おおくにぬしのかみました。大国主神はさつそく言われたとおりに、飾かざりのき

れを三度お振ふりになりました。するとふしぎにも、へびはひとり
でにひきかえして、そのままじつとかたまつたなり、一晚じゆう、
なんにも害をしませんでした。若い神わかはおかげで、気らくにくつ

すりおよつて、朝になると、あたりまえの顔をして、おおかみ大神の前に出ていらつしやいました。

すると大神は、その晩はむかでとはちのいっばいはいつているおへやへお寝かせになりました。しかしひめ媛が、またこつそりと、ほかの首飾りのきれをわたしてくだすつたので、大国主神は、その晩もそれでむかでやはちを追いはらつて、また一晩じゆうらくらくとおやすみになりました。

大神は、大国主神がふた晩とも、平気で切りぬけてきたので、よし、それではこんどこそは見ておれと、心の中でおつしやりながら、かぶら矢やと言つて、矢じりにあな穴があいていて、射いるとびゆんびゆんと鳴る、こわい大きな矢を、草のぼうぼうとはえのびた、

広い野原のまん中にお射こみになりました。そして、大国主神に向かつて、

「さあ、今飛んだ矢を拾つて来い」とおおせつけになりました。

若い神は、しょうじき正直にご命令を聞いて、すぐに草をかき分けて

どんだんはいつておいでになりました。大神はそれを見すまして、ふいに、その野のまわりへぐるりと火をつけて、どんだんお焼きたてになりました。大国主神は、おやと思うまに、たちまち四方から火の手におかこまれになつて、すっかり遁げ場を失つておしまいになりました。それで、どうしたらいいかとびっくりして、とまどいをしていらつしやいますと、そこへ一ぴきのねずみが出て来まして、

「うちはほらほら、そとはすぶすぶ」と言いました。それは、中は、がらんどうで、外はすぼまつている、という意味でした。

若い神は、すぐそのわけをおさとりになって、足の下を、とんときつく踏^ふんでごらんになりますと、そこは、ちゃんと下が大きな穴になっていたので、からだごとすつぽりとその中へ落ちこみました。それで、じつとそのままごまつて隠れていらつしやいますと、やがてま近まで燃えて来た火の手は、その穴の上を走つて、向こうへ遠のいてしまいました。

そのうちに、さっきのねずみが大神のお射になったかぶら矢をちやんとさがし出して、口にくわえて持つて来てくれました。見るとその矢の羽根のところは、いつのまにかねずみの子供たちが

かじつてすつかり食べてしまつておりました。

三

須勢理媛すぜりひめは、そんなことはちつともご存じないものですから、美しい若い神は、きつと焼け死んだものとお思ひになつて、ひとりで嘆なげき悲しんでいらつしやいました。そして火が消えるとすぐに、急いでお弔とむらいの道具を持つて、泣なき泣なきさがしにいらつしやいました。

お父上の大神の、こんどこそはだいじょうぶ死んだらうとお思ひになつて、媛のあとからいらしつてごらんになりました。

すると大^{おおく}国^{くに}主^{ぬし}神^{のかみ}は、もとのお姿^{すがた}のまままで、焼けあとのなかから出ていらつしやいました。そしてさつきのかぶら矢をちやんとお手におわたしになりました。

^{おおかみ}大神

もこれには内^{ない}々^{ない}々^{ない}びつくりしておしまいになりました、

しかたなくいつしよに御^ご殿^{てん}へおかえりになりました。そして大きな広間へつれておはいりになつて、そこへごろりと横におなりになつたと思うと、

「おい、おれの頭のしらみを取れ」と、いきなりおつしやいました。

大国主神はかしまつて、その長い長いお髪^{ぐし}の毛をかき分けてご覧になりますと、その中には、しらみでなくて、たくさんなむ

かだが、うようよたかつておりました。

すると、須勢理媛すぜりひめがそばへ来て、こつそりとむくの実と赤土とをわたしてお行きになりました。

大国主神は、そのむくの実を一粒ひとつぶずつかみください、赤土を少しずつかみとかしては、いっしょにぷいぷいお吐はき出しになりました。大神はそれをご覧になると、

「ほほう、むかでをいちいちかみつぶしているな。これは感心なやつだ」とお思いになりながら、安心して、すやすやと寝いっておしまいになりました。

大国主神は、この上ここにぐずぐずしていると、まだまだどんなめに会うかわからないとお思いになって、命みことがちようどぐうぐ

うおやすみになつてゐるのをさいわいに、その長いお髪ぐしをいく束たばにも分けて、それを四方のたる木というたる木へ一束ずつ縛りしばつけておいたうえ、五百人もかからねば動かせないような、大きな大きな大岩を、そつと戸口に立てかけて、中から出られないようにしておいて、大神おおかみの太刀たちと弓矢ゆみやと、玉の飾りのついた貴い琴とうとこととをひつ抱かかえるなり、急いで須勢理媛すぜりひめを背なかにおぶつて、そつと御殿をお逃にげ出しになりました。

するとまの悪いことに、抱えていらつしやる琴が、樹きの幹にぶつかつて、じやらじやらじやらんとたいそうなひびきを立てて鳴りました。

大神はその音におどろいて、むつくりとお立ちあがりになりま

した。すると、おぐしがたる木じゆうへ縛りつけてあつたのですから、おおぢから大 力のある大神がふいにお立ちになるといつしよに、そのおへやはいきなりめりめりと倒れたおつぶれてしまいました。

大神は、

「おのれ、あの小僧こぞうツ神め」と、それはそれはお怒いかりになって、髪かみの毛をひと束ずつ、もどかしく解きはなしていらつしやるまに、こちらの大国主神はいつしようけんめいにかけてつづけて、すばやく遠くまで逃げのびていらつしやいました。

すると大神は、まもなくそのあとを追っかけて、とうとう黄泉よも比良坂つひらぎかという坂の上までかけつけていらつしやいました。そしてそこから、はるかに大国主神を呼びかけて、大声をしぼってこ

うおっしやいました。

「おおいおおい、小僧ツ神。その太刀と弓矢をもつて、そちのきようだいの八十神やそがみどもを、山の下、川の中と、逃げるところへ追いつめ切りはら払い、そちが国の神の頭かしらになって、宇迦うかの山のふもとに御殿を立てて住め。わしのその娘むすめはおまえのお嫁よめにくれてやる。わかつたか」とおどなりになりました。

大國おおくにぬしのかみ主神おおくにぬしのかみはおおせのとおりに、改めていただいた、大神おおかみの太刀たちと弓矢ゆみやを持って、八十神やそがみたちを討うちにいらつしやいました。そして、みんながちりぢりに逃にげまわるのを追つかけて、そこいらじゅうの坂の下や川の中へ、切り倒たおし突つき落として、とうとう一人ももらさず亡ほろぼしておしまになりました。そして、国の神

の頭かしらになつて、宇迦うかの山の下に御殿ごてんをおたてになり、須勢理媛すぜりひめと二人で楽しくおくらしになりました。

四

そのうちに例の八上やがみひめ媛は、大国主神をしたつて、はるばるたずねて来ましたが、その大国主神には、もう須勢理媛すぜりひめというりつぱなお嫁よめさまができていたので、しおしおと、またおうちへ帰つて行きました。

大国主神はそれからなお順々に四方を平らげて、だんだんと国を広げておゆきになりました。そうしているうちに、ある日、出い

雲すもの国の御大みおの崎さきという海うみばたにいつていらつしやいますと、はるか向こうの海の上から、一人の小さな小さな神が、お供の者たちといっしょに、どんどんこちらへ向かつて船をこぎよせて来ました。その乗っている船は、ががいもという、小さな草の実で、着ている着物は、ひとりむしの皮を丸はぎにしたものでした。

大国主神は、その神に向かつて、

「あなたはどなたですか」とおたずねになりました。しかし、その神は口を閉とじたまま名まえをあかしてくれませんでした。大国主神はご自分のお供の神たちに聞いてご覧になりましたが、みんなその神がだれだかけんとうがつきませんでした。

するとそこへひきがえるがのこのこ出て来まして、

「あの神のことは久延彦くえびこならきつと存じておりますでしょう」と言いました。久延彦というのは山の田に立っているかかしました。久延彦くえびこは足がきかないので、ひと足も歩くことはできませんでしたけれど、それでいて、この下界のことはなんでもすつかり知っております。

それで大國主神は急いでその久延彦くえびこにお聞きになりますと、

「ああ、あの神は大空においでになる神かみむすびのかみ産靈神かみむすびのかみのお子さままで、すくなびすくなびこなこなのかみかみ少名毘古那神とおっしゃる方でございます」と答えました。大國主神はそれでさつそく、神かみむすびのかみ産靈神かみむすびのかみにお伺いうかがになりますと、神も、

「あれはたしかにわしの子だ」とおっしゃいました。そして改め

て少名毘古那神に向かつて、

「おまえは大国主神ときようだいになつて二人で国々を開き固め
て行け」とおおせつけになりました。

大国主神は、そのお言葉に従つて、少名毘古那神とお二人で、

だんだんに国を作り開いておゆきになりました。ところが、少名
毘古那神は、あとになると、急に常世国とこよのくにという、海に向こうの

遠い国へ行つておしまいになりました。

大国主神はがっかりなすつて、私一人では、とても思ひど

おりに国を開いてゆくことはできない、だれか力を添そえてくれる
神はいないものかと言つて、たいそうしおれていらつしやいまし
た。

するとちようどそのとき、一人の神さまが、海の上一面にきらきらと光を放ちながら、こちらへ向かつて近づいていらつしやいました。それは須佐之男命すさのおのみことのお子の大年神おおとしのかみというお方でした。その神が、大国主神に向かつて、

「私をよく大事にまつておくれなら、いつしよになつて国を作りにかためあげよう。おまえさん一人ではとてもできはしないと、こう言つてくださいました。

「それではどんなふうにおまつり申せばいいのでございますか」とお聞きになりますと、

「大和の御諸やまとみもろの山の上になつてくれればよい」とおつしやいました。

大国主神はお言葉ことばのとおりごとに、そこへおまつりして、その神さまと二人でまただんだんに国を広げておゆきになりました。

きじのお使つかい

一

そのうちに大空の天照大神は、お子さまの天忍穂耳あめのおしほみみのみ
命ことに向かつて、

「下界に見える、あの豊葦原水穗国とよあしはらのみずほのくには、おまえが治めるべき国である」とおっしゃって、すぐにくだつて行くように、お言いつけになりました。命みことはかしまつておりていらつしやいまし

た。しかし天あめの浮橋うきはしの上までおいでになって、そこからお見おろしになりますと、下では勢いの強い神たちが、てんでんに暴れあばまわって、大きわざをしているのが見えました。命は急いでひきかえしていらして、そのことを大神にお話しになりました。

それで大神と高皇産靈神たかみむすびのかみとは、さつそく天あめ安やす河のの河原のに、おおぜいの神々をすつかりお召めし集めになって、

「あの水穂国みずほのくには、私たちの子孫しそんが治めるはずの国であるのに、今あすこには、悪強い神たちが勢い鋭く荒れまわっている。あの神たちを、おとなしくこちらの言うとおりにさせるには、いったいだれを使いに行ったものであろう」とこうおっしゃって、みんなにご相談をなさいました。

すると例のいちばん考え深い思おもいかねのかみ金かね神かみが、みんなと会議をして、

「それには天あめのほひのかみ菩ぼ比ひ神かみをおつかわしになりますますがよろしゅうございましょう」と申しあげました。そこで大神は、さっそくその菩ぼ比ひ神かみをおくだしになりました。

ところが菩ぼ比ひ神かみは、下界へつくと、それなり大おおくにぬしのかみ国くに主ぬし神かみの手下になってしまつて、三年たつても、大空へはなんのご返事もいたしませんでした。

それで大神と高たかみむすびのかみ皇み産うぶ靈たま神かみとは、またおおぜいの神々をお召めしになつて、

「菩ぼ比ひ神かみがまだ帰つてこないが、こんどはだれをやつたらよい

であろう」と、おたずねになりました。

おもいかねのかみ
思金神は、

「それでは、あまつくにたまのかみ天津国玉神の子の、あめのわかひこ天若日子がよろしゆうございましょう」と、お答え申しました。

大神はその言葉に従つて、あめのわかひこ天若日子にりっぱな弓と矢をお授けになつて、それを持たせて下界へおくだしになりました。

するとその若日子は大空にちやんとほんとうのお嫁があるのに、下へおり着くといつしよに、おおくにぬしのかみ大国主神の娘のしたてるひめ下照比売をまたお嫁にもらつたばかりか、ゆくゆくはみずほのくに水穗国を自分が取つてしまおうという腹で、とうとう八年たつても大神の方へはてんでご返事にも帰りませんでした。

大神と たかみむすびのかみ 高皇産靈神 とは、また神々をお集めになつて、

「二度めにつかわした天若日子もまたとうとう帰つてこない。いつたいてうしてこんなにいづまでも下界にいるのか、それを責めただしてこさせたいと思うが、だれをやつたものであろう」とお聞きになりました。

おもいかねのかみ 思金神は、

「それでは名鳴女 ななきめ というきじがよろしゆうございましょう」と申しあげました。大神たちお二人はそのきじをお召 め しになつて、

「おまえはこれから行つて天若日子 あめのわかひこ を責めてこい。そちを水 みずほ

のくに 穂国へおくりだしになつたのは、この国の神どもを説き伏せるためではないか、それなのに、なぜ八年たつてもご返事をしない

のか、と言って、そのわけを聞きただしてこい」とお言いつけになりました。

名鳴女は、はるばると大空からおりて、天若日子のうちの門のそばの、かえでの木の上にとまって、大神からおおせつかつたとおりをすっかり言いました。

すると若日子のところに使われている、天あめの佐具さくめ売という女が、その言葉を聞いて、

「あすこに、いやな鳴き声を出す鳥がおります。早く射いておしまいなさいまし」と若日子にすすめました。

若日子は、

「ようし」と言いながら、かねて大神からいただいた来てゆみた弓と矢や

を取り出して、いきなりそのきじを射殺してしまいました。すると、その当たった矢が名鳴女の胸むねを突き通して、さかさまに大空の上までねあがって、天あめ安やす河かわの河原かわらにおいてになる、天あ照あ大神あまのわかしこと高皇産靈神たかみむすびのかみとのおそばへ落ちました。

根ねに血ちがついておりました。

高皇産靈神は、

「この矢は天若日子あめのわかひこにつかわした矢だが」とおっしゃって、みんなの神々にお見せになった後、

「もしこの矢が、若日子が悪い神たちを射たのが飛んで来たのなら、若日子にはあたるな。もし若日子が悪い心をいだいている

なら、かれを射殺せよ」とおつしやりながら、さきほどの矢が通つて来た空の穴あなから、力いっぱいにお突きおろしになりました。

そうするとその矢は、若日子がちようど下界であおむきに寝ねていた胸のまん中を、ぷすりと突き刺さして一ぺんで殺してしまいました。

若日子のお嫁よめの下照比売したてるひめは、びっくりして、大声をあげて泣なきさわぎました。

その泣く声が風にはこぼれて、大空まで聞こえて来ますと、若日子の父の天津国玉神あまつくにたまのかみと、若日子のほんとうのお嫁と子供たちがそれを聞きつけて、びっくりして、下界へおりて来ました、そして泣き泣きそこへ喪屋もやといって、死人を寝かせておく小屋を

こしらえて、くもつ がんを供物をささげる役に、さぎをほうき持ちに、かわせみをお供えの魚取りにやとい、そな さかな すぐめをお供えのこめつきに呼び、よ きじを泣き役につれて来て、ようかよぼん 八日八晩の間、若日子の死がいのそばで楽器をならして、たましいなぐさ 死んだ魂を慰めておりました。

そうしているところへ、おおくにぬしのかみ 大國主神の子で、したてるひめ 下照比売のおおにいさまの たかひこねのかみ 高日子根神が くや お悔みに来ました。そうすると若日子の父と妻子つまこたちは、

「おや」とびつくりして、その神の手足にとりすがりながら、

「まあまあおまえは生きていたのか」

「まあ、あなたは死なないでいてくださいましたか」と言つて、
みんなでおんおんと嬉し泣きに泣きだしました。それは高日子たかひこねの

根神かみの顔すがたや姿あめが天若日子のわかひこにそっくりだったので、みんなは—
も二もなく若日子だとばかり思ってしまったのでした。

すると高日子根神は、

「何をふざけるのだ」とまっかになつて怒りだして、

「人がわざわざ悔くやみに来たのに、それをきたない死人などといつしよにするやつがどこにある」とどなりつけながら、長い剣つるぎを抜きはなすといつしよに、その喪屋もやをめちやめちやに切り倒し、足でほんぽんけりちらかして、ぷんぷん怒つて行つてしまいました。そのとき妹の下照比売したてるひめは、あの美しい若い神は私のおあにいさまの、これこれこういう方だということを、歌に歌つて、誇ほこりがおに若日子の父や妻子に知らせました。

二

あまてらすおおかみ
天照大神は、そんなわけで、また神々に向かつて、こんど

というこんどはだれを遣わしたらよいかとご相談をなさいました。

おもいかねのかみ
思金神とすべての神々は、

「それではいよいよ、天安河の河上の、天の岩屋におり

ます尾羽張神か、それでなければ、その神の子の建御雷神

か、二人のうちどちらかをお遣しになるほかはございません。し

かし尾羽張神は、天安河の水をせきあげて、道を通れないように

しておりますから、めったな神では、ちよつと呼びにもまいれま

せん。これはひとつあめのかくのかみ天迦久神をおさしむけになりました、尾羽張神がなんと申しますか聞かせてご覧になるがようございましょう」と申しあげました。

大神はそれをお聞きになると、急いであめのかくのかみ天迦久神をおやりになつてお聞かせになりました。

そうするとおはぼりのかみ尾羽張神は、

「これは、わざわざもつたいない。その使いには私でもすぐにま
いりますが、それよりも、こんなことにかけては、私の子の
たけみかずちのかみ建御雷神がいつとうお役に立ちますかと存じます」

こう言つて、さつそくその神を大神のご前ぜんへうかがわせました。

大神はその建御雷神に、あめのとりふねのかみ天鳥船神という神をつけておく

だしになりました。

二人の神はまもなく出雲いずものくに国の伊那佐いなさという浜にくだりつきました。そしてお互いたがに長い剣つるぎをずらりと抜きぬ放はなして、それを海の上にあおむけに突き立てて、そのきつさきの上にあぐらをかきなから、おおくにぬしのかみ大国主神に談判をしました。

「わたしたちは天照大神あまてらすおおかみと高皇産靈神たかみむすびのかみとのご命令で、わざわざお使いにまいったのである。大神はおまえが治めているこの葦あ原しはらの中なかつ国くには、大神のお子さまのお治めになる国だとおっしゃっている。そのおおせに従って大神のお子さまにこの国をすつかりお譲りゆずなさるか。それともいやだとお言いか」と聞きますと、おおくにぬしのかみ大国主神は、

「これは私からはなんともお答え申しかねます。私よりも、むすこの八重事代主神やえことしろぬしのかみが、とかくのご返事を申しあげますでございませうが、あいにくただいま御大の崎みおささきへりようにまいつておりますので」とおつしやいました。

建御雷神たけみかづちのかみはそれを聞くと、すぐに天鳥船神あめのとりふねのかみを御大の崎ささきへやつて、事代主神ことしろぬしのかみを呼んで来させました。そして大国主神に言ったとおりのことを話しました。

すると事代主神は、父の神に向かつて、

「まことにもつたいないおおせです。お言葉ことばのとおり、この国は大空の神さまのお子さまにおあげなさいまし」と言いながら、自分の乗って帰った船を踏み傾ふかたむけて、おまじないの手打ちをします

と、その船はたちまち、青いいけがきに変わってしまいました。

事代主神はそのいけがきの中へ急いでからだをかくしてしまいました。

たけみかずちのかみ
建御雷神は大国主神に向かつて、

「ただ今事代主神はあのとおりに申したが、このほかには、もうちがった意見を持っている子はいないか」とたずねました。

大国主神は、

「私の子は事代主神のほかにもう一人、たけみなかたのかみ建御名方神というも

のがおります。もうそれきりでございます」とお答えになりました。

そうしているところへ、ちようどこのたけみなかたのかみ建御名方神が、千人も

かからねば動かせないような大きな大きな大岩を両手でさしあげて出て来まして、

「やい、おれの国へ来て、そんなひそひそ話をしているのはだれだ。さあ来い、力くらべをしよう。まずおれがおまえの手をつかんでみよう」と言いながら、大岩を投げだしてそばへ来て、いきなり建^{たけみかずちのかみ}御雷神の手をひつつかみますと、御^{みかずちのかみ}雷神の手は、たちまち氷の柱になってしまいました。御^{みなかたのかみ}名方神がおやおどろいているまに、その手はまたひよいと^{つるぎ}劍の刃になってしまいました。

御名方神はすつかりこわくなっておずおずとしりごみをしかけますと、御^{みかずちのかみ}雷神は、

「さあ、こんどはおれの番だ」と言いながら、御名方神の手くびをぐいとひつつかむが早いか、まるではえたてのあしをでも扱うように、たちまち一握にぎりに握りつぶして、ちぎれ取れた手先を、ぼうんと向こうへ投げつけました。

御名方神は、まつさおになって、いっしょうけんめいに逃にげだしました。御みかずちのかみ雷神は、

「こら待て」と言いながら、どこまでもどんどん追つかけて行きました。そしてとうとう信濃しなのの諏訪湖すわこのそばで追いつめて、いきなり、一ひねりにひねり殺そうとしますと、建たけみなかたの御名方神かみはぶるぶるふるえながら、

「もういよいよおそれりました。どうぞ命ばかりはお助けくだ

さいまし。私はこれなりこの信濃しなのより外へはひと足も踏ふみ出しはいたしません。また、父や兄の申しあげましたとおりに、この葦あ原しはらの中つ国は、大空の神のお子さまにさしあげますでございませ」と、平たくなっておわびしました。

そこで建たけみかずちのかみ御雷神いずもはまた出雲へ帰つて来て、大おお国くにぬしのかみ主神のかみに問いつめました。

「おまえの子は二人とも、大神のおおせにはそむかないと申したが、おまえもこれでいよいよ言うことはあるまいな、どうだ」と言いますと、大國主神は、

「私にはもう何も異存はございません。この中つ国はおおせのとおりに、すっかり、大神のお子さまにさしあげます。その上でただ

一つのおねがいは、どうぞ私の社やしろとして、大空の神の御殿ごてんのよう
な、りっぱな、しつかりした御殿をたてていただきとうございま
す。そうしてくださいますれば私は遠い世界から、いつまでも大神
のご子孫にお仕え申します。じつは私の子は、ほかに、まだまだ
いくたりもあります。しかし、事代主ことしろぬしのかみ神さえ神妙にご奉公
いたします上は、あとの子たちは一人も不平を申しはいたしませ
ん」

こう言つて、いさぎよくその場で死んでおしまいになりました。
それで建御雷たけみかづちのかみ神は、さつそく、出雲国いづものくにの多芸志たぎしという浜
にりっぱな大きなお社やしろをたてて、ちゃんと望みのおりにまつり
しました。そして櫛八玉くしやたまのかみ神という神を、お供そなえものを料理する

料理人にしてつけ添そえました。

すると八玉神やたまのかみは、うになつて、海の底そこの土をくわえて来て、

それで、いろんなお供えものをあげるかわらけをこしらえました。

それからある海草くきの茎ひきりうすで火切臼ひきりぎねと火切杵ひきりぎねという物をこしら

えて、それをすり合わせて火を切り出して、建たけみかずちのかみ御雷神みかみに向か

つてこう言いました。

「私が切つたこの火で、そこいらが、大空の神の御殿のお料理場のように、すすでいっぱいになるまで欠かさず火をたき、かまどの下が地の底の岩のように固かたくなるまで絶えず火をもやして、りようしたちの取つて来る大すずきをたくさんに料理して、大空の神の召しあがるようなりっぱなごちそうを、いつもいつもお供え

いたします」と言いました。

たけみかずちのかみ
建御雷神

神はそれでひとまず安心して、大空へ帰りのぼりま

した。そして

あまてらすおおかみ
天照大神と

たかみむすびのかみ
高皇産靈神に、

すっかりこのこと

を、くわしく奏そうじょう上じょういたしました。

かささ
笠沙のお宮

一

あまてらすおおかみ
天照大神と高皇産靈神とは、あれほど乱れさわいでいた
下界を、建御雷神たちが、ちやんとこちらのものにして帰り
ましたので、さつそく天忍穂耳命をお召しになつて、
「葦原の中つ国はもはやすつかり平らいだ。おまえはこれから
すぐにくだつて、さいしよ申しつけたように、あの国を治めてゆ

け」とおっしやいました。

みこと命はおおせに従つて、すぐに出発の用意におとりかかりになりました。するとちようどそのときに、お妃のきさき秋津師毘売命あきつしひめのみことが男のお子さまをお生みになりました。

おしほみのみこと忍穂耳命せんとは大神のご前へおいでになつて、

「私たち二人に、世嗣よつぎの子供が生まれました。名前は日子番能ひこほの邇にぎのみこと芸命とつけました。中つ国へくだしますには、この子がいちばんよいかと存じます」とおっしやいました。

それで大神は、そのお孫さまの命みことが大きくおなりになりますと、改めておそばへ召して、

「下界に見えるあの中つ国は、おまえの治める国であるぞ」とお

つしやいました。命は、かしこまって、

「それでは、これからすぐにくだつてまいります」とおつしやつて、急いでそのお手はずをなさいました。そしてまもなく、いよいよお立ちになろうとなさいますと、ちょうど、大空のお通り道のある四つじに、だれだか一人の神が立ちはだかつて、まぶしい光をきらきらと放ちながら、上は高たかまの天原までもあかあかと照らし、下は中つ国までいちめんかがやに照り輝かせておりました。

あまてらすおおかみ たかみむすびのかみ

天照大神と高皇産靈神とはそれをご覧になりますと、急いであめのうづめのみこと天宇受女命をお呼びになつて、

「そちは女でこそあれ、どんな荒あらくれた神に向かいあつても、びくともしない神だから、だれをもおいておまえを遣つかわすのである。

あの、道をふさいでいる神のところへ行つてそう言つて来い。大空の神のお子がおくだりになろうとするのに、そのお通り道を妨さまたげているおまえは何者かと、しつかり責せめただして来い」とお言いつけになりました。

宇受女命うずめのみことはさつそくかけつけて、きびしくとがめたてました。すると、その神は言葉ことばをひくくして、

「私は下界の神で名は猿さる田彦たひこの神かみと申します者でございます。

ただいまここまで出てまいりましたのは、大空の神のお子さまがまもなくおくだりになると承りましたので、及およばずながら私がお道筋すじをご案内申しあげたいと存じまして、お迎えにまいりましたのでございます」とお答え申しました。

大神はそれをお聞きになりました。そして
あめのこやねのみこと天児屋根命、ふとだまのみこと太玉命、あめのうずめのみこと天宇受女命、いしこりどめのみこと石許理度売命、たまのおやのみこと玉祖命の五人を、お孫さまの命みことのお供の頭かしらとしておつけ添そえになりました。そしておしまいに別れになるときに、
やさか八尺の曲玉まがたまという、それはそれはごりつばなお首飾くびかざりりの玉と、
やた八咫の鏡かがみという神々こうこうしいお鏡と、かねて須佐之男命すさのおのみことが大じや
の尾の中からお拾いになった、鋭い御劍みつるぎと、この三つの貴いとうとご
自分のお持物を、お手ずから命みことにお授けになつて、
「この鏡は私の魂たましいだと思つて、これまで私に仕えてきたとおりに、
たいせつに崇めあが祀まつるがよい」とおつしやいました。それから大空
の神々の中でいちばんちえの深い思おもいかねのかみ金神と、いちばんすぐ

れて力の強い手力男神とをさらにおつけ添えになつたうえ、

「思おも金いかねののかみかみ 神よ、そちはあの鏡の祀まつりをひき受けて、よくとり

行なえよ」とおおせつけになりました。

邇邇ににぎのみこと芸命はそれらの神々をはじめ、おおぜいのお供の神をひ

きつれて、いよいよ大空のお住まいをおたちになり、いく重えとも

なくはるばるとわき重なっている、深い雲の峰みねをどんどんおし分

けて、ご威光いこうりりしくお進みになり、やがて天浮橋あめのうきはしをもおし

渡わたつて、どうどうと下界に向かつてくだつておいでになりました。

そのまつさきには、天忍日命あめのおしひのみことと、天津久米命あまつくめののみことという、よ

りすぐつた二人の強い神さまが、大きな剣つるぎをつるし、大きな弓と

強い矢やとを負おい抱かかえて、勇ましくお先払いをして行きました。

命たちはしまいに、日向ひゆうがの国の高千穂たかちほの山の、串触嶽くしふるだけという険しい峰けわの上にお着きになりました。そしてさらに韓国嶽からくにだけという峰へおわたりになり、そこからだんだんと、ひら地へおくだりになって、お住まいをお定めになる場所を探し探し、海の方へ向かって出ておいでになりました。

そのうちに同じ日向ひゆうがの笠沙かささの岬みさきへお着きになりました。

邇邇にぎのみこと芸命は、

「ここは朝日もま向きに射さし、夕日もよく照つて、じつにすがすがしいよいところだ」とおっしゃって、すっかりお氣にめしました。それでとうとう最後にそこへお住まいになることにおきめになりました。そしてさつそく、地面のしつかりしたところへ、大

きな広い御殿ごてんをおたてになりました。

命みことは、それから例の宇受女命うずめのみことをお召めしになつて、

「そちは、われわれの道案内をしてくれた、あの猿田彦神さるたひこのかみとは、さいしよからの知り合ひである。それでそちがつき添つて、

あの神が帰るところまで送つて行つておくれ。それから、あの神のてがらを記念してやる印に、猿田彦さるたひこという名まえをおまえが継ついで、あの神と二人のつもりで私わたしに仕えよ」とおっしゃいました。宇受女命うずめのみことはかしこまつて、猿田彦神を送つてまいりました。

猿田彦神は、その後、伊勢いせの阿坂あざかというところに住んでいました。あるときりように出て、ひらふがいという大きな貝に手をはさまれ、とうとうそれなり海の中へ引き入れられて、おぼれ死

にに死んでしまいました。

うずめのみこと

宇受女命はその神を送り届けて帰つて来ますと、笠沙の海は

とど

かささぎ

たへ、大小さまぎまの魚をすつかり追い集めて、

さかな

「おまえたちは大空の神のお子さまにお仕え申すか」と聞きま
した。そうすると、どの魚も一ぴき残らず、

「はいはい、ちゃんとご奉公申しあげます」とご返事をしまし
た。中になまこがたった一人、お答えをしないで黙つておりました。
た。

だま

すると宇受女命は怒つて、

うずめのみこと

「こわれ、返事をしない口はその口か」と言いざま、手早く懐
剣を抜きはなつて、そのなまこの口をぐいとひとえぐり切り裂

かいは

さ

きました。ですからなまこの口はいまだに裂けております。

二

そのうちにににぎのみこと「邇邇芸命は、ある日、同じみさきできれいな若い女の人にお出会いになりました。

「おまえはだれのむすめ娘か」とおたずねになりますと、その女の人は、

「私は おおやまつみのかみ 大山津見神 の娘の このはなさくやひめ 木色咲耶媛 と申す者でございます」

とお答え申しました。

「そちにはきようだいがあるか」とかさねてお聞きになりますと、

「私には いわながひめ 石長媛 と申します一人の姉がございます」と申しまし

た。みこと命は、

「わたしはおまえをお嫁よめにもらいたいと思うが、来るか」とお聞きになりました。すると咲耶媛さくやひめは、

「それは私からはなんとも申しあげかねます。どうぞ父の大山おおやま津見神つみのかみにおたずねくださいまし」と申しあげました。

命みことはさつそくお使いをお出しになつて、大山津見神おおやまつみのかみに咲耶媛さくやひめをお嫁にもらいたいとお申しこみになりました。

大山津見神おおやまつみのかみはたいそう喜んで、すぐにその咲耶媛さくやひめに、姉の石長媛いわながひめをつき添そいにつけて、いろいろのお祝いの品をどつさり

持たせてさしあげました。

命みことは非常にお喜びになつて、すぐ咲耶媛とご婚礼をなさいまし

た。しかし姉の石長媛は、それはそれはひどい顔をした、みにくい女でしたので、同じ御殿ごてんでいっしょにおくらしになるのがおいやだものですから、そのまますぐに、父の神の方へお送りかえしになりました。

おおやまつみは
大山津見は恥じ入つて、使いをもつてこう申しあげました。

「私が このはなさくやひめ 木色咲耶媛ここのはなさくやひめに、わざわざ いわながひめ 石長媛いわながひめをつき添いにつけまし

たわけは、あなたが さくやひめ 咲耶媛さくやひめをお嫁になすつて、その名のとおり、

花が さ咲き誇るほこように、いつまでもお栄えになりますばかりでなく、

いわながひめ 石長媛いわながひめを同じ御殿にお使いになりませば、あの子の名まえにつ

いておりますとおり、岩が雨に打たれ風にさらされても、ちつとも変わらずにがっしりしているのと同じように、あなたのおから

だもいつまでもお変わりなくいらつしやいますようにと、それをお祈り申してつけ添えたのでございます。それなのに、咲耶媛さくやひめだけをおとめになつて、石長媛いわながひめをおかえしになつたうえは、あなたも、あなたのご子孫のつぎつぎのご寿じゆみょう命も、ちようど咲いた花がいくほどもなく散りはてるのと同じで、けつして永ながくは続きませんよ」と、こんなことを申し送りました。

そのうちに咲耶媛さくやひめは、まもなくお子さまが生まれそうになりました。

それで命にそのことをお話しになりますと、命はあんまり早く生まれるので変だとおぼしめして、

「それはわしたち二人の子であろうか」とお聞きになりました。

咲耶媛さくやひめは、そうおっしやられて、

「どうしてこれが二人よりほかの者の子でございましょう。もし私たち二人の子でございませんでしたら、けっして無事にお産はできますまい。ほんとうに二人の子である印しるしには、どんなことをして生みましても、必ず無事に生まれるに相違ちがいませぬ」

こう言つてわざと出入口のないお家をこしらえて、その中におはいりになり、すきまというすきまをびっしり土で塗ぬりつぶしておしまひになりました。そしていざお産をなさるといふときに、そのお家へ火をつけてお燃もやしになりました。

しかしそんな乱暴らんぼうな生み方をなすつても、お子さまは、ちやんとご無事に三人もお生まれになりました。媛ひめは、はじめ、うち

じゆうに火が燃え広がって、ほのお どんどん炎をあげているときにお生
 まれになった方を、ほてりのみこと 火照命ほのてるのみこと というお名まえになさいました。そ
 れから、つぎつぎに、ほすせりのみこと 火須勢理命ほすせりのみこと、ほおりのみこと 火遠理命ほおりのみこと というおふたかた 一ふたかた 方
こと がお生まれになりました。ほおりのみこと 火遠理命ほおりのみこと はまたの名をひこほほでみのみ 日子穗穗出見
こと 命ともお呼よび申しました。

満潮みちしおの玉、干潮ひしおの玉

一

三人のごきようだいは、まもなく大きな若い人わかにおなりになりました。その中でおあにいさまの火照命ほてりのみことは、海でりようをなさるのがたいへんおじようずで、いつもいろんな大きな魚さかなや小さな魚をたくさんつってお帰りになりました。末の弟さまの火遠ほおりの理命みことは、これはまた、山でりようをなさるのがそれはそれはお

得意で、しじゅういろんな鳥や獣をどっさりとお帰りになりました。

あるとき弟の命は、みことおあにいさまに向かつて、

「ひとつためしに二人で道具を取りかえて、互たがいに持ち場をかえて、りようをしてみようではありませんか」とおつしやいました。

おあにいさまは、弟さまがそう言つて三度もお頼たのみになつても、そのたんびにいやだと言つてお聞き入れになりませんでした。しかし弟さまが、あんまりうるさくおつしやるものですから、とうとうしまいに、いやいやながらお取りかえになりました。

弟さまは、さつそくつり道具を持って海ばたへお出かけになりました。しかし、つりのほうはまるでおかつてがちがうので、い

くらおあせりになつても一ぴきもおつれになれないばかりか、しまいにはつり針ぼりを海の中へなくしておしまいになりました。

おあにいさまの命みことも、山のりようにはおなれにならないものですから、いっこうに獲物えものがないので、がっかりなすつて、弟さまに向かつて、

「わしのつり道具を返してくれ、海のりようも山のりようも、お互たがいになれたものでなくてはだめだ。さあこの弓矢を返そう」とおっしゃいました。

弟さまは、

「私はとんだことをいたしました。とうとう魚を一ぴきもつらないうちに、針を海へ落としてしまいました」とおっしゃいました。

するとおあにいさまはたいへんにお怒りおこになつて、無理にもその針をさがして来いとおつしやいました。弟さまはしかたなしに、身につるしておいでになる長い剣つるぎを打ちこわして、それでつり針を五百本こしらえて、それを代わりにおさしあげになりました。

しかし、おあにいさまは、もとの針でなければいやだとおつしやつて、どうしてもお聞きいれになりませんでした。それで弟さまはまた千本の針をこしらえて、どうぞこれでかんべんしてくださいと、お頼みになりましたが、おあにいさまは、どこまでも、もとの針でなければいやだとお言いはりになりました。

ですから弟さまは、困こまつておしまいになりました、ひとりで海ばたに立つて、おいおい泣ないておいでになりました。そうすると、

そこへしおつちのかみ塩椎神という神が出てまいりました。

「もしもし、あなたは どうしてそんなに泣いておいでになるので
ございます」と聞いてくれました。弟さまは、

わたし「私はおあにいさまのつり針を借りてりようをして、その針を海
の中へなくしてしまつたのです。だから代わりの針をたくさんこ
しらえて、それをお返しすると、おあにいさまは、どうしてもも
との針を返せとおっしゃつてお聞きにならないのです」

こう言つて、わけをお話しになりました。

しおつちのかみ塩椎神はそれを聞くと、たいそうお気の毒に思ひまして、

「それでは私がちゃんとよくしてさしあげましょう」と言いなが
ら、大急ぎで、水あかが少しもはいらぬように、かたく編んだ、

かごの小船^{こぶね}をこしらえて、その中へ火遠^{ほおりの}理命^{のみこと}をお乗せ申しました。

「それでは私が押^おし出してあげ申しますから、そのままど
ん海のまんなかへ出ていらつしやいませ。そしてしばらくお行き
になりますと、向こうの波の間によい道がついておりますから、
それについてどこでも流れておいでになると、しまいにたくさ
んのむねが魚のうろこのように立ち並^{なら}んだ、大きな大きなお宮へ
お着きになります。それは綿津見^{わたつみ}の神という海の神の御殿^{ごてん}でござ
います。そのお宮の門のわきに井戸^{いど}があります。井戸の上にかつ
らの木がおいかぶさっておりますから、その木の上ののぼって待
つていらつしやいませ。そうすると海の神の娘^{むすめ}が見つけて、ちや

んといよいよにとりはからつてくれますから」と言つて、力いっぱいその船を押し出してくれました。

二

みこと命はそのままずんずん流れてお行きになりました。そうすると
 まつたくしおつちのかみ塩椎神が言ったように、しばらくして大きな大きな
 お宮へお着きになりました。

命はさつそくその門のそばのかつらの木にのぼつて待つておい
 でになりました。そうすると、まもなく、わたつみのかみ綿津見神のむすめとよた娘の豊
 玉まひめ媛のおつきの女が、玉のうつわ器を持って、かつらの木の下の井戸いど

へ水をくみに来ました。

女は井戸の中を見ますと、人の姿がうつつていたので、ふしぎに思つて上を向いて見ますと、かつらの木にきれいな男の方がいらつしやいました。

命は、その女に水をくれとお言いになりました。女は急いで玉の器にくみ入れてさしあげました。

しかし命はその水をお飲みにならないで、首にかけておいでになる飾りの玉をおほどきになつて、それを口にふくんで、その玉の器の中へ吐き入れて、女にお渡しになりました。女は器を受け取つて、その玉をとり出そうとしますと、玉は器の底に固くくつついてしまつて、どんなにしても離れませんでした。それで、そ

のままうちの中へ持つてはいつて、豊玉媛にその器ごとさし出しました。

とよたまひめ
豊玉媛は、

その玉を見て、

「かどぐち門口にだれかおいでになつてゐるのか」と聞きました。

女は、

「井戸のそばのかつらの木の上にきれいな男の方がおいでになつてゐます。それこそは、こちらの王さまにもまさつて、それはそれはけだかいとうと貴い方でございます。その方が水をくれとおっしゃいましたから、すぐに、この器へくんでさしあげますと、水はおあがりにならないで、お首飾りの玉を中へお吐き入れになりました。そういたしますと、その玉が、らんご覧のように、どうしても底

から離れないのでございます」と言いました。

ひめみこと
媛は命のお姿を見ますと、すぐにおとうさまの海の神のところへ行って、

「門口にきれいな方がいらしています」と言いました。

海の神は、わざわざ自分で出て見て、

「おや、あのお方は、大空からおくだりになった、貴い神さまのお子さまだ」と言いながら、急いでお宮へお通し申しました。そしてあしかの毛皮を八枚重ねて敷き、その上へまた絹の畳たたみを八枚重ねて、それへすわっていただいて、いろいろごちそうをどつさり並べて、それはそれはいてねいにおもてなしをしました。そして豊玉媛をお嫁よめにさしあげました。

それで命みことはそのまま媛ひめといっしよにそこにお住まいになりました。そのうちに、いつのまにか三年という月日がたちました。

すると命はある晩、ふと例はりの針はりのことをお思い出しになって、深いため息をなさいました。

とよたまひめ
豊玉媛はあくる朝、そつと父の神のそばへ行つて、

「おとうさま、命みことはこのお宮に三年もお住まいになつていても、これまでただの一度もめいっただお顔をなさつたことがないのに、ゆうべにかぎつて深いため息をなさいました。なにか急にご心配なことがおできになつたのでしょうか」と言いました。

海の神はそれを聞くと、あとで命に向かつて、

「さきほど娘むすめが申まをしますには、あなたは三年の間こんなところに

おいでになりましたも、ふだんはただの一度も、ものをお嘆なげきになつたことがないのに、ゆうべはじめてため息をなさいましたと申します。何かわけがおりになるのでございますか。いつたいいちばんはじめ、どうしてこの海の中なぞへおいでになつたのでございます」こう言つておたずね申しました。

命はこれこれこういうわけで、つり針はりをさがしに来たのですとおつしやいました。

海の神はそれを聞くと、すぐに海じゆうの大きな魚さかなや小さな魚を一びき残さず呼よび集めて、

「この中にだれか命の針をお取り申した者はいないか」と聞きました。すると魚たちは、

「こないだから雌めだいがのどにとげを立てて物が食べられないで困こまっておりますが、ではきつとお話のつり針をのんでいるに相違ごまございません」と言いました。

海の神はさつそくそのたいを呼んで、のどの中をさぐって見ますと、なるほど、大きなつり針を一本のんでおりました。

海の神はそれを取り出して、きれいに洗って命にさしあげました。すると、それがまさしく命のおなくしになったあの針でした。海の神は、

「それではお帰りになって、おあにいさまにお返しになりますときには、

いやなつり針、

わるいつり針、

ばかなつり針。

とおつしやりながら、必ずうしろ向きになってお渡しなさいまし。それから、こんどからはおあにいさまが高いところへ田をお作りになりましたら、あなたは低いところへお作りなさいまし。そのあべこべに、おあにいさまが低いところへお作りになりましたら、あなたは高いところへお作りになることです。すべて世の中の水という水は私が自由に出し入れするのでございます。おあにいさまは針のことでずいぶんあなたをおいじめになりましたから、こ

れからはおあにいさまの田へはちつとも水をあげないで、あなたの田にばかりどつきり入れておあげ申します。ですから、おあにいさまは三年のうちに必ず貧乏びんぼうになっておしまいになります。そうすると、きつとあなたをねたんで殺しにおいでになるに相違ございません。そのときには、この満潮みちしおの玉を取り出して、おぼらしておあげなさい。この中から水がいくくらでもわいて出ます。しかし、おあにいさまが助けてくれとおっしゃられておわびをなさるなら、こちらのこの干潮ひしおの玉を出して、水をひかせておあげなさいまし。ともかく、そうして少しこらしめておあげになるがようございます」

こう言つて、そのたいせつな二つの玉を命みことにさしあげました。

それからけらいのわにをすっかり呼び集めて、

「これから大空の神のお子さまが陸の世界へお帰りになるのだが、おまえたちはいく日あつたら命をお送りして帰ってくるか」と聞きました。

わにたちは、お互いからだの大きさにつれてそれぞれかんじようして、めいめいにお返事をしました。その中で六尺しゃくばかりある大わには、

「私は一日あれば行つてまいります」と言いました。海の神は、「それではおまえお送り申してくれ。しかし海を渡るときに、けつしてこわい思いをおさせ申してはならないぞ」とよく言い聞かせた上、その首のところへ命をお乗せ申して、はるばるとお送り

申して行かせました。すると、わにはうけあつたとおりに、一日のうちに命をもとの浜までおつれ申しました。

命はご自分のつるしておいでになる小さな刀をおほどきになつて、それをごほうびにわにの首へくくりつけておかえしになりました。

命はそれからすぐに、おあにいさまのところへいらしつて、海の神が教えてくれたとおりに、

いやなつり針ぼり、

悪いつり針、

ばかなつり針。

と言いいい、例のつり針を、うしろ向きになってお返しになりました。それから田を作るにも海の神が言ったとおりになさいました。

そうすると、命の田からは、毎年どんどんおこめが取れるのに、おあにいさまの田には、水がちつとも来ないものですから、おあにいさまは、三年の間にすっかり貧乏びんぼうになっておしまいになりました。

するとおあにいさまは、あんのじよう、命のことをねたんで、いくどとなく殺しにおいでになりました。命はそのときにはさつそく満潮みちしおの玉を出して、大水をわかせてお防ぎになりました。

おあにいさまは、たんびにおぼれそうになって、助けてくれ、助けてくれ、とおっしゃいました。命はそのときには干潮ひしおの玉を出してたちまち水をおひかせになりました。そんなわけで、おあにいさまも、しまいには弟さまの命にはとてもかなわないとお思いになり、とうとう頭をさげて、

「どうかこれまでのことは許しておくれ。私はこれからしようがい、夜昼おまえのうちの番をして、おまえに奉公するから」と、かたくお誓ちかいになりました。

ですから、このおあにいさまの命のご子孫は、後の代よまで、命が水におぼれかけてお苦しみになったときの身振みぶりをまねた、さまざまなおかしな踊おどりを踊るのが、代々きまりになっておりまし

た。

三

そのうちに、火遠理命ほおりのみことが海のお宮へ残しておかえりになった、お嫁よめさまの豊玉媛とよたまひめが、ある日ふいに海の中から出ていらしつて、「私はかねて身重みおもになっておりましたが、もうお産をいたしますときがまいりました。しかし大空の神さまのお子さまを海の中へお生み申してはおそれ多いと存じまして、はるばるこちらまで出てまいりました」とおっしゃいました。

それで命みことは急いで、うぶやという、お産をするおうちを、海は

たへおたてになりました。その屋根はかやの代わりに、うの羽根を集めておふかせになりました。

するとその屋根がまだできあがらないうちに、豊玉媛は、もう産けがおつきになって、急いでそのうちへおはいりになりました。そのとき媛ひめは命に向かつて、

「すべての人がお産をいたしますには、みんな自分の国のならわしがありまして、それぞれへんなかつこうをして生みますものでございます。それですから、どうぞ私がお産をいたしますところも、けつしてご覧らんにならないでくださいましな」と、かたくお願いしておきました。命は媛ひめがわざわざそんなことをおつしやるので、かえって変だとおぼしめして、あとでそつと行つてのぞいて

ご覧になりました。

そうすると、たつた今まで美しい女であつた豊玉媛が、いつのまにか八ひろもあるような恐ろしい大わになつて、うんうんうなりながらはいまわつていました。命はびっくりして、どんどん逃げ出しておしまいになりました。

豊玉媛はそれを感じいて、恥ずかしくて恥ずかしくてたまらないものですから、お子さまをお生み申すと、命に向かつて、

「私はこれから、しじゅう海を往来して、お目にかかりにまいりますつもりでりましたが、あんな、私の姿をご覧になりましたので、ほんとうにお恥ずかしくて、もうこれきりおうかがいもできません」こう言つて、そのお子さまをあとにお残し申したまま、

海の中の通り道をすっかりふさいでしまつて、どんどん海の底へ歸つておしまいになりました。そしてそれなりとうとう一生、二度と出ていらつしやいませんでした。

お二人の中のお子さまは、うの羽根の屋根がふきおえないうちにお生まれになつたので、それから取つて、うがやふきあえずのみこと鵜茅草葺不合命とお呼びになりました。

ひめ媛は海のお宮にいらしても、このお子さまのことが心配でないものですから、お妹さまのたまよりひめ玉依媛をこちらへよこして、その方の手で育てておもらいになりました。媛は夫の命が自分のひどい姿をおのぞきになつたことは、いつまでたつても恨めしくうらてたまりませんでしたけれど、それでも命のことはやっぱり恋し

くおしたわしくて、かたときもお忘れわすになることができませんで
した。それで玉依媛にことづけて、

赤玉は、

緒おさえ光れど、

白しらたま玉の、

君よそおが装し、

貴とうとくありけり。

という歌をお送りになりました。これは、

「赤い玉はたいへんにりっぱなもので、それをひもに通して飾かざり

にすると、そのひもまで光って見えるくらいですが、その赤玉にもまさった、白玉のようにうるわしいあなたの貴いお姿を、私はしじゅうお慕わしく思っております」という意味でした。

みこと
命はたいそうあわれにおぼしめして、私もおまえのことは決して忘れはしないという意味の、お情けのこもったお歌をお返しになりました。

命は高千穂たかちほの宮というお宮に、とうとう五百八十のお年までお住まいになりました。

八咫鳥やたがらす

一

うがやふきあえずのみこと
 鵜茅草葺不合命うがやふきあえずのみことは、ご成人の後、玉依媛たまよりひめを改めてお妃きさきにお
 立てになつて、四人の男のお子をおもうけになりました。

この四人のごきょうだいのうち、二番めの稲氷命いなひのみことは、海を
 こえてはるばると、常世国とこよのくにという遠い国へお渡りになりました。
 ついで三番めの若御毛沼命わかみけぬのみことも、お母上のお国の、海の国へ行つ

ておしまいになり、いちばん末の弟さまの神倭伊波礼毘古命かみやまといわれひこのみことが、高千穂たかちほの宮にいらしつて、天下をお治めになりました。しかし、日向ひゅうがはたいへんにへんぴで、政をお聞きめすのにひどくご不便みことでしたので、命はいちばん上のおあにいさまの五瀬命いつせのみこととお二人でご相談のうえ、

「これは、もつと東の方へ移つたほうがよいであろう」とおつしやつて、軍勢を残らずめしつれて、まず筑前国ちくぜんのくにに向かつておたちになりました。その途中、豊前ぶぜんの宇佐うさにお着きになりますと、その土地の宇佐都比古うさつひこ、宇佐都比売うさつひめという二人の者が、御殿ごてんをつくつてお迎え申し、てあつくおもてなしをしました。

命はそこから筑前ちくぜんへおはいりになりました。そして岡田宮おかだのみや

というお宮に一年の間ご滞在になった後、さらに安芸あきの国へおの
 ぼりになって、多家理宮たけりのみやに七年間おとどまりになり、ついで備前びぜん
 へお進みになって、八年の間高島宮たかしまのみやにお住まいになりました。
 そしてそこからお船をつらねて、波の上を東に向かっておのぼり
 になりました。

そのうちに速吸門はやすいのかどというところまでおいでになりますと、

向こうから一人の者が、かめの背なかに乗って、魚さかなをつりながら
 出て来まして、命みことのお船を見るなり、両手をあげてしきりに手招てまね
 きをいたしました。命はその者を呼びよせて、

「おまえは何者か」とお聞きになりますと、

「私はこの地方の神で宇豆彦うずひこと申します」とお答えいたしました。

「そちはそのへんの海路を存じているか」とおたずねになりますと、

「よく存じております」と申しました。

「それではおれのお供につくか」とおっしゃいますと、

「かしこまりました。ご奉公申しあげます」とお答え申しましたので、命はすぐにおそばの者に命じて、さおをさし出させてお船へ引きあげておやりになりました。

みんなは、そこから、なお東へ東へとかじを取って、やがて撰津つづの浪速なみはやの海を乗り切つて、河内国かわちのくにの、青雲あをぐもの白肩津しらかたのつという浜へ着きました。

するとそこには、大和やまとの鳥見とみというところの長髓彦ながすねひこという者

が、兵をひきつれて待ちかまえておりました。命は、いざ船からおおりになろうとしますと、かれらが急にどつと矢を射向けて来ましたので、お船の中から盾を取り出して、ひゆうひゆう飛んで来る矢の中をくぐりながらご上陸なさいました。そしてすぐにどんどん戦をなさいました。

そのうちに五瀬命が、長髓彦の鋭い矢のために大ききずをお受けになりました。命はその傷をおおさえになりながら、

「おれたちは日の神の子孫でありながら、お日さまの方に向かつて攻めかかったのがまちがいである。だからかれらの矢にあたったのだ。これから東の方へ遠まわりをして、お日さまを背なかに受けて戦おう」とおっしゃって、みんなをめし集めて、弟さまの

命といっしよにもう一度お船におめしになり、大急ぎで海のまん中へお出ましになりました。

その途中で、命はお手についた傷の血をお洗いになりました。

しかしそこから南の方へまわって、紀伊国きいのくにの男おの水門みなとまでお

いでになりますと、お傷の痛みいたがいよいよ激いたしくなりました。命は、

「ああ、くやしい。かれらから負わされた手傷で死ぬるのか」と残念そうなお声でお叫びになりながら、とうとうそれなりおかくれになりました。

神倭伊波礼毘古命かんにやまといわれひこのみことは、そこからぐるりとおまわりになり、

同じ紀伊きいの熊野くまのという村にお着きになりました。するとふいに大きな大ぐまが現われて、あつというまにまたすぐ消えさつてしまいました。ところが、命みこともお供の軍勢もこの大ぐまの毒氣にあたつて、たちまちぐらぐらと目がくらみ、一人のこらず、その場に氣絶してしまいました。

そうすると、そこへ熊野くまのの高倉下たかくらじという者が、一ふりの太刀たちを持って出て来まして、伏し倒れておいでになる伊波礼毘古命いわれひこのみことに、その太刀をさしだしました。命はそれといっしよに、ふと正氣しょうきにおかえりになつて、

「おや、おれはずいぶん長寝ながねをしたね」とおつしやりながら、高た倉下かくらじがささげた太刀たちをお受けとりになりますと、その太刀に備わっている威光でもって、さっきのくまをさし向けた熊野の山の荒くれた悪神わるがみどもは、ひとりでにばたばたと倒たおれて死にました。それといっしよに命の軍勢は、まわった毒から一度にさめて、むくむくと元気よく起きあがりました。

命はふしぎにおぼしめして、高倉下たかくらじに向かつて、この貴い剣とうちるぎのいわれをおたずねになりました。

高倉下たかくらじは、うやうやしく、

「実はゆうべふと夢を見ましたのでございます。その夢の中で、
 天照大神あまてらすおおかみと高皇産靈神たかみむすびのかみのお二方ふたかたが、建御雷神たけみかずちのかみをおめ

しになりました、葦原中国は、今しきりに乱れ騒いでいる。あしはらのなかつくに
 われわれの子孫たちはそれを平らげようとして、悪神どもからみださわ
 苦しめられている。あの国は、いちばんはじめそちが従えて来た
 国だから、おまえもう一度くだって平らげてまいれとおっしゃい
 ますと、建御雷神は、たけみかずちのかみそれならば、私がまいりませんでも、
 ここにこの前あすこを平らげてまいりましたときの太刀たちがござい
 ますから、この太刀をくたしましょう。それには、高倉下の倉たかくらじ
 のむねを突きやぶって落としましょうと、こうお答えになりました。
 た。

それからその建御雷神は、たけみかずちのかみ私に向かつて、おまえの倉くらのむ
 ねを突きとおしてこの刀を落とすから、あすの朝すぐに、大空の

神のご子孫にさしあげよとお教えくださいました。目がさめまして、倉へまいって見ますと、おおせのとおりに、ちやんとただいまのその太刀たちがございましたので、急いでさしあげにまいりましたのでございます」

こう言つて、わけをお話し申しました。

そのうちに、高皇産靈神たかみむすびのかみは、雲の上から伊波礼毘古命いわれひこのみことに向かつて、

「大空の神のお子よ、ここから奥おくへはけつしてはいつてはいけませんよ。この向あこうには荒あらくれた神たちがどつきりいます。今これから私が八咫鳥やたがらすをさしくだすから、そのからすの飛んで行く方へついておいでなさい」とおさとしになりました。

まもなくおおせのとおり、そのからすがおりて来ました。命はみことそのからすがつれて行くとおりに、あとについてお進みになりました。すと、やがて大和のやまと吉野河のよしのがわ河口かわぐちへお着きになりました。そうするとそこにやなをかけて魚をとっているものがおりました。

「おまえはだれだ」とおたずねになりますと、

「私はこの国の神で、名は贄持にえもちの子と申します」とお答え申しました。

それから、なお進んでおいでになりますと、今度はおしりにしつぽのついている人間が、井戸いどの中から出て来ました。そしてその井戸がぴかぴか光りました。

「おまえは何者か」とおたずねになりますと、

「私はこの国の神で井冰鹿いひしかと申すものでございます」とお答えいたしました。

みこと命はそれらの者を、いちいちお供ともにおつれになつて、そこから山の中を分けていらつしやいますと、またしつぽのある人にお会いになりました。この者は岩をおし分けて出て来たのでした。

「おまえはだれか」とお聞きになりますと、

「わたしはこの国の神で、名は石押分いわおしわけの子と申します、ただいま、大空の神のご子孫がおいでになると承りまして、お供に加えていただきにあがりましたのでございます」と申しあげました。命は、そこから、いよいよ険けわしい深い山を踏ふみ分けて、大和やまとの宇陀うだというところへおでましになりました。

この宇陀には、兄宇迦斯えうかし、弟宇迦斯おとうかしというきょうだいの荒くれ者あらくれがおりました。命はその二人のところへ八咫鳥やたがらすを使いにお出しになって、

「今、大空の神のご子孫がおこしになった。おまえたちはご奉公申しあげるか」とお聞かせになりました。

すると、兄の兄宇迦斯えうかしはいきなりかぶら矢を射いかけて、お使いのからすを追いかえしてしまいました。兄宇迦斯えうかしは命がおいでになるのを待ち受けて討うつてかかろうと思ひまして、急いで兵たいを集めにかかりましたが、とうとう人数にんずうがそろわなかったものですから、いつそのこと、命をだまし討うちにしようと思ひまして、うわべではご奉公申しあげますと言ひこしらえて、命をお迎え申

すために、大きな御殿ごてんをたてました。そして、その中に、つり天じようをしかけて、待ち受けておりました。

すると弟の弟宇迦斯おとうかしが、こつそりと命みことのところへ出て来まして、命を伏ふし拝みながら、

「私の兄の兄宇迦斯えうかしは、あなたさまを攻め亡ほろぼそうとたくらみまして、兵を集めにかかりましたが、思うように集まらないものですから、とうとう御殿の中につり天じようをこしらえて待ち受けております。それで急いでおしらせ申しにあがりました」と申しました。そこで道みち臣おみ命のみことと大お久お米く命のみことの二人の大將が、兄え宇迦斯うかしを呼びよせて、

「こりや兄宇迦斯えうかし、おのれの作つた御殿にはおのれがまずはいつ

て、こちらの命をおもてなしする、そのもてなしのしかたを見せろ」とどなりつけながら、太刀のえをつかみ、矢をつがえて、無理やりにその御殿の中へ追いこみました。兄宇迦斯は追いまくられて逃げこむはずみに、自分のしかけたつり天じようがどしんと落ちて、たちまち押し殺されてしまいました。

二人の大將は、その死がいを引き出して、ずたずたに切り刻んで投げ捨てました。

命は弟宇迦斯が献上したごちそうを、けらい一同におくだしになって、お祝いの大宴会を開きになりました。命はそのとき、

「宇陀の城にしぎなわをかけて待つていたら、しぎはかからない

で大きくじらがかかり、わなはめちやめちやにこわれた。ははは、おかしや」という意味を、歌にお歌いになつて、兄宇迦斯のはかりごとの破れたことを、喜びお笑いになりました。

それからまたその宇陀をおたちになつて、忍坂というところにお着きになりますと、そこには八十建といつて、穴の中に住んでいる、しつぽのはえた、おおぜいの荒くれた悪者どもが、命の軍勢を討ち破ろうとして、大きな岩屋の中に待ち受けておりました。

命はごちそうをして、その悪者たちをお呼びになりました。そして前もつて、相手の一人に一人ずつ、お給仕につくものをきめておき、その一人一人に太刀を隠しもたせて、合い図の歌を聞い

たら一度に切つてかかれと言ひ含めておおきになりました。

みんなは、命が、

「さあ、今だ、うて」とお歌いになると、たちまち一度に太刀を抜き放つて、建どもをひとり残さず切り殺してしまいました。

しかし命は、それらの賊たちよりも、もつともつとにくいのはおあにいさまの命のお命を奪つた、あの鳥見の長髓彦でした。

命はかれらに対しては、ちようどしようがを食べたあと、口がひりひりするように、いつまでも恨みをお忘れになることができませんでした。命は、畑のいらを、根も芽もいっしよに引き抜くように、かれらを根こそぎに討ち亡ぼしてしまいたい、海の中の大きな石に、きしやごがまっくろに取りついているように、かれら

をひしひしと取りまいて、一人残さず討ち取らなければおかないという意味を、勇ましい歌にしてお歌いになりました。そして、とうとうかれらを攻め亡ぼしておしまいになりました。

そのとき、ながすねひこ長髓彦の方に、やはり大空の神のお血すじの、に邇ぎはやひのみこと芸速日命という神がいました。

その神がみこと命のほうへまいて、

「私は大空の神の御子がおいになつたと承りまして、ご奉公に出ましてしるしございます」と申しあげました。そして大空の神のちすじ血筋だという印の宝物を、命にけんじょう献けんじょう上じょうしました。

命はそれからえしき兄師木、おとしき弟師木というきようだいのものをご征伐になりました。そのいくさ戦で、命の軍勢は伊いな那な佐さという山の林の中に

盾を並べて戦っているうちに、途中でひょうろうがなくなつて、

少し弱りかけて来ました。命はそのとき、

「おお、私も飢え疲れた。このあたりのうを使う者たちよ。早くたべ物を持って助けに來い」という意味のお歌をお歌いになりました。

命はなおひきつづいて、そのほかさまぎまの荒びる神どもをな

つけて従わせ、刃向かうものをどんどん攻め亡ぼして、とうとう

天下をお平らげになりました。それでいよいよ大和の檜原宮

で、われわれの一番最初の天皇のお位におつきになりました。神

武天皇とはすなわち、この貴い伊波礼毘古命のことを申しあげ

るのです。

三

天皇は、はじめ日向ひゆうがにおいでになりますとときに、阿比良媛あひらひめと
 いう方をお妃きさきに召して、多芸志耳命たぎしみみのみことと、もう一方ひとかた男のお子を
 おもうけになつていましたが、お位におつきになつてから、改め
 て、皇后としてお立てになる、美しい方をおもとめになりました。
 すると大久米命おおくめのみことが、

「それには、やはり、大空の神のお血をお分けになつた、伊須氣いすけよ
 依媛りひめと申す美しい方がおいでになります。これは三輪みわの社やしろの大
 物主神のぬしのかみが、勢夜陀多良媛せやだたらひめという女の方のおそばへ、朱塗しゆぬりの

矢に化けておいでになり、媛ひめがその矢を持っておへやおはいりになりますと、矢はたちまちもとのりつぱな男の神さまになつて、媛のお婿むこさまにおなりになりました。伊須いすけ氣より依ひ媛めはそのお二人の中にお生まれになつたお媛さまでございます」と申しあげました。そこで天皇は、大久米命をおつれになつて、その伊須いすけ氣より依ひ媛めを見においでになりました。すると同じ大和やまとの、高佐たかさし士野のという野で、七人の若い女の人いすけよりひめが野遊びをしているのにお出会いになりました。するとちようど伊須いすけ氣より依ひ媛めがその七人の中にいらつしやいました。

大久米命はそれを見つけて、天皇に、このなかのどの方をおもらいになりますかということを、歌に歌つてお聞き申しますと、

天皇はいちばん前にいる方を伊須氣依媛いすけよりひめだとすぐにおさとりになりまして、

「あのいちばん前にいる人をもらおう」と、やはり歌でお答えになりました。大久米命は、その方のおそばへ行つて、天皇のおおせをお伝えしようとしみますと、媛は、大久米命が大きな目をぎろぎろさせながら来たので、変だとおぼしめして、

あめ、つつ、

ちどり、ましとと、

など裂さける利目とめ。

とお歌いになりました。それは、

「あめという鳥、つつという鳥、ましととという鳥やちどりの目のように、どうしてあんな大きな、鋭い目を光らせているのであろう」という意味でした。

大久米命は、すぐに、

「それはあなたを見つげ出そうとして、さがしていた目でございます」と歌いました。

ひめ媛のおうちは、さいがわ狹井川という川のそばにありました。その川

わら原には、やまゆりがどつきり咲いていました。天皇は、媛のおうちへいらして、ひと晩とまつてお帰りになりました。媛はまもなく宮中におあがりになって、とうと貴い皇后におなりになりました。

お二人の中には、ひこやいのみこと 日子八井命、かんやいみみのみこと 神八井耳命、かんぬかわみみのみこと 神沼河耳命と申す三人の男のお子がお生まれになりました。

天皇は、後におん年百三十七でおかくれになりました。おなきがらはうねびやま 畝火山にお葬りほうむ申しあげました。

するとまもなく、さきに日ひゆうが向でお生まれになったたぎしみみのみこと 多芸志耳

命ことが、お腹はらちがいの弟さまのひこやいのみこと 日子八井命 たち三人をお殺し申

して、自分ひとりがかつてなことをしようとお企くわだてになりました。

お母上の皇后はそのはかりごとをお見ぬきになって、

「畝うねびやま火山に昼はただの雲らしく、静かに雲がかかっているけれど、

夕方になれば荒あれが来て、ひどい風が吹き出すらしい。木の葉がそのさきぶれのように、ざわざわさわいでいる」という意味

の歌をお歌いになり、たぎしみみのみこと多芸志耳命が、いまに、おまえたちを殺しにかかるぞということを、それとなくおさとしになりました。

三人のお子たちは、それを聞いてびつくりなさいまして、それでは、こつちから先に命みことを殺してしまおうとご相談なさいました。

そのときいちばん下の神かんぬかわみみのみこと沼河耳命は、中のおあにいさまの神かんやいみみのみこと八井耳命に向かつて、

「では、あなた、命みことのところへ押しおいって、お殺しなさい」とおっしゃいました。

それで神かんやいみみのみこと八井耳命は刀かたなを持ってお出かけになりましたが、いざとなるとぶるぶるふるえ出して、どうしても手出しをなさることができませんでした。そこで弟さまの神かんぬかわみみのみこと沼河耳命がそ

の刀をとつてお進みになり、ひといきに命を殺しておしまいになりました。

かんやいみのみこと

神八井耳命はあとで弟さまに向かつて、

「私はあのかたきを殺せなかつたけれど、そなたはみごとに殺してしまった。だから、私は兄だけれど、人のかみに立つことではきない。どうぞそなたが天皇の位について天下を治めてくれ、私は神々をまつる役目をひき受けて、そなたに奉公をしよう」とおっしゃいました。それで、弟の命はお二人のおあにいさまをおいてお位におつきになり、やまと大和のかつらぎのみや葛城宮にお移りになって、天下をお治めになりました。すなわち第二代、すいぜいてんのう綏靖天皇さまでいらつしやいます。

天皇はごく短命で、おん年四十五でお隠かくれになりました。

赤い盾たて、黒い盾たて

一

綏靖すいぜいてんのう天皇から御七代おんをへだてて、第十代目に崇神すじんてんのう天皇がお位におつきになりました。

天皇にはお子さまが十二人おありになりました。その中で皇女、豊鉏とよすき入媛いりひめが、はじめ伊勢いせの天照大神あまてらすおおかみのお社やしろに仕えて、そのお祭りをお司つかさどりになりました。また、皇子おうじ倭日やまとひ子命このみことがお

なくなりになったときに、人がきと行って、お墓のまわりへ人を
 生きながら埋めてお供をさせるならわしがはじまりました。

この天皇の御代には、やはり病がひどくはびこって、人民とい
 う人民はほとんど死に絶えそうになりました。

天皇は非常にお嘆きになって、どうしたらよいか、神のお告げ
 をいただこうとおぼしめして、御身を潔めて、慎んでお寢床の上
 にすわっておいでになりました。そうするとその夜のお夢に、三
 輪の社の大物主神が現われていらしって、

「こんどのやく病はこのわしがはやらせたのである。これをすつ
 かり亡ぼしたいと思うならば、大多根子というものにわしの社を
 祀らせよ」とお告げになりました。天皇はすぐに四方へはやうま

のお使いをお出しになつて、そういう名まえの人をおさがしになりますと、一人の使いが、河内かわちの美努村みぬむらというところで見つけてつれてまいりました。

天皇はさつそくご前にお召めしになつて、

「そちはだれの子か」とおたずねになりました。

すると大多根子おおたねこは、

「私は大物主神おおものぬしのかみのお血筋ちすじをひいた、建甕槌命たけみかづちのみことと申しま

す者の子でございます」とお答えいたしました。

それというわけは、大多根子おおたねこから五代だいもまえの世に、陶都すえつみみの

耳命みことという人の娘むすめで活玉いくたま依媛よりひめというたいそう美しい人がお

りました。

この依より媛ひめがあるとき、一人の若い人をお婿むこさまにしました。その人は、顔かたちから、いずまいの美しいけだかいことといったら、世の中にくらべるものもないくらい、りっぱな、りりしい人でした。

媛ひめはまもなく子供が生まれそうになりました。しかしそのお婿さんは、はじめから、ただ夜だけ媛のそばにいるきりで、あけがたになると、いつのまにかどこかへ行ってしまうて、けっしてだれにも顔を見せませんし、お嫁さんの媛にさえ、どこのだれかということすらも、うちあけませんでした。

媛のおとうさまとおかあさまとは、どうかして、そのお婿さんを、どこの何びとか突きとめたいと思ひまして、ある日、媛ひめに向

かつて、

「今夜は、おへやへ赤土をまいておおき、それからあさ糸のまりを針はりにとおして用意しておいて、お婿むこさんが出て来たら、そつと着物のすそにその針をさしておおき」と言いました。

媛はその晩、言われたとおりに、お婿さんの着物のすそへあさ糸をつけた針をつきさしておきました。

あくる朝になつて見ますと、針についているあさ糸は、戸のかぎ穴あなから外へ伝わっていました。そして糸のたまは、すつかり繰りほどけて、おへやの中には、わずか三まわり輪わに巻けた長さしか残っておりませんでした。

それで、ともかくお婿さんは、戸のかぎ穴から出はいりしてい

たことがわかりました。媛はその糸の伝わっている方へずんずん
 行つて見ますと、糸はしまいに、三輪山みわやまのお社やしろにはいつて止まっ
 ていました。それで、はじめで、お婿さんは大物主神おおものぬしのかみでいら
 したことがわかりました。

おおたねこ
 大多根子はこのお二人の間に生まれた子の四代目の孫でした。

天皇は、さつそくこの大多根子を三輪の社の神主かみぬしにして、大
 物主神のお祭りをおさせになりました。それといっしよに、お供
 えものを入れるかわらけをどっさり作らせて、大空の神々や下界
 の多くの神々をおまつりになりました。その中のある神さまには、
 とくに赤色の盾たてや黒塗くろぬりの盾をおあげになりました。

そのほか、山の神さまや川の瀬せの神さまにいたるまで、いちい

ちもれなくお供えものをおあげになって、ていちようにお祭りを
なさいました。そのために、やく病はやがてすっかりとまって、
天下はやつと安らかになりました。

二

天皇はついで大毘古命おおひこのみことを北陸道ほくろくどうへ、その子の建沼河たけぬかわわ
別命ののみことを東山道とうさんどうへ、そのほか強い人を方々へお遣しつかわになつて、
ご命令に従わない、多くの悪者どもをご征伐になりました。

大毘古命おおひこのみことはおおせをかしこまつて出て行きましたが、途中
で、山城やましろの幣羅坂へらさかというところへさしかかりますと、その坂の

上に腰ぬこしのばかりを身につけた小娘こむすめが立っていて、

これこれ申し天子さま、

あなたをお殺し申そうと、

前の戸に、

裏うらの戸に、

行ったり来たり、

すきを狙ねらっている者が、

そこにいるとも知らないで、

これこれ申し天子さま。

と、こんなことを歌いました。

おおひこのみこと大毘古命は変だと思ひまして、わざわざうまをひきかえし

て、

「今言つたのはなんのことだ」とたずねました。

するとこむすめ小娘は、

「私はなんにも言ひはいたしません。ただ歌を歌つただけでござ
います」と答えるなり、もうどこへ行つたのか、ふいに姿が見え
なくなつてしまいました。

おおひこのみこと大毘古命は、その歌の言葉がしきりに氣になつてならない

ものですから、とうとうそこからひきかえしてきて、天皇にその
ことを申しあげました。すると天皇は、

「それは、きつと、山城やましろにいる、私の腹はらちがいの兄、建波たけはにやす瀬の安王のみことが、悪あだくみをしてしている知しらせに相違あるまい。そなたはこれから軍勢をひきつれて、すぐうに討うちとりに行いつてくれ」とおっしゃって、彦国夫ひこくにぶくのみこと玖命のみことという方かたを添そえて、いっしよにお遣つかわしになりました。

二人は、神々のお祭まつりりをして、勝利を祈いのつて出いかけました。そして、山城やましろの木津川きつがわまで行いきますと、建波たけはにやすのみこと瀬の安王のみことは案あのじよう、天皇におそむき申まして、兵を集めて待ち受まけていらつしやいました。両方の軍勢は川を挟はさんで向むかい合あいに陣取じんどりました、彦ひ国夫こくにぶくのみこと玖命のみことは、敵あに向むかつて、

「おおい、そちらのやつ、まずかわきりに一矢射やいてみよ」とどな

りました。敵の大將のたけはにやすのみこ建波邇安王は、すぐにそれに応じて、大きな矢をひゆうツと射放しましたが、その矢はだれにもあたらないで、わきへそれてしまいました。それでこんどはこちらからくにぶくののみこと国夫玖命が射かけますと、その矢はねらいたがわずたけはにやすのみこ建波邇安王を刺し殺してしまいました。

敵の軍勢は、王が倒れておしまいになると、たちまち総くずれになって、どんどん逃にげだしてしまいました。国夫玖命の兵はどんどんそれを追っかけて、河内かわちの国のある川の渡しのところまで追いつめて行きました。

すると賊兵のあるものは、苦しまぎれにうんこが出て下ばかまを汚よごしました。

こちらの軍勢はそいつらの逃げ道をくいとめて、かたつぱしからどンドン切り殺してしまいました。そのたいそうな死がいが川に浮かんで、ちようど、うのように流れくだって行きました。

おおひこのみこと

大毘古命は天皇にそのしだいをすっかり申しあげて、改めほくろくどうて北陸道へ出発しました。

おおひこのみこと

そのうちに大毘古命の親子をはじめ、そのほか方々へお遣つかわしになった人々が、みんなおおせつかった地方を平らげて帰りました。そんなわけで、もういよいよどこにも天皇におさからいする者がなくなつて、天下は平らかに治まり、人民もどンドン裕ゆうふ福くになりました。それで天皇ははじめて人民たちから、男からゆはず弓端の調みつぎといつて、弓矢でとつた獲物えものの中のいくぶんを、女から

は手末たなすえの調みつぎといつて、紡つむいだり、織つむったりして得たもののいくぶんを、それぞれ貢みつぎもの物としておめしになりました。

天皇はまた、人民のために方々へ耕作用の池をお作りになりました。天皇の高いお徳は、後の代よからも、いついつまでも永ながくおほめ申しあげました。

おしの皇子おうじ

一

崇神すじんてんのう天皇のおあとには、お子さまの垂仁すいにんてんのう天皇がお位をお
 継つぎになりました。天皇は、沙本毘古王さほひこのみこという方のお妹さまで沙
 本媛ほひめとおっしゃる方を皇后にお召めしになつて、大和やまとの玉垣たまがきの宮
 にお移りになりました。

その沙本毘古王さほひこのみこが、あるとき皇后に向かつて、

「あなたは夫と兄とはどちらがかわいいか」と聞きました。皇后は、

「それはおあにいさまのほうがかわゆうございます」とお答えになりました。すると王は、用意していた鋭い短刀をそつと皇后にわたして、

「もしおまえが、ほんとうに私をかわいいと思うなら、どうぞ、この刀で天皇がおよつていらつしやる所を刺し殺しておくれ。そして二人でいつまでも天下を治めようではないか」と言つて、無理やりに皇后を説き伏せてしまいました。

天皇は二人がそんな怖ろしいたくらみをしているとはご存じないものですから、ある晩、なんのお気もなく、皇后のおひざをま

くらにしてお眠りになりました。

皇后はこのときだとお思いになって、いきなり短刀を抜き放して、天皇のお首をま下にねらって、三度までお振りかざしになりましたが、いよいよとなると、さすがにおいたわしくて、どうしてもお手をおくだしになることができませんでした。そしてとうとう悲しさに堪えきれないで、おんおんお泣きだしになりました。その涙が天皇のお顔にかかって流れ落ちました。天皇はそれといつしよに、ひよいとお目ざめになって、

「おれは今きたいな夢を見た。沙本の村の方からにわかには大雨が降って来て、おれの顔にぬれかかった。それから、にしき色の小さなへびがおれの首へ巻きついた。いったいこんな夢はなんの兆

であろう」と、皇后に向かつておたずねになりました。皇后はそうおっしゃられると、ぎくりとなすつて、これはとても隠かくしきれないとお思ひになつたので、おあにいさまとお二人のおそれ多いたくらみをすつかり白状しておしまいになりました。

天皇はそれをお聞きになると、びつくりなすつて、

「いやそれは危くばかな目を見るところであつた」とおっしゃりながら、すぐに軍勢をお集めになつて、沙本毘古さほひこを討うちとりにおつかわしになりました。

すると沙本毘古さほひこのほうでは、いねたばをぐるりと積みあげて、それでとりでをこしらえて、ちゃんと待ち受けておりました。天皇の軍勢はそれをめがけて撃つてかかりました。

皇后はそうなる、こんどはまたおあにいさまのことがおいたわしくおなりになつて、じつとしておいでになることができなくなりしました。それで、とうとうこつそり裏うらぐち口のご門から抜ぬけ出して、沙本毘古さほひこのとりでの中へかけつけておしまいになりました。皇后はそのときちょうど、お腹なかにお子さまをお持ちになつていらつしやいました。

天皇は、もはや三年もごちよう愛になつていた皇后でおありになるうえに、たまたまお身持ちでいらつしやるものですから、いつそうおかわいそうにおぼしめして、どうか皇后のお身におけがないようにと、それから、とりでもただ遠まきにして、むやみに攻め落とさないように、とくにご命令をおくだしになりました。

た。

二

そんなことで、かれこれ戦も長びくうちに、皇后はおあにいさまのとりでの中で皇子をお生みおとしになりました。

皇后はそのお子さまをとりでのそとへ出させて、天皇の軍勢の者にお見せになり、

「この御子みこをあなたのお子さまとおぼしめしてくださいならば、どうぞひきとつてご養育なすってくださいまし」と、天皇にお伝えさせになりました。

天皇はそのことをお聞きになりますと、ついでにどうかして皇后をもいつしよに取りかえたいとお思いになりました。それは、兄の沙本毘古さほひこに対しては、刻きざみ殺してもたりないくらい、お憤いきどおりになっておりますが、皇后のことだけは、どこまでもおいたわしくおぼしめしていらつしやるからでした。

それで味方の兵士の中で、いちばん力の強い、そしていちばんすばしっこい者をいく人かお選びになって、

「そちたちはあの皇子を受け取るときに、必ず母きこさきの后をもひきさらってかえれ。髪でも手でも、つかまりしだいに取りつかまえて、無理にもつれ出して来い」とお言いつけになりました。

しかし皇后のほうでも、天皇がきつとそんなお企くわだてをなさるに違

いないと、ちゃんとお感ぐづきになつていましたので、そのとき
用意に、前もつてお髪ぐしをすつかりおそり落おとしになつて、そのお
毛をそのままそつとお被かぶりになり、それからお腕うでさき先のお玉飾たまかざ
りも、わざと、つなぎの緒ひもを腐くさらして、お腕みえへ三重にお巻まきつ
けになり、お召物めしものもわざわざ酒で腐くさらしたのをおめしになつて、
それともなげに皇子を抱かかえて、とりでの外へお出でましになりまし
た。

待ちかまえていた勇士たちは、そのお子さまをお受け取り申す
といつしよに、皇后をも奪い取ろうとして、すばやく飛びかか
つてお髪ぐしをひつつかみますと、髪はたちまちすらりとぬげ落ちてし
まいました。

「おや、しまった」と、こんどはお手をつかみますと、そのお手の玉飾りの緒もぷつりと切れたので、難なくお手をすり抜いてお逃にげになりました。こちらはまたあわてて追いすがりながら、ぐいとお召物をつかまえました。すると、それもたちまちぼろりとちぎれてしまいました。その間に皇后は、さつと中へ逃げこんでおしまいになりました。

勇士どもはしかたなしに、皇子一人をお抱かかえ申して、しおしおと帰ってまいりました。

天皇はそれらの者たちから、

「お髪ぐしをつかめばお髪がはなれ、玉の緒ひももお召物めしものも、みんなぶすぶす切れて、とうとうおとりにがし申しました」とお聞きにな

りますと、それはそれはたいそうお悔くやみになりました。

天皇はそのために、宮中の玉飾りの細さいく工人たちまでお憎にくみになつて、それらの人々が知ちぎ行ぎょうにいただいていた土地を、いきなり残らず取りあげておしまいになりました。

それから改めて皇后の方へお使いをお出しになつて、

「すべて子供の名は母がつけるものときまつているが、あの皇子は、なんとという名前にしようか」とお聞きかせになりました。

皇后はそれに答えて、

「あの御み子は、ちようどとりでが火をかけられて焼けるさいちゆうに、その火の中でお生まれになつたのでございませうから、本ほん牽ひ智ち別べつ王わうとお呼び申したらよろしゆうございませう」とおつ

しやいました。そのほむちというのは火のことでした。

天皇はそのつきには、

「あの子には母がないが、これからどうして育てたらいいか」と
おたずねになりますと、

「ではうばをお召し抱めえになり、お湯をおつかわせ申す女たちを
もおおきになつて、それらの者にお任まかせになればよろしゅうござ
います」とお答えになりました。

天皇は最後に、

「そちがいなくなつては、おれの世話はだれがするのだ」とお聞
きになりました。すると皇后は、

「それには、丹波たんばの道能みちのうしのみこ宇斯王みこの子に、兄媛えひめ、弟媛おとひめというき

ようだいの娘むすめがございます。これならば家柄いえがらも正しい女たちで
 ございますから、どうかその二人をお召めしなさいまし」とおつし
 やいました。

天皇はもういよいよしかたなしに、一氣にとりでを攻め落として、
 沙本毘古さほひこを殺させておしまいになりました。

皇后も、それといっしよに、えんえんと燃えあがる火の中に飛
 びこんでおしまいになりました。

三

お母上のない ほむちわけのみこ 本牟智別王は、それでもおしあわせに、ずんず

んじょうぶにご成長になりました。

天皇はこの皇子のために、わざわざ尾張おわりの相津あいずというところにある、二またになった大きなすぎの木をお切らせになって、それをそのままくって二またの丸木船まるきぶねをお作らせになりました。そして、はるばると大和やまとまで運ばせて、市師いちしの池という池にお浮うかべになり、その中へごいっしょにお乗りになって、皇子をお遊ばせになりました。

しかしこの皇子は、後にすっかりご成せいじん人じんになって、長いお下ひげがお胸むねさき先にたれかかるほどにおなりになっても、お口がちつともおきけになりませんでした。

ところがあるとき、こうの鳥が、空を鳴いて飛んで行くのをご

覧らんになつて、お生まれになつてからはじめて、

「あわわ、あわわ」とおおせになりました。

天皇は、さつそく、山辺やまべ大鷹のおたかという者に、

「あの鳥をとつて来てみよ」とおいいつけになりました。

大鷹のおたかはかしまつて、その鳥のあとをどこまでも追つかけて、

紀伊国きのくに、播磨国はりまのくにへとくだつて行き、そこから因幡いなば、丹波たんば、但

馬じまをかけまわつた後、こんどは東の方へまわつて、近江おうみから美濃みの、

尾張おわりをかけぬけて信濃しなのにはいり、とうとう越後えちごのあたりまでつけ

て行きました。そして、やつとこのことで和那美わなみという港でわな網あみ

を張つて、ようやく、そのここの鳥をつかまえました。そして大

急ぎみやこで都へ帰つて、天皇におさし出し申しました。

天皇は、その鳥を皇子にお見せになったら、おもものがおつしやれるようにおなりになりはしないかとおぼしめして、わざわざとりにおつかわしになったのでした。しかし皇子は、やはりそのまひとことま一言もおものをおつしやいませんでした。

天皇はそのために、いつもどんなにお心をおいたためになつていたかしれませんでした。

そのうちに、ある晩、ふと夢の中で、

「わし私のお社やしろを天皇のお宮のとおりにりっぱに作り直して下さるなら王みこは必ず口がきけるようにおなりになる」と、こういうお告げをお聞きになりました。

天皇は、どの神さまのお告げであろうかと急いでうらな占いの役人に

言いつけて占わせてごらんになりますと、それは出雲いずもの大神おおかみのお告げで、皇子はその神のおあたりでおしにお生まれになったのだとわかりました。

それで天皇は、すぐに皇子を出雲へおまいりにお出しになることになさいました。

それにはだれをつけてやったらよかろうと、また占わせてごらんになりますと、曙立王けたつのみこという方が占いにおあたりになりました。

天皇は、その曙立王けたつのみこにお言いつけになって、なお念のために、うかがいのお祈りを立てさせてごらんになりました。

王みこはおおせによつて、さぎの巢すの池のそばへ行つて、

「あの夢のお告げのとおり、出雲の大神をおが拜んでおしるしがあるならば、その証しょうこ拠こにこの池のさぎどもを死なせて見せてくださるように」とお祈りをしますと、そのまわりの木の上にとまっていた池じゅうのさぎが、いつせいにばたばたと池に落ちて死んでしまいました。そこでこんどは祈りを返して、

「あのさぎがことごとく生きかえりますように」と言いますと、いったん死んだそれらのさぎが、またたちまちもとのとおりに生きかえりました。そのつぎには古ふる櫛がしの岡おかという岡の上に茂しげつている、葉の大きなかしの木も、曙け立たつ王のみこの祈りによって、同じように枯かれたりまた生きかえったりしました。

そんなわけで、お夢のこともまったく出雲の大神おおかみのお告げだ

ということがいよいよたしかになりました。

天皇はすぐにけたつのみこ曙立王とうがみのみこ兔上王との二人をほむちわけのみこ本牟智別王につけて、出雲へおつかわしになりました。

そのごしゅつたつ出立のときにも、どちらの道を選べばよいかとお占うらなわせになりました。すると、ならかいどう奈良街道からでは、途中でいざりやめくらに会うし、おおさかぐち大阪口から行っても、やはりめくらやいざりに会うので、どちらとも旅立ちにはふきつ不吉である、わきみち脇道のきいかい紀井街道をとおって行けば、必ずさい先がさきよいと、こう占いに出了ました。一同はそのとおりにして立っておいでになりました。

天皇は皇子のお名前をなが永く後の世までお伝えになるために、その途中のいたるところに、ほむちべ本牟智部という部族をおこしらせさせ

になりました。

皇子は、いよいよ出雲にお着きになつて、大神おおかみのお社やしろにおま
いりになりました。

そしてまた都みやこへお帰りになろうとなさいますと、その出雲の国
をおあずかりしている、国くに造みやつこという、いちばん上の役人が、
肥ひの河かわの中へ仮かりのお宮をつくり、それへ、細木ほそきを編あんだ橋を渡し
て、その宮で、皇子を、ごちそうしておもてなし申しあげました。

そのとき川下の方には、皇子のお目を慰なぐさめるために、青葉で、
作りものの山がこしらえてありました。

皇子はそれをご覧らんになつて、

「あの川下に、山のように見えている青葉は、あれはほんとうの

山ではないだろう。神主^{かんぬし}たちが大^{おお}国^{くに}主^{ぬし}神^{のかみ}のお祭^{まつり}りをする場

所^{ところ}でもあるのか」と突然^{とつぜん}こうお聞^ききになりました。

お供^けの曙^{たつのみこ}立^た王^{のみこ}や兎^{うがみ}上^{のみこ}王^{のみこ}たちは、皇子^{みこ}がふいにおものをおつ

しやれるようになったので、びっくりして喜んで、すぐに早^{はや}うまのお使^{つかい}いを立てて、そのことを天皇^{てんかう}にお知^しらせ申^ましました。

皇子^{みこ}はそれからほかのお宮^{みや}へお移^{うつ}りになつて、肥^ひ長^{なが}媛^{ひめ}とい^いう人^{ひと}をお妃^{きさき}におもらいになりました。

ところがあとでご覧^{らん}になりますと、それはへびが女^めになつて出^でて来た^{きた}のだとわかりました。皇子^{みこ}はびっくりなすつて、みんなとごいっしょに船^{ふね}に乗^のつてお逃^にげになりました。

するとへびの媛^{ひめ}は、皇子^{みこ}のおあとを慕^{した}つて、急^{いそ}いで別の船^{ふね}をし

たてて、海の上をきらきらと照らしながら、どんどん追っかけて
来ました。皇子はいよいよ気味きみが悪くおなりになって、あわてて
船をひきあげさせて、それをひっぱらせて山の間をお越こえになり、
またその船をおろして海をお渡わたりになったりなすって、やつと無
事みやこに都へ逃げておかえりになりました。

曙けたつのみこ立王は天皇におめみえをして、

「おおせのとおりに大神をお拜おがみになりますと、まもなく、急にお口がおきけになるようになりましたので、一同でお供をして帰つてまいりました」と申しあげました。

天皇は、それはそれは言うに言われぬほどお喜びになりました。そしてすぐに兎うがみのみこ上王をまた再ふたたび出雲いずもへおくだしになって、

大神のお社やしろをりっぱにご造ぞうえい営になりました。

四

天皇はそれですっかりご安心になったので、こんどはご不自由がちな、おそばのご用をおいいつけになるために、かねて皇后がおっしゃってお置きになったように、丹波たんばから兄えひめ媛たちのきょうだい四人をおめしよせになりました。

しかし下の二人はたいそうみにくい子でしたので、天皇は兄えひめ媛とそのつぎの弟おとひめ媛とだけをお抱かかえになって、あとの二人はそのまま家へかえしておしまいになりました。

すると、いちばん下のまどのひめ円野媛は、四人がいつしよにおめしに
 会つて伺うかがいながら、二人だけは顔が汚きたないためにご奉公ができな
 いでかえされたと言へば、近所の村々への聞こえも恥かずかしく、
 とでも生きてはいられないと言つて、途中の山城やましろの乙訓おとくにとい
 うところまでかえりますと、あわれにも、その深いふちに身を
 投げて死んでしまいました。

それから天皇はある年、多遅摩毛理たじまもりという者に、常世国とこよのくにへ行
 つて、香かおりの高いたちばなの実みを取つて来いとおおせつけになりま
 した。

多遅摩毛理たじまもりはかしこまつて、長い年としつき月の間いつしようけんめ
 いに苦心して、はてしもない大海おおうみの向こうの、遠い遠いその国

へやつとたどり着きました。そしておおせのたちばなの実の、枝^え葉^{だは}のままついたのを八つ、実ばかりのを八つもぎ取って、また長い間かかって、ようよう都へ帰って来ました。しかし天皇はその前に、もうとつくにおかくれになっていました。

多^た遅^じ摩^ま毛^も理^りはそのことを承ると、それはそれはがっかりして、

葉つきの実を四つと、葉のないのを四つとを、天皇のおそばにお仕え申していた兄^え媛^{ひめ}にさしあげたうえ、あとの四つずつを天皇のお墓にお供え申しました。そして泣^なき泣^なき大声を張りあげて、

「ご^{らん}覧^{らん}くださいまし。このとおりおおせの実を取ってまいりました。どうぞご覧^{らん}くださいまし」とそのたちばなを両手にさしあげて、繰^くりかえし繰^くりかえし、いつまでもそのお墓の前で叫び続け

て、
とうとうそれなり叫び死にに死んでしまいました。

白い鳥

一

第十二代景行天皇は、お身の丈が一丈二寸、おひざから下が四尺一寸もおありになるほどの、偉大なお体格でいらつしやいました。それからお子さまも、すべてで八十人もお生まれになりました。

天皇はその中で、後におあとをお継ぎになつた若帯日子

命とと、小碓命おうすのみこととおつしやる皇子おうじと、ほかにもう一方ひとかたとだ
 けをおそばにお止めになり、あとの七十七人の方々かたがたをことごと
 く、地方地方の国くにのみやつこ造つくり、別稻置わけいなぎ、県あがたぬし主ぬしという、それぞ
 れの役におつけになりました。

あるとき天皇は、美濃みのの、神大根王かんおおねのみこという方の娘むすめで、兄媛えひめ
 弟媛おとひめという姉妹きょうだいが、二人ともたいそうきりようがよい子だ
 という評判をお聞きになって、それをじつさいにお碓たしかめになつ
 たうえ、さつそく御殿ごてんにお召めしつか使いになるおつもりで、皇子の大お
 おうすのみこと碓命碓命にお言いつけになって、二人を召めしのぼせにお遣つかわし
 になりました。

すると、大碓命おおおうすのみことは、その二人の者をご自分のお召めしつか使いに

取つておしまいになり、別に二人の姉きょうだい妹まいの女を探し出して、それを兄えひめ媛ひめ、弟おとひめ媛ひめだといつわつて、天皇にお目通りをおさせになりました。

天皇はそれがほかの女であるということをし、ちやんとお見抜きになりました。しかしうわべでは、あくまでだまされていらつしやるようにお見せかけになつて、二人をそのまま御殿ごてんにお置きになりました。その代わりお手近てぢかのご用は、わざとほかの者にお言いつけになつて、それとなく二人をおこらしめになりました。

おおうすのみこと
大碓命おほすのみことはそんな悪いことをなすつてからは、天皇の御前ごぜん

へお出ましになるのをうしろぐらくおぼしめして、さつぱりお顔をお見せになりませんでした。

天皇はある日、弟さまの皇子のおうじ 小碓命おうすのみこと に向かつて、

「そちが兄は、どういうわけで、このせつ朝夕の食事のときにも出て来ないのであろう。おまえ行つて、よく申し聞かせよ」とおつしやいました。

しかし、それから五日もたつても、大碓命おおすのみこと は、やつぱりそのまま顔出しをなさらないものですから、天皇は小碓命おうすのみこと を召めして、

「兄はどうして、いつまでも食事しょくじに出て来ないのか。おまえはまだ言わないのではないか」とお聞きになりました。

「いいえ、申し聞かせました」と命みことはお答えになりました。

「では、どういうふうに話したのか」

「ただ朝早く、おあにいさまがかわやにはいりますところを待ち受けて、つかみくじき、手足をむしりとして、死体をこもにくるんでうツちやりました」と、命はまるでむぞうさにこう言つて、すましていらつしやいました。

天皇はそれ以来、小碓命おうすのみことのきつい荒いあらご気性きしょうを怖ろしくおぼしめして、どうかしてそれとなく命をおそばから遠ざけようとお考えになりました。それでまもなく命を召して、

「実は西の方に熊襲建くまとけるという者のきようだいがいる。二人とも私の命令に従わない無礼なやつである。そちはこれから行って、かれらを打ちとつてまいれ」とおおせになりました。それで命は、急いで伊勢いせにおくだりになって、大神宮だいじんぐうにお仕えになっている、

おんお婆上の倭媛やまとひめにお別れをなさいました。

するとお婆上からは、ご料のお上着りよう かわぎと、おはかま着ぎと、懐劍かいけんとを、お別れのお印しるしにおくだしになりました。

命はそれからすぐに、今の日向ひゆうが、大隅おおすみ、薩摩さつまの地方へ向かつておくだりになりました。そのとき命は、まだお髪ぐしをお額ひたいにお結ゆいになっている、ただほんの一少年でいらつしやいました。

二

命は、その土地にお着きになり、熊襲建くまそたけるのうちへ近づいて、ようすをおうかがいになりますと、建たけるらは、うちのまわりへ軍勢

をぐるりと三重じゆうに立て囲かこわせて、その中に住まっておりました。そして、たまたまちようどその家ができあがったばかりで、近々にそのお祝いの宴えんかい会かいをするというので、大きわぎでしたくをしっているところでした。

みこと

命はそのあたりをぶらぶら歩きまわって、その宴えんかい会かいの日が来るのを待ちかまえていらつしやいました。そして、いよいよその日になりますと、今までお結ゆいゆになつていたお髪ぐしを、少女のようにすきさげになさり、おんおば上からおさずかりになつたご衣いしよ裳うめを召めして、すつかり小女こおんなの姿すがたにおなりになりました。そして、ほかの女たちの中にまじつて、建たけるどもの宴えんかい会かいのへやへはいつておいでになりました。

すると熊襲建くまとけるきようだいは、命をほんとうの女だとばかり思
いこんでしまひまして、その姿のきれいなのがたいそう氣にいつ
たので、とくに自分たち二人の間にすわらせて、大喜びで飲みさ
わぎました。

命は、みんながすっかり興きように入つたところを見はからつて、そつ
ふところつるぎと懐から劍をお取り出しになつたと思ひますと、いきなり片手で
兄の建たけるのえり首をつかんで、胸むねのところをひと突つきに突き通して
おしまひになりました。

弟の建たけるはそれを見ると、あわててへやの外へ逃げ出そうとしま
した。

命みことは、それをもすかさず、階かい段だんの下に追いつめて、手早く背せ

中なかをひつつかみ、ずぶりとおしりをお突き刺さしになりました。

建たけるはそれなりじたばたしようともしないで、

「どうぞその刀をしばらく動かさないでくださいまし。一言申ひとこと

しあげたいことがございます」と、言いました。それで命みことは刀を

お刺さしになったなり、しばらく押おし伏ふせたままにしていらつしや

いますと、建たけるは、

「いったいあなたはどなたでございます」と聞きました。

「おれは、大和やまとの日代ひしろの宮みやに天下てんかを治めておいでになる、大帯おおたら

日子天皇しひこてんのうの皇子おうじ、名は倭童やまとおぐなの男みこ王みこという者だ。なんじら二

人とも天皇のおおせに従わず、無礼なふるまいばかりしているの

で、勅命ちよくめいによって、ちゆう伐ばつにまいつたのだ」と、命みことはおお

しくお名乗りになりました。

たける
建はそれを聞いて、

「なるほど、そういうお方に相違ございますまい。この西の国じゆうには、私ども二人より強い者は一人もおりません。それにひきかえ大和やまとには、われわれにもまして、すばらしいお方がいられたものだ。おそれながら私がお名まえをさしあげます。これからあなたのお名まえは やまとたけるのみこと 倭建命 とお呼び申よしたい」と言いました。

たける
命は建がそう言いおわるといつしよに、その荒あらくれ者を、まるじゆくで熟したまくわうりを切るように、ずぶずぶと切りほうっておしまいになりました。

それ以来、だれもかれも命のご武勇をおほめ申して、お名まえやまとたけるのみことを倭建命やまとと申しあげるようになりました。

命は、それから大和やまとへおひきかえしになる途中で、いろんな山の神や川の神や、穴戸あなどの神と称となえて、方々の險阻けんそなところなたてこもっている悪神わるがみどもを、片かたはしからお従したがえになつた後、出雲いずもの国へおまわりになつて、そのあたりで幅はばをきかせている、出いずも雲建たけるという悪者をお退治たいじになりました。

命みことはまずその建たけるの家へたずねておいでになつて、その悪者とごこうさいをお結びになりました。そして、そのあとで、こつそりとあかひのきという木を刀のようにお削りけずになり、それをりつぱな太刀たちのように飾りかざをつけておつるしになつて、建たけるをさそい出し

て、二人で肥ひの河かわの水を浴びにいらつしやいました。そして、いかげんなころを見はからつて、ご自分の方が先におあがりになり、ごじょうだんのように建たけるの太刀をお身におつけになりながら、「どうだ、二人でこの刀のとりかえっこをしようか」とおつしやいました。建たけるはあとからのそのそあがつて来て、

「よろしい取りかえよう」と言いながら、うまくだまされて命のにせの刀をつるしました。命は、

「さあ、ひとつ二人で試合をしよう」とお言いになりました。そして二人とも刀を抜き放ぬすだんになりますと、建たけるのはにせの刀ですから、いくら力を入れても抜けようはずがありません。命は建たけるがそれでまごまごしているうちに、すばやくほんものの刀を引き

抜いて、たちまちその悪者を切り殺しておしまひになりました。そして、そのあとで、建たけるが抜けない刀を抜こうとして、まごまごとあわてたおかしさを、歌につくつてお笑いわらになりました。

三

命みことはこんなにして、お道筋みちすじの賊ぞくどもをすつかり平たいらげて、大和やまとへおかえりになり、天皇にすべてをご奏そうじょう上じょうなさいました。

すると天皇は、またすぐにひき続いて、命に、東の方の十二か国の悪い神々や、おおせに従とわない悪者どもを説とき従とえてまいれとおおせになつて、ひいらぎの矛ほこをお授さずけになり、御鉏みすき友耳建ともみみたけ

日子ひこ という者をおつけ添そえになりました。

命はお言いつけを奉じて、またすぐにおでかけになりました。

そして途中で伊勢いせのお宮におまいりになって、おんおば上の倭やまと
媛ひめに再度さいどのお別れをなさいました。そのとき命はおんおば上に
向かっておつしやいました。

「天皇は私を早くなくならせようとしてもおぼしめすのでしよう。
でも、こないだまで西の方の賊うを討ちにまいっておりまして、や
つと、たった今かえったと思いますと、またすぐに、こんどは東
の方の悪者どもを討ちとりにお出しになるのはどういうわけでご
ざいましょう。それもほとんど軍勢ぐんせいというほどのものもくださ
らないのです。こんなことからおして考えてみますと、どうして

も私を早く死なせようとお心持としか思われません」命はこ
うおつしやつて涙なみだながらにお立ちになろうとしました。

おんおば上は、命のそのお恨みうらをおやさしくおなだめになつた
うえ、もと神代かみよのときに、須佐之男命すさのおのみことが大じやの尾の中からお
拾いになつた、あの貴いお宝たからもの物の御剣みつるぎと、ほかに袋ふくろを一つ
お授けになり、まん一、急なことが起こつたら、この袋ふくろの口をお
解ときなさい、とおおせになりました。

命はそれから尾張おわりへおはいりになつて、その国くにのみやつこ造むすめの娘
の美夜受媛みやずひめのおうちにおとまりになりました。そして、かえりに
はまた必ず立かならち寄よるからとお言いひのこしになつて、さらに東の国
へお進あみになり、山や川に住あんでゐる、荒あくれ神や、そのほか天

皇にお仕えしない悪者どもをいちいちお説き従えになりました。そしてまもなく相模さがみの国へお着きになりました。

するとその国くにのみやつこ造むすが、命をお殺し申そうとたくらんで、「あすこの野中に大きな沼ぬまがございます。その沼の中に住んでおります神が、まことに乱暴らんぼうなやつで、みんな困こまっております」と、おだまし申しました。

命はそれをまにお受けになって、その野原の中へはいつておいでになりますと、国くにのみやつこ造むすは、ふいにその野へ火をつけて、どんどん四方から焼きたてました。

命ははじめて、あいつにだまされたかとお気づきになりました。その間まにも火はどんどんま近せまに迫せまつて来て、お身あやうが危あやうくなりました。

た。

命はおんおば上のおおせを思い出して、急いで、例の袋のひもをといてご覧らんになりますと、中には火打ひうちがはいっております。

命はそれで、急いでお宝たからもの物の御剣みつるぎを抜ぬいて、あたりの草

をどンドンおなぎ払いになり、今の火打ひうちでもつて、その草へ向か

い火をつけて、あべこべに向こうへ向かってお焼きたてになりま

した。命はそれでようやく、その野原からのがれ出ていらつしや

いました。そしていきなり、その悪い国くにのみやつこ造てしたと、手下の者ど

もを、ことごとく切り殺して、火をつけて焼いておしまいになり

ました。

それ以来そのところを焼津やいずと呼びました。それから、命みことが草を

お切りはらいになつた御剣みつるぎを草薙くさなぎの剣つるぎと申しあげるようになりました。

命はその相模さがみの半島はんとうをおたちになつて、お船で上総かずさへ向かつてお渡りわたになろうとしました。すると途中で、その海の神がふいに大波おおなみを巻きあげて、海一面を大荒れおおあに荒れさせました。命の船はたちまちくるくるまわり流されて、それこそ進むこともひきかえすこともできなくなつてしまいました。

そのとき命がおつれになつていたお召使めしつかいの弟橘おとたちばなひめ媛ひめは、「これはきつと海の神のたたりに相違ちがひございません。私があなたのお身代わりになりました、海の神をなだめしましょう。あなたはどうぞ天皇のお言いつけをおしとげくださいまして、めでたくあ

ちらへおおかえりくださいまし」と言いながら、すげの畳たたみを八枚まい、

皮かわ 畳たたみを六枚に、

絹きぬ 畳たたみを八枚重かさねて、

波の上に投げおろさ

せるやいなや、身をひるがえして、その上へ飛びおりました。

おおなみ

大波は見るまに、たちまち媛ひめを巻まきこんでしまいました。す

るとそれといっしよに、今まで荒れ狂っていた海が、ふいにぱつたりと静まって、急に穩おだやかななぎになつてきました。

命はそのおかげでようやく船を進めて、上総かづさの岸へ無事にお着きになることができました。

それから七日目に、橘たちばな 媛ひめのくしがこちらの浜へうちあげら

れました。命はそのくしを拾わせて、あわれな媛ひめのためにお墓をお作らせになりました。

橘たちばなひめ 媛ひめが生前に歌った歌に、

さねさし、

さがむの小野おぬに、

もゆる火の、

火中ほなかに立ちて、

問いしきみはも。

これは、相模さがみの野原で火攻めにお会いになったときに、その燃える火の中にお立ちになっていた、あの危急なときにも、命みことは私なぐさのことをご心配くださって、いろいろに慰め問うてくださった、

ほんとに、お情け深い方よと、そのもつたいないお心持を忘れな
い印しるしに歌つたのでした。

命はそこから、なおどんどんお進みになって、いたるところで
手におえない悪者どもをご平定へいていになり、山や川の荒あらくれ神をも
お従えになりました。

それでいよいよ、再びふたたび大和やまとへおかえりになることになりました。

そのお途中で、足柄山あしがらやまの坂の下で、お食事をなすつておいで
になりますと、その坂の神が、白いしかに姿をかえて現われて、
命を見つめてつつ立っておりました。

命みことは、それをご覧らんになると、お食けべ残のこしのにらの切きれはしをお取
りになって、そのしかをめがけてお投げつけになりました。する

と、それがちようど目にあたつて、しかはばかりと倒れてしまひました。

命はそれから坂の頂上へおあがりになり、そこから東の海をおながめになつて、あの哀れな橘たちばなひめ媛ひめのことを、つくづくとお思いかえしになりながら、

「あずまはや」（ああ、わが女よ）とお嘆なげきになりました。それ以来そのあたりの国々をあずまと呼ぶようになりました。

四

命は、そこから甲斐かいの国へお越こえになりました。そして酒折さかおり

のみや
宮 という御殿ごてんにおとまりになつたときに、

にいばり、つくばを過ぎて、

いく夜よか寝ねつる。

とお歌いになりますと、あかりのたき火についていた一人の老人
が、すぐにそのおあとを受けて、

かかなべて、

よここのよ
夜には九夜、

とおか
日には十日を。

と歌いました。それは、

「蝦夷えびすどもをたいらげながら、常陸ひたちの新治にいばりや筑波つくばを通りすぎて、
ここまで来るのに、いく夜寝たであろう」とおっしゃるのに対して、

「かぞえて見ますと、九ここのよ夜寝て十日目とおかめを迎えましたのでごさいます」という意味でした。

命はその答えの歌をおほめになつて、そのごほうびに、老人を
あずまのくにのみやつこ
東 国 造 という役におつけになりました。

それから信濃しなのへおはいりになり、その国くに境ぎかいの地の神を討う
ち従えて、ひとまずもとの尾張おわりまでお帰りになりました。

命はお行きがけにお約束をなすつたとおり、美夜受媛みやずひめのおうちへおとまりになりました。そして草薙くさなぎの宝剣ほうけんを媛ひめにおあずけになって近江おうみの伊吹山いぶきやまの、山の神を征伐せいぼつにおいになりしました。

命はこの山の神ぐらいは、す手でも殺すとおっしゃって、どんなのぼっておいでになりました。すると途中で、うしほどもあるような、大きな白いのししが現あらわれました。命は、

「このいのししに化ばけて出たのは、まさか山の神ではあるまい。神めしつかいの召使めしつかいの者であろう。こんなやつは今殺さなくとも、かえりにしとめてやればたくさんである」とおいばりになって、そのままのぼっておいでになりました。

そうすると、ふいに大きなひょうがどツと降りだしました。命はそのひょうにお襲おそわれになるといつしよに、ふらふらとお目まいがして、ちようどもものにお酔よいになったように、お気分が遠くおなりになりました。

それというのは、さきほどの白いのししは、山の神の召使ではなくて、山の神自身が化けて出たのでした。それを命があんなにけいべつして広こうげん言をお吐はきになったので、山の神はひどく怒おこつて、たちまち毒気どくきを含ふくんだひょうを降らして、命をおいじめ申したのでした。

命は、ほとんどほうにくれておしまいになりましたが、ともかく、ようやくのことで山をおくだりになって、玉倉部たまくらべという

ところにわき出ている清水しみずのそばでご休息をなさいました。そして、そのときはじめて、いくらかご気分がたしかにおなりになりました。しかし命はどうとうその毒気のために、すっかりおからだをこわしておしまいになりました。

やがて、そこをお立ちになって、美濃みのの当芸野たぎのという野中までおいでになりますと、

「ああ、おれは、いつもは空でも飛んで行けそうに思っていたのに、今はもう歩くこともできなくなった。足はちようど船のかじのように曲がってしまった」とおっしゃって、お嘆なげきになりました。そしてそのまままた少しお歩きになりましたが、まもなくひどく疲つかれておしまいになったので、とうとうつえにすがってひとあ一

足しひとあし 一足お進みになりました。

そんなにして、やつと伊勢いせの尾津おつの崎さきという海ばたの、一本まつのところまでおかえりになりますと、この前お行きがけのときに、そのまつの下でお食事をお取りになって、つい置きお忘れわすていらした太刀たちが、そのままなくならないで、ちゃんと残っておりました。

命みことは、

「お一つまつよ、よくわしのこの太刀たちの番をしていてくれた。おまえが人間であつたら、ほうびに太刀をさげてやり、着物を着せてやるのだけれど」と、こういう意味の歌を歌ってお喜びになりました。それからなおお歩きになって、ある村までいらつしや

いました。

命は、そのとき、

「わしの足はこんなに三重みえに曲がってしまった。どうもひどく疲つかれて歩けない」とおっしゃいました。しかしそれでも無理にお歩あきになって、能褒野のほのという野へお着きになりました。

命は、その野の中でつくづく、おうちのことをお思いになり、

あの青山あおやまにとりかこまれた、

美しい大和やまとが恋しい。

しかし、ああ私わたしは、

その恋しい土地へも、

帰りつくことはできない。

いのち
命あるものは、

これからがいせんして、

あの平群へぐりの山の、

くまがしの葉を、

髪かみに飾かざって祝い楽しめよ。

という意味をお歌いになり、

はしけやし、

わぎかたへの方よ、

雲いたち来くも。

(おおなつかしや、

わが家やのある、

はるかな大和やまとの方から、

雲が出て来るよ。)

と、お歌いになりました。

そして、それといっしょにご病びょう勢せいもどつとご危篤きとくになつて
きました。

命みことは、ついに、

おとめの、

床とこのべに、

わがおきし、

つるき太たち刀。
劍の太刀。

その太刀はや。

と、あの美夜受媛みやずひめのおうちにおいていらした宝劍ほうけんも、とうとう再びふたたび手にとることもできないかとお歌いになり、そのお歌の終わるのとともに、この世をお去りになりました。

早うまのお使いは、このことを天皇に申しあげにかけつけました。

大和やまとからは、命のお妃きさきぎやお子さまたちが、びっくりしてくだつておいでになりました。そして、命のご陵りようをお作りになつて、そのぐるりの田の中に伏ふしまろんで、おんおんおんと泣いていらつしやいました。

するとおなくなりになつた命は、大きな白い鳥になつて、お墓の中からお出ましになり、空へ高くかけのぼつて、浜辺はまべの方へ向かつて飛んでおいでになりました。

お妃きさきぎやお子さまたちは、それをご覧らんになると、すぐに泣き泣きそのあとを追いましたつて、ささの切り株かぶにお足を傷つけて血だらけにおなりになつても、痛いたさを忘わすれて、いっしょうけんめいにかけておいでになりました。

そしてしまいには、海の中にまではいって、ざぶざぶと追っかけていらつしやいました。

白い鳥はその人々をあとにおいて、海の中のいそからいそにと伝わって飛んで行きました。

お妃は潮きさぎしおの中を歩きなやみながら、おんおんお泣きになりました。

その鳥は、とうとう伊勢いせから河内かわちの志紀しきというところへ来てとまりました。それで、そこへお墓を作つて、いったんそこへお鎮しずめ申しましたが、しかし鳥は、あとにまた飛び出して、どんどん空をかけて、どこへともなく逃にげ去つてしまいました。

五

みこと

命には、お子さまが男のお子ばかり六人おいでになりました。

たらしなかつひこのみこと

その中の、たらしなかつひこのみこと帶中津日子命とおつしやる方は、後にお祖父上そふうえの

天皇のおつぎの成務せいむてんのう天皇のおあとをお継つぎになりました。すな

わち仲哀ちゆうあいてんのう天皇でいらつしやいます。

命が諸方を征伐せいばつしておまわりになる間は、七拳脛ななつかはぎという者

が、いつもご料理番としてお供について行きました。

おんちちうえ

けいこうてんのう御父上の景行天皇は、おん年百三十七でおかくれになり

ました。

ちようせんせいばつ
朝鮮征伐

一

ちゆうあいてんのう
仲哀天皇は、ある年、ご自身で熊襲くまそをお征伐せいばつにおくだり
になり、筑前ちくぜんの香椎かしいの宮というお宮におとどまりになっ
つしやいました。

そのとき天皇は、ある夜、戦いくさのお手だてについて、神さまのお
告げをいただこうとおぼしめして、大臣の武内宿禰たけのうちのすくねをお祭まつり

場ばへお坐すわらせになり、御自分はお琴ことをおひきになりながら、お二人でお祈いのりをなさいました。そうすると、どなたか一人の神さまが、皇后の息おきな長なが帯たらし媛ひめのおからだにお乗りうつりになり、皇后のお口をお借りになって、

「これから西の方にあるひとつの国がある、そこには金銀をはじめ、目もまぶしいばかりの、さまざまの珍めづらしい宝たからがどつさりある。つまらぬ熊襲くまその土地よりも、まずその国をあなたのものにしてあげよう」とおっしゃいました。

「しかし、高いところへ登って西の方を見ましても、そちらの方はどこまでも大おお海うみばかりで、国などはちつとも見えないではありませんか」と、天皇はお答えになりました。そしてお心のうち

では、

「これはほんとうの神さまではあるまい。きっといつわりを言う神が乗りうつたにちがいない」とおぼしめして、それなりお琴^{こと}をおしのけて、だまつておすわりになっていました。

すると神さまはたいそうお怒り^{いか}になって、

「そんな、わしの言葉^{ことば}をうたぐったりするものには、この国も任^{まか}せてはおかれない。あなたはもう、さっさと死んでおしまいなさるがよい」と、おおせになりました。

宿禰^{すくね}はその言葉を聞くと、びっくりして、

「これはたいへんでございます。陛下よ、どうぞもつとお琴をおひきあそばしませ」と、あわててご注意申しあげました。

天皇は仕方なしに、しづしづお琴をおひき寄せになつて、しばらくの間、申しわけばかりにほつぽつひいておいでになりましたが、そのうちにまもなく、ふツつりとお琴の音がとだえてしまいました。

宿禰すくねはへんだと思つて、灯ひをさし上げて見ますと、天皇はもはやいつのまにかお息が絶えて、その場にお倒れたおになつていらつしやいました。

皇后も宿禰すくねも、神さまのお罰ばつに驚き怖おそれて、急いでそのお空なきが骸らを仮のお宮へお移し申しました。そしてまず第一番に、神さまのお怒りをおなだめ申すために、そのあたりの国じゆうで生きた獣けものの皮を剥はいだり、獣を逆さかはぎにしたものをはじめとして、田

の畔くろをこわしたものの、溝みぞをうめたもの、汚きたないものをひりちらしたものの、そのほか言うも穢けがらわしいような、さまざまの汚きたない罪を犯したもののたちをいちいちさがし出させて、御幣ごへいをとつて、はらい清めて、国じゅうのけがれをすっかりなくしておしまいになりました。そして、宿禰すくねが再びお祭場ふたたに坐すわつて、改めて神さまのお告げをお祈り申しました。

すると神さまからは、この前おつしやつた西の国のことについて、同じようなおおせがありました。

「それからこの日本の国は、今、皇后のお腹なかにいらつしやるお子がお治めになるべきものだ」とおつしやいました。

皇后は、そのときちようどお身重みおもでいらつしやいました。宿禰すくね

はそのおおせを聞いて、

「では、おそ恐れながら、今、皇后のお腹においでになりますお子さまは、男のお子さまと女のお子さまと、どちらでいらつしやりましょう」とうかがいますと、

「お子はなんしご男子である」とお告げになりました。

すくね宿禰はなお、すべてのことをうかがっておこうと思ひまして、

「まことにおそれいますが、かようにいちいちお告げを下さいますあなたさまは、どなたさままでいらつしやいますか。どうぞお名まえをおあかしく下さいまし」と申しあげました。神さまは、やはり皇后のお口を通して、

「これはすべてあまてらすおおかみ天照大神のおぼしめしである。また、そこつつ底筒

おのみこと なかつつおのみこと 男命、うわつつおのみこと 中筒男命、うわつつおのみこと 上筒男命の三人の神も、いっしよに申し下くだしているのだ」と、そこではじめてお名まえをお告げになりました。

神さまはなお改めて、

「もしそなたたちが、ほんとうにあの西の国を得ようと思うならば、まず大空の神々、地上の神々、また、山の神、海の神、海と河かわとの神々にことごとくお供えを奉たてまつり、それから私たち三人の神みたまの御魂を船のうえに祀まつったうえ、まきの灰を瓠はいひさごに入れ、また箸はしと盆ぼんとをたくさんこしらえてそれらのものを、みんな海の上に散らし浮かべて、その中を渡わたって行くがよい」とおっしゃって、くわしく征伐せいばつの手順てじゆんをおしえてくださいました。

それで、皇后はすぐ軍勢をお集めになり、神々のお言葉ことばのとおりに、すべてご用意をお整ととのえになつて、仰ぎようさん山さんなお船をめしつらねて、勇ましく大海のまん中へお乗り出でになりました。

そうすると海じゆうの、あらゆる大小の魚が、のこらず駈かけよつて来て、すつかりのお船をみんなで背せなか中にお担かつぎ申しあげて、わつしよいわつしよいと、威勢いせいよく押おしはこんで行きました。そこへ、ちようどつごうよく、追つい手の風がどどん吹き募つつて来ました。ですから、それだけのお船がみんな、かけ飛ぶように走つて行きました。

そのうちに、そのたいそうな大船に押しまくられた大おおなみ浪なみが、しまいには大きな、すさまじい大おおつなみ海うみ嘯なみとなつて、これから皇后

がご征伐になろうとする、今の朝鮮ちやうせんの一部分の新羅しんらの国へ、ふいにどどんと打ち上げました。そして、あつという間に、国じゆうを半分までも巻き込んでしまいました。

皇后の軍勢は、その大海嘯と入れちがいに、息もつかせずうわあつと攻めこみました。すると新羅しんらの王はすっかり怖れちぢこまつて、すぐに降参こうさんしてしまいました。

国王は、

「私どもはこれからいついつまでも、天皇のおおせのままに、おうま飼かいの下郎げろうとなりまして、いっしょうけんめいにご奉公申しあげます。そして毎年まいとし船をどつきり仕立てまして、その船底ふなぞこの乾かわくときもなく、棹さおや櫂かいの乾くまもなほないほどおうかがわせ申

しまして、絶えず貢物みつぎもの たてまつを奉り天地が亡びますまで無久むきゆうにお仕え申しあげます」と、平蜘蛛ひらぐものようになつておちかいをいたしました。

それで皇后はさつそくお聞き届けとどになりまして、新羅しらぎの王をおうま飼かいということにおきめになり、その隣となりの百済くだらをもご領地りようちにお定めになりました。そしてそのお印しるしに、お杖つえを、新羅しらぎの王おうきゆう宮みやうの門のところところに突き刺さしてお置きおになりました。

それから最後に、お社やしろをお作りになつて、今度のご征伐せいばつについていちいちお指図さしずをしてくださつた、底筒そこつつ男命おのみこと以下三人の神さまを、この国の氏神うじがみさまにお祀まつりになつた後、ご威風堂々いふうたうたうと新羅しらぎをおひき上げになりました。

二

おん母上の皇后はその前に、まだご征伐のお途中でお腹なかのお子さまがお生まれになろうとしました。それで、どうぞ今しばらくの間はご出産にならないようにとお祈りになって、そのお呪まじないにお下着のお腰こしのところへ石ころをおつるしになり、それでもって当分お腹をしずめておおきになりました。

するとお子さまは、ちゃんと筑紫つくしへお凱旋がいせんになってからご無事にお生まれになりました。それはかねて神さまのお告げのとおりにりっぱな男のお子さまでいらっしやいました。この小さな天皇

には、ご誕生たんじょうのときに、ちょうど、輶とちといつて弓ゆみを射るときに左の臂ひじにつける革具かわぐのとおりの形をしたお盛肉もりにくが、お腕うでに盛りあがっております。皇后はこれをお名まえにお取りになつて、おおとものみこと
大輶おおうじん命てんのうとお名づけになりました。すなわち後にお呼び申す
応神おうじん天皇さまです。その輶とちのお肉なのことをうけたまわつたものたちは、天皇がお母上のお腹なかのうちから、すでに天下をお治めになつていたといふことは、これでもわかると言つて、みんな畏おそれ入りました。

また、皇后はご出征のまえに、肥前ひぜんの玉島たましまというところにおいでになつて、その川のほとりでお食事をなさつたことがあります。

それがちようど四月で、あゆが取れるころでした。皇后はた
 しにその川中の石の上にお下りになつて、お下したばかま袴かまの糸をぬい
 て釣つりいと糸いとになされ、お食事のおあとのご飯粒はんつぶを餌えさにして、ただで
 も決して釣つることができないあゆをちやんとおつり上げになりま
 した。

ですからこの地方では、その後いつも四月のはじめになります
 と、女たちがみんな下したばかま袴かまの糸をぬいて、飯粒めしつぶを餌えさにしてあ
 ゆを釣り、ながく皇后のお徳をかたりつたえる印しるしにしておりまし
 た。

おん母上の皇后は、ついで熊襲くまそをも難なくご平定になつて、いよいよ大和やまとにおかえりになることになりました。

しかし、大和には、香坂王かごさかのみこ、忍熊王おしくまのみことおつしやる、お二人のお腹はらちがいの皇子などがおいでになるので、うっかりしていると、天皇がお小さいのにつけ入つてどんな悪い事をお企たくらみになるかわからないとお気づかひになりました。

それで皇后は、ちゃんとお策さくりやく略をお立てになつて、喪船もふねを一そうお仕立てになり、お小さな天皇をその中へお乗せになりました。

そして天皇はもはやとくにお亡なくなりになつたとお言いふらし

になり、そのお空骸なきからをつれておかえりになるていにして、筑紫つくしをお立ちになりました。

こちらは香坂かごさか、忍熊おしくまの二皇子は、それをお聞きになりますと、案のとおり、ご自分たちがあとを取ろうとおかかりになりました。それでまず第一番に皇后の軍勢を待ちうけて討ち亡ぼそうとおぼしめして、にわか**に**兵を集めて、摂津せつの斗賀野とがのというところまでご進軍になりました。

皇子たちは、その野原でためしに獵りようをして、その獲物えものによつて、さいさきを占つてうらなみようとなさいました。

香坂皇子かごさかのおうじは、くぬぎの木に上つて、その獵ありさまの有様を見ていらつしやいました。すると、ふいにそこへ、手傷てきずを負つた大き

ないのししがあらわれて、そのくぬぎの木の根もとをどんどん掘ほりにかかりました。そしてまもなくすとんと掘り倒たおしたと思いますと、いきなり香かごさ坂皇子かのおうじに飛びかかつて、がつがつ皇子を食べてしまいました。

しかし、弟さまの忍熊皇子おしくまのおうじは、そんな悪い前兆ぜんちようにもとんじやくなしに、そのまま軍勢をおひきつれになり、海ばたまで押しかけて、待ちかまえていらつしやいました。

そのうちに、皇后がたのお船が見えて来ました。忍熊王おしくまのみこは、その中の喪船もふねには、兵たいたちが乗っていないはずなので、まずまつ先にその船を目がけてお討うちかからせになりました。

ところがその船の中には、前もってちやんとよりすぐりの兵が

忍しのばせてありました。その兵士たちは船がつくなり、ふいに、うわつと飛び下りて、たちまち、はげしい戦いくさをはじめました。

そのとき 忍熊王おしくまのみこの軍勢ぐんぜいには、伊佐比宿禰いさひのすくねというものが総そ

大將うたいしやうになつていました。それに対して皇后方からは建振たけふるくま

熊命のみことという強い人が將軍となつて攻めかけました。

建振熊命たけふるくまのみことは見る見るうちに宿禰すくねの軍勢を負かし崩くずして、

ぐんぐんと、どこまでも追つかけて行きました。すると敵は山やまし城ろでふみ止とどまつて、頑固がんこに防ふせぎ戦いくさをいたしました。

建振熊命たけふるくまのみことは、何と言いながら、死にもの狂ぐるいで攻めか

け攻めかけしました。しかし、どんなにあせつても敵はそれなりひと足も退ひこうとはしませんでした。

建振熊命たけふるくまのみことは、しまいには、これでは果はてしが無いと思ひ直して、急に味方の兵をひきまとめるといつしよに、向こうの軍勢に向かつて、

「実は皇后が急におなくなりになつたので、われわれはもう戦いくさをする気はない」と申し入れながら、その目の前で全軍ぜんぐんの兵士たちへいしに弓の弦ゆみづるをことごとく断たち切きらせて、さもほんとうのように、伊佐比宿禰いさひのすくねに降参こうさんをしました。

すると伊佐比宿禰いさひのすくねはそれですっかり気をゆるして、自分のほうもひとまずみんなに弓の弦つるをはずさせ、いつさいの戦道具いくさをも片づけさせてしまいました。

建振熊命たけふるくまのみことはそれを見すまして、

「それッ」と合あいあいあ図ずをしますと、部ぶ下かの兵へいたちは、髪かみの中なかに隠かくしていた、かけがえの弦しんを取とり出だして瞬またたくまに弓ゆみを張はつて、

「うわッ」と、哄ときを上げて攻せめかかりました。

敵てきはまんまと不ふ意いを討たれて、総そうくずれになつてにげ出しました。
建たけ振ふる熊くま命のみことは勝かちに乗じてどんどんと追おいまくつて行きました。

すると敵てき勢せいは近おう江みの逢おう坂さかというところまでにげのびて、
こでいつたん踏ふみ止まつて戦いましたが、また攻めくずされて、
ちりぢりににげて行きました。

建たけ振ふる熊くま命のみことは、とうとうそれを同おじ近江みの篠ささ波なみというと

ころで追おいつめて、敵てきの兵へいたいという兵へいたいを一人ひとものこさず斬き

り殺してしまいました。

そのとき おしくまのみこ 忍熊王と伊佐比宿禰とは、あやう 危く船に飛び乗って、

湖水の中へにげ出しました。

しかしぐずぐずしていると今につかまってしまふのが目に見えていましたので、おうじ 皇子は宿禰すくねに向かつて、

さあ、おまえ、

ふるくま 振熊に殺されるよりも、

かいつぶり 鳩鳥のように、

この湖水にもぐってしまおうよ。

とお歌いになり、二人でざんぶと飛び込んで、それなり溺れ死おぼに死んでおしまいになりました。

四

皇后はそれでいよいよめでたく大和やまとへおかえりになりました。
 しかし武内宿禰たけのうちのすくねだけは、お小さな天皇をおつれ申して、穢けがれ払いの禊はらといふことをしに、近江おうみや若狭わかさをまわって、越前えちぜんの鹿角つぬがというところに仮のお宮を作り、しばらくの間そこに滞在たいざいしておりました。

するとその土地に祀まつられておいでになる伊奢沙和氣大神いささわけのおおかみという

神さまが、あるばん宿禰すくねの夢に現われていらしつて、

「わしの名を、お小さい天皇のお名と取りかえてくれぬか」とお
つしやいました。

宿禰すくねは、

「それはもつたいないおおせでございます。どうもありがとう存
じます」とお答え申しました。大神おおかみは、「それでは、明日あすお供
をして海ばたへ来るがよい。名を取りかえてくださったお礼を上
げようから」とおつしやいました。

それである朝早く、天皇をおつれ申して海岸へ出て見ますと、
みんな鼻の先に傷きずをうけた、それはそれはたいそうな海豚いづかが、浜
じゆうへいっぱいうち上げられておりました。

宿禰すくねはさつそくお社やしろへお使いをたてて、

「食さべ料のお魚かなをどつさりありがとう存じます」とお礼を申しあげました。

天皇はそれから大和やまとへおかえりになりました。

お待ち受けになっていたお母上の皇后は、それはそれは大喜びをなすつて、さつそくご用意のお酒を出させて、お祝いのおさかもりをなさいました。

皇后は、

このお酒は、私わたしがかもした酒ではない。

葉の神の少名彦すくなひこ名神なのかみがあなたのご運をお祝いして、

喜びさわいでつくつてくだされたお酒だから、
のこさず、すっかりめし上がってください。
さあさあどうぞ。

という意味をお歌いになりました。

宿禰すくねは天皇に代わって、

このお酒をつくつた人は、
鼓つづみを白うすの上に立てて、

歌いながら、舞まいながら、

喜び喜びつくつたせいでございますか、

それはそれはたいそうよいお酒で、

いただきますとひとりでに歌いたく、

舞いたくなつてまいります。

ああ楽しや。

とお答えの歌を歌いながら、ともどもお喜び申しました。

後の世の人は、この母上の皇后の、いろんな雄々おしい大きなお
手柄てがらをおほめ申しあげて、お名まえを特に神功皇后じんぐうこうごうとおよび
申しております。

赤い玉

一

神功皇后のお母方のご先祖については、こういうお話が
伝わっています。

それは、この時分から、もつともつと昔、新羅の国の阿具沼
という沼のほとりで、ある日一人の女が昼寝をしておりまし
たと、ふしぎなことには、日の光がにじのようになって、さつ

と、その女のお腹なかへ射さしました。

それをちようど通りかかった一人の農夫が見て、へんなこともあるものだと思いながら、それから、いつもその女のそぶりに目をつけていますと、女はまもなくお腹が大きくなって、一つの赤い玉を生み落としました。農夫はその玉を女からもらつて、物につつんで、いつも腰こしにつけていました。

この農夫は谷間たにまに田を作つておりました。ある日農夫は、その田で働いている人たちのたべ物を、うしに負わせて運んで行きますと、その谷間あめのひほこで、天日矛あめのひほこという、この国の王子に出会いました。

王子は農夫がへんなところへうしを引いて行くのを見て、

「これこれ、そちはどうしてそのうしへたべ物などを乗せてこんなところへはいつて来たのだ。きつと人に隠かくれてそのうしも殺して食おうというのであろう」と言いながら、いきなり農夫をつかまえてろうやへつれて行こうとしました。農夫は、

「いえいえ私はけつしてこのうしを殺そうなどとするのではございません。ただこうして百ひやく姓くしやうたちのたべ物を運んでまいりますだけでございます」と、ほんとうのままを話しました。それでも王子は、

「いやいや、うそだ」と言つて、なかなかゆるしてくれないので、農夫は腰こしにつけている例の赤い玉を出して、それを王子にあげて、やつとのことばで放してもらいました。

王子はその玉をおうちへ持って帰って、床とこの間に置いておきました。すると赤い玉が、ふいに一人の美しい娘になりました。王子はその娘を自分のお嫁よめにもらいました。

そのお嫁は、いつもいろいろの珍めづらしいお料理をこしらえて、王子に食べさせていましたが、王子はだんだんにわがままを出して、しまいにはお嫁をひどくののしりとばすようになりました。

するとお嫁のほうではとうとうたまりかねて、

「私わたしはもうこれぎり親たちの国へ帰ってしまいます。もともと私は、あなたのような方のお嫁になってばかにされるような女ではありません」と言いながら、そのうちを抜ぬけ出して、小船に乗って、はるばると摂津せつの難波なにわの津つまで逃げて来ました。この女の

は後に阿加流媛あかるひめという神さまとしてその土地にまつられました。

王子の天日矛あめのひほこは、そのお嫁のあとを追っかけて、とうとう難な

波にわの海まで出て来ましたが、その海の神がさえぎって、どうし

ても入れてくれないものですから、しかたなしにひきかえして、

但馬たじまの方へまわって、そこへ上陸しました。そして、しばらくそ

こに暮らしているうちに、後にはとうとうその土地の人をお嫁に
もらって、そのままそこへいつくことにしました。

この天日矛あめのひほこの七代目の孫にあたる高たかぬ額ひめ媛ひめという人がお生み

申したのが、すなわち神功皇后じんぐうこうごうのお母上でいらっしやいまし

た。例の垂仁すいにんてんのう天皇のお言いつけによって、常世国とこよのくにへたちは

なの実を取りに行つたあの多た遅じ摩ま毛も理りは、日矛ひほこの五代目の孫の一

人でした。

日矛ひほこはこちらへ渡わたつて来るときに、りつぱな玉や鏡なその宝ほうも物つを八品やしな持つて来ました。その宝物は、伊豆志いずしの大神おおかみという名まえの神さまにしてまつられることになりました。

二

この宝物をまつた神さまに、伊豆志乙女いずしおとめという女神めがみが生まれました。この女神を、いろんな神々たちがお嫁にもらおうとなさいました。女神はいやがって、だれのところへも行こうとはしませんでした。

その神たちの中に、秋山の下^{した}氷男^{びおとこ}という神がいました。その

神が弟の春山^{はるやま}の霞男^{かすみおとこ}という神に向かつて、

「^{わたし}私はあの女神をお嫁にしようと思つても、どうしても来てくれない。どうだ、おまえならもらつてみせるか」と聞きました。

「^{わたし}私ならわけなくもらつて来ます」と弟の神は言いました。

「ふふん、きつとか。よし、それではおまえがりつぱにあの女神^{めがみ}をもらつて見せたら、そのお祝いに、わしの着物をやろう。それからわしの身の丈^{たけ}ほどの大がめに酒を盛^もつて、海山の珍^{めづら}しいごちそうをそろえて呼^よんでやろう、しかし、もしもらいそこねたら、あんな広^{こうげん}言^はを吐^はいた罰^{ばつ}に、今わしがしてやろうと言つたとおりをわしにしてくれるか」と言いました。

弟の神は、おお、よろしい、それではかけをしようと思ひました。そして、おうちへ歸つて、そのことをおかあさまにお話しますと、おかあさまの女神は、一ひとばん晩のうちに、ふじのつるで、着物からはかまから、くつからくつ下まで織つたり、こしらえたりした上に、やはり同じふじのつるで弓をゆみこしらえてくれました。

弟の神はその着物やくつをすっかり身につけて、その弓矢ゆみやを持つて、例の女神のおうちへ出かけて行きました。すると、たちまち、その着物やくつや弓矢にまで、残らず、一度にぱつとふじの花が咲きさそろいました。

弟の神はその弓矢を便所のところへかけておきますと、女神はそれを見つけて、ふしぎに思いながら取りはずして持つて行きま

した。弟の神は、すかさず、そのあとについて女神のへやにはいつて、どうぞ私わたしのお嫁になつてくださいと言いました。そして、とうとうその女神をもらつてしまいました。

二人の間には一人子供までできました。

弟の神は、それで兄の神に向かつて、

「私わたしはあのとおり、ちゃんと女神めがみをもらいました。だから約束の

とおり、あなたの着物をください。それからごちそうもどつさりしてください」と言いました。すると兄の神は、弟の神のことをたいそうねたんで、てんで着物もやらないし、ごちそうもしませんでした。

弟の神は、そのことを母上の女神に言いつけました。すると女

神は、兄の神を呼んで、

「おまえはなぜそんなに人をだますのです。この世の中に住んでいる間は、すべてりっぱな神々のなさるとおりをしなければいけません。おまえのように、いやしい人間のまねをする者はそのままにしてはおかれない」と、ひどく怒りつけました。それから、そこいらの川の中の島にはえているたけを伐って来て、それで目の荒いあらかごを作り、その中へ、川の石に塩をふりかけて、それをたけの葉につつんだのを入れて、

「この兄の神のようなくそつきは、このたけの葉がしおれるようにしおれてしまえ。この塩がひるようにひからびてしまえ。そして、この石が沈むように沈み倒れてしまえ」とのろって、そのか

ごをかまどの上に置かせました。

すると兄の神は、そのたたりで、まる八年の間、ひからびしおれ、病やみつかれて、それはそれは苦しい目を見ました。それでとうとう弱り果はてて泣なく泣く母上の女神におわびをしました。

女神はそのときやつとのろいをといてやりました。そのおかげで兄の神は、またもとのとおりのじょうぶなからだにかえりました。

宇治うじの渡わたし

一

お小さな応おうじん仁てん天皇のうも、そのうちにすっかりご成人になつて、
 大和やまとの明あきらの宮で、ご自身まつりごとに政をお聞きになりました。

あるとき、天皇は近江おうみへご巡じゆん幸こうになりました。そのお途中
 で、山城やましるの宇治野うじのにお立ちになつて、葛野かづのの方をご覧らんになりま
 すと、そちらには家々も多く見え、よい土地もどつきりあるのが

お目にとまりました。

天皇はそのながめを歌にお歌いになりながら、まもなく木幡こばたというところまでおいでになりますと、その村のお道筋で、それはそれは美しい一人の少女にお出会いになりました。

天皇は、

「そちはだれの娘むすめか」とおたずねになりました。

「私は比布礼能意富美ひふれののおおみと申します者の子で、宮主みやぬし矢河枝媛やかえひめと申します者でございます」と、その娘はお答え申しました。

すると、天皇は

「ではあす帰りにそちのうちへ行くぞ」とおっしゃいました。

媛ひめはおうちへ帰って、すべてのことをくわしくおとうさまに話

しました。

おとうさまの意お富美は、

「それではそのお方は天子さまだ。これはこれはもつたいない。そちも十分気をつけて失礼のないようによくおもてなし申しあげよ」と言いきかせました。そしてさつそくうちじゆうを、すみずみまですつかり飾かざりつけて、ちゃんとお待ち申しておりました。

天皇のおおせのとおり、あくる日お立ちよりになりました。意お富美おみらは怖おそれかしこみながら、ごちそうを運んでおもてなしをしました。

天皇はやかわえひめ矢河枝媛たてまつが奉るさかずきをお取りになって、

この料理のかには、

えちぜんつるが
越前敦賀のかにが、

横ざまにはつて、

おうみ
近江を越えて来たものか。

わしもその近江おうみから来て、

こばた
木幡の村でおまえに会った。

うしろすがた
おまえの後姿は、

たて
盾のようにすらりとしている。

おまえのきれいな齒並はなみは、

しいの実みのように白く光っている。

顔には九邇坂わにざかの土を、

そこの土は、

うわつち

上土は赤く、

そこつち

底土は赤黒いけれど、

なかつち

中土の、

ちようど色のよいのを

まゆずみ

眉墨まゆずみにして、

こ

色濃く眉まゆをかいている。

おまえはほんとうにきれいな子だ。

とこういう意味のお歌を歌っておほめになりました。

天皇は、この美しい矢河枝媛やかわえひめを、後にお妃きさきにお召めしになりました。このお妃から、うじのわかいらつこ宇治若郎子とおつしやる皇子がお生まれになりました。

天皇には、すべてで、皇子が十一人、皇女が十五人おありになりました。

その中で、天皇は、やかわえひめ矢河枝媛のお生み申した、わかいらつこおうじ若郎子皇子を、いちばんかわいくおぼしめしていらつしやいました。

あるとき天皇は、そのわかいらつこおうじ若郎子皇子とはそれぞれお腹はらちがいのお兄上めでいらつしやる大おおやまもりのみこと山守命と大おおささぎのみこと雀命のお二人をお召めしになつて、

「おまえたちは、子供は兄と弟とどちらがかわいいものと思うか」

とお聞きになりました。

おおやまもりのみこと
大山守命は、

「それはだれでも兄のほうをかわいくおもいます」と、ぞうさもなくお答えになりました。

しかしお年下の おおささぎのみこと 大雀命は、お父上がこんなお問いをおか

けになるのは、わたしたち二人をおいて、弟の若郎子わかいらつこにお位を

お譲りゆずになりたいというおぼしめしに相違そういないと、ちゃんと、天

皇のお心持をおさとりになりました。それでそのおぼしめしに添そうように、

「私は弟のほうがかわいいだろうと思います。兄のほうは、もはや成人しておりますので、何の心配もございませんが、弟となり

ますと、まだ子供でございますから、かわいいそうでございます」とお答えになりました。

天皇は、

「それは雀ささぎの言うとおりである。わしもそう思っている」とおおせになり、なお改めて、

「ではこれから、そちら二人と若郎子わかいらつこと三人のうち、大山守おおやまもり

は海と山とまつりごとのことを司つかさどれ、雀ささぎはわしを助けて、そのほかのすべての政をとり行なえよ。それから若郎子わかいらつこには、後にわしのあとを

継いで天皇の位につかせることにしよう」と、こうおっしゃって、ちやんと、お三人のお役わりをお定めになりました。

大山守命おおやまのりのみことは、後に、このお言いつけにおそむきになって、

わかいらつこおうじ
 若郎子皇子を殺そうとさせなさいましたが、ひとり大雀
こと
 命だけは、しまいまで天皇のご命令のとおりにおつくしになり
 ました。

二

天皇は日向ひゆうがの諸もろ郡あがたぎみ君みという者の子に、髪長媛かみながひめという、
 たいそうきりようのよい娘むすめがあるとお聞きになりました、それを
 御殿ごてんへお召めし使いになるつもりで、はるばるとお召しのぼせにな
 りました。

皇子おうじの大雀おおささぎのみこと命みことは、その髪長媛かみながひめが船で難波なにわの津つへ着いた

ところをご覧らんになり、その美しいのに感心しておしまいになりました。それで武内宿禰たけのうちのすくねに向かつて、

「こんど日向ひゆうがからお召しよせになったあの髪長媛かみながひめを、お父上にお願ねがいして、私のお嫁よめにもらつてくれないか」とお頼たのみになりました。

宿禰すくねはかしこまって、すぐにそのことを天皇に申しあげました。

すると天皇は、まもなくお酒盛さかもりのお席へ大雀命おおささぎのみことをお召しになりました。そして、美しい髪長媛かみながひめにお酒をつぐかしわの葉をお持たせになつて、そのまま命みことにおくだしになりました。

天皇はそれといつしよに、

わしが、子どもたちをつれて、
のびるをつみに通り通りする、
あの道ばたのたちばなの木は、
上の枝々えだえだは鳥あらしに荒され、
下の枝々は人にむしられて、
中の枝にばかり花がさいている。
そのひそかな花の中に、
小さくかくれている実のような、
しとやかなこの乙女おとめなら、
ちようどおまえにに似あっている。
さあつれて行け。

という意味をお歌に歌ってお祝いになりました。

皇子おうじはとうから評判にも聞いていた、このきれいな人を、天皇のお許しでお妃きさきにももらいになったお嬉うれしさを、同じく歌にお歌いになって、大喜びで御前ごぜんをおさがりになりました。

三

この天皇の御代みよには、新羅しらぎの国の人々がどつさり渡わたつて来ました。武内宿禰たけのうちのすくねはその人々を使つて、方々に田へ水を取る池などを掘ほりました。

それから百済くだらの国の王からは、おうま一頭とう、めうま一頭に阿知あち吉師きしという者をつけて献けん上じようし、また刀や大きな鏡なぞをも献けんじました。

天皇は百済くだらの王に向かつて、おまえのところに賢い人かしこがあるならばよこすようにとおおせになりました。王はそれでさつそく和わ邇にきし吉師きしという学者をよこしてまいりました。

そのとき和邇わには、十卷かんの論語ろんごという本と、千字文せんじもんという一卷の本とを持って来て献上しました。また、いろいろの職工や、かじ屋たくその卓素たくそという者や、機織はたおりの西素さいそという者や、そのほか、酒を造ることのじょうずな仁番にほという者もいっしよに渡つて来ました。

天皇はその仁番にほ、またの名、須須許理すずこりのこしらえたお酒をめし

あがりました。そして、

「ああ酔よった、須須許理すずこりがかもした酒に心持よく酔った。おもしろく酔った」

という意味の歌をお歌いになりながら、お宮の外へおでましになつて、河内かわちの方へ行く道のまん中にあつた大きな石を、おつえをあげてお打ちになりますと、その石がびっくりして飛びのきました。

四

てんのう
 天皇は後にとうとうおん年百三十でおかくれになりました。

それで おおささぎのみこと 大雀命は、かねておおせつかつていらつしやると

おり、わかいらつこ 若郎子をお位におつけしようとなさいました。

ところが おおやまもりのみこと お兄上の大山守命は、天皇のおおせ残しにそむ

いて、わかいらつこ 若郎子を殺して自分で天下を取ろうとおかかりになり、

ひそかに兵をお集めになりだしました。

おおささぎのみこと 大雀命は、そのことを早くもお聞きつけになつたので、

すぐに使いを出して、わかいらつこ 若郎子にお知らせになりました。

わかいらつこ 若郎子はそれを聞くとびっくりなすつて、大急ぎでいろいろ

の手はずをなさいました。

おうじ 皇子はまず第一に、うじがわ 宇治川のほとりへ、こつそりと兵をしのば

せておおきになりました。それから、宇治うじの山の上に絹の幕を張り、とばりを立てまわして、一人のご家来けらいを、りっぱな皇子のようにしたてて、その姿すがたが山の下からよく見えるように、とばりの一方をあけて、その中のいすにかけさせておおきになりました。そして、そこへいろいろの家来たちを、うやうやしく出たりはいったりおさせになりました。

ですから、遠くから見ると、だれの目にも、そこには若郎子わかいらつこご自身がお出むきになっているように見えました。

皇子はそれといっしよに、大山守命おおやまのりのみことが下の川をおわたりになるときに、うまくお乗せするように、船をわざとたつた一そうおそなえつけになり、その船の中のすのこには、さなかつらと

いうつる草をついてべとべとの汗しるにしたものをいちめん塗りつけて、人が足を踏ふみこむとたちまち滑すべりころぶようなしかけをさせてお置きになりました。

そしてご自分自身は、粗末そまつなぬのの着物をめし、いやしい船頭のようにじょうずにお姿すがたをお変えになって、かじを握にぎって、その船の中に待ち受けておいでになりました。

すると大おお山やま守もり命のみことは、おひきつれになった兵士を、こつそりそこいらへ隠かくれさせておおきになり、ご自分は、よろいの上へ、さりげなく、ただのお召物めしものをめして、お一人で川の岸へ出ておいでになりました。

するとそちらの山の上にりっぱな絹のとばりなどが張りつらね

てあるのがすぐにお目にとまりました。

みこと

命はそのとばりの中にかめしくいすにかけている人を、若

らつこ

郎子だと思ひこんでおしまひになりました。それでさつそくそ

の船にお乗りになつて、向こうへおわたりになりかけました。

命は船頭に向かつて、

「おい、あすこの山に大きなておいじがいるという話だが、ひとつそのししをとりたいたいものだね。どうだ、おまえとつてくれぬか」とお言いになりました。

船頭の皇子は、

「いえ、それはとてもだめでございます」とお答えになりました。
「なぜだめだ」

「あのししは、これまでいろんな人がとろうとしましたが、どうしてもとれません。ですから、いくらあなたが欲しいとおぼしめしても、とてもだめでございます」

こうお答えになるうちに、船はもはやちようど川のまん中あたりへ来ました。すると皇子はいきなり、そこでどしんと船を傾けて、命をみことざんぶと川の中へ落としこんでおしまいになりました。命はまもなく水の上へ浮き出て、顔だけ出して流され流されなさりながら、

ああわしは押し流される。

だれかすばやく船を出して、

助けに来てくれよ。

という意味をお歌いになりました。

するとそれといっしよに、さきに若郎子わかいらつこが隠かくしておおきになつた兵士たちが、わあツと一度に、そちこちからかけだして来て、命を岸へ取りつかせないように、みんなで矢やをつがえ構かまえて、追おい流し追おい流ししました。

ですから命はどうすることもおできにならないで、そのまま訶か和羅前わらのさきというところまで流れていらしつて、とうとうそこでおぼれ死しにに死んでおしまいになりました。

若郎子わかいらつこの兵士たちは、ぶくぶくと沈しずんだ命みことのお死しがいを、か

ぎで探りあててひきあげました。

若郎子わかいらつこはそれをご覧になりながら、

「わしは伏せ勢ふせせいの兵たちに、もう矢を射放いはなさせようか、もう射殺させようかと、いくども思い思いたけれど、一つにはお父上のことを思いかえし、つぎには妹たちのことを思い出して、同じお一人のお父上の子、同じあの妹たちの兄でありながら、それをむざむざ殺すのはいたわしいので、とうとう矢一本射放すこともできないでしまった」

という意味をお歌いになり、そのまま大和やまとへおひきあげになりました。

そしてお兄上のお死がいを奈良ならの山にお葬りほうむになりました。

五

おおささぎのみこと

大雀命は、それでいよいよお父上のおおせのとおりに、

わかいらつこおうじ

若郎子皇子にお位におつきになることをおすすめになりました。

しかし皇子は、お父上のおあとはおあにいさまがお継つぎになるのがほんとうです。おあにいさまをさしおいてお位にのぼるなぞということは、私にはとてもできません。どうぞお許しくださいとおっしゃって、どこまでもお兄上みことの命のお顔をお立てになろうとなさいました。

しかし命は命で、いかなることがあっても、お父上のお言いつ

けにそむくことはできないとお言いとおしになり、長い間お二人
 でお互たがいに譲ゆずり合つていらつしやいました。

そのときある海人あまが、天皇へ献けんじょう上する物を持つてのぼつて
 来ました。

その海人が、大雀命おおささぎのみことのところへ伺うかがいますと、命みことは、それ
 は若郎子皇子わかいらつこおうじに奉たてまつれ、あの方が天皇でいらつしやるとおつしや
 つて、お受けつけになりませんし、それではと言つて皇子の方へ
 うかがえば、それはお兄上の方へ献けんぜよとおおせになりました。

海人あまはあつちへ行つたり、こつちへ来たり、それが二度や三度
 ではなかつたので、とうとう行つたり来たりにくたびれて、しま
 いにはおんおん泣なきだしてしまいました。そのために、「海人で

はないが、自分のものをもてあまして泣く」ということわざさえ
できました。

お二人はそれほどまでになすつて、ごめいめいにお義理をつく
していらつしやいましたが、そのうちに、わかいらつこおうじ若郎子皇子がふいに
お若死わかじにをなすつたので、おおささぎのみこと大雀命もやむをえず、ついにお
位におつきになりました。後の代からにんとくてんのう仁徳天皇とお呼び申す
のがすなわちこの天皇でいらつしやいます。

難波なにわのお宮

一

仁徳天皇にんとくてんのうはお位におのぼりになりますと、難波なにわの高津たかつの宮みやを皇居にお定めになり、葛城かつらぎの曾都彦そつひこという人の娘むすめの岩野媛いわのひめという方を改めて皇后にお立てになりました。

天皇てんかうがまだ皇子おうじ大雀おおささぎ命のみことでいらつしやるとき、ある年せつ摂津せつの日女島ひめじまという島へおいでになつて、そこで酒盛さかもりをなすつた

ことがありました。すると、たまたまその島にがんが卵たまごをうんで
 おりました。皇子は、日本でがんが卵をうんだということ、こ
 れまで一度もお聞きになつたことがないものですから、たいそう
 ふしぎにおぼしめして、あとで武内宿禰たけのうちのすくねを召して、

「そちは世の中にまれな長命の人であるが、いったい日本でがん
 が卵をうんだという話を聞いたことがあるか」とこういう意味を
 歌に歌つておたずねになりました。

すくね
 宿禰は、

「なるほど、それはごもつとものおたずねでございます。私もこ
 れほど長生きをいたしておりますが、今日まで、かつてそういう
 ためしを聞きましたことがございません」と、同じように歌に歌

つて、こうお答え申しあげた後、おそばにあつたお琴^{こと}をお借り申して、

「これはきつと、あなたさまがついに天下をお治めになるというめでたい先づれに相違^{そうい}ございません」と、こういう意味の歌をお琴^{こと}をひいて歌いました。皇子^{おうじ}はそのとおり、十五人もいらしたごきようだいの中から、しまいにお父上の天皇のおあとをお継^つぎになりました。

ご即位^{そくい}になつた後、天皇は、あるとき、高い山におのぼりになつて四方の村々をお見しらべになりました。そしてうちしおれておおせになりました。

「見わたすところ、どの村々もただひっそりして、家々からちっ

とも煙があがつていない。これではいたるところ、人民たちが炊たいて食べる物が無いほど貧ひんきゆう窮きゆうしているらしい。どうかこれから三年の間は、しもじもから、いつさい租そぜい税せいをとるな。またすべての働はたらきに使うのを許してやれ」とおおせになりました。

それでそのまる三年の間というものは、宮きゆうちゆう中ちゆうへはどこから

も何一つお納おさめもの物ものをしないので、天皇もそれはそれはひどいご

不自由をなさいました。たとえばお宮が破れこわれても、お手も

とにはそれをおつくりになるご費用もおありになりませんでし

た。しかし天皇はそれでも寸すんぶん分ぶんもおいといにならないで、雨が

ひどく降るたんびには、おへやの中へおけをひき入れて、ざあざ

あと漏もり入る雨あまもれをお受けになり、ご自分自身はしずくのおち

ないところをお見つけになって、御座所ござしよを移し移ししておしのぎになりました。

それから三年の後に、再び山にのぼってご覧らんになりますと、こんどはせんとはすっかりうって変わって、お目の及ぶおよ限り、どの村々にも煙がいつぱい、勢いよく立ちのぼっておりました。天皇はそれをご覧になって、みなのもも、もうすっかりゆたかになつたとおっしゃって、ようやくご安心なさいました。そして、そこではじめて租税そぜいや夫役ふえきをおおせつけになりました。

すると人民は、もう十分にたくわえもできていましたので、お納物おさめものをするにも、使い働うけたまわきにあがるのにも、それこそ楽々としてご用を承ることができました。

天皇はしもじもに對して、これほどまでに思いやりの深い方でいらつしやいました。ですから後の代よからも永くながお慕したい申しあげてそのいちだい一代をせい聖帝みよの御代とお呼よび申しております。

二

この天皇の皇后でいらつた岩野媛いわのひめは、それはそれは、たいへんにごしつとのはげしいお方で、ちよつとのことにも、じきに足ずりをして、火がついたようにお騒さわぎたてになりました。それですから、宮きゆううちゆう中にめ召し使めわれている婦人たちは、天皇のおへやなぞへは、うっかりはいることもできませんでした。

あるとき天皇はそのころ吉備きびといつていた、今の備前びぜん、備後びつちゆ、
 中地方うちほうの、黒崎くろさきというところに、海部直あまのあたえという者の子で、
 黒媛くろひめというたいそうきりようのよい娘むすめがいますとお聞きになり、
 すぐに召めしのぼせて宮中でお召し使いになりました。

ところが皇后がことごとにつけて、あまりにねたまみおいじめに
 なるものですから、黒媛くろひめはたまりかねてとうとうお宮を逃にげ出
 しておうちへ帰つてしまいました。

そのとき天皇は、高殿たかどのにお上りになつて、その黒媛くろひめの乗つ
 ている船が難波なにわの港を出て行くのをご覧らんになりながら、

かわいそうに、あそこに黒媛くろひめがかえつて行く。

あの沖おきに、たくさんの小船こぶねにまじって、あの女の船が出て行くよ。

とこういう意味のお歌をお歌いになりました。

すると皇后は、そのことをお聞きになって、ひどく怒おこっておしまいになり、すぐに人をやって、黒媛くろひめをむりやりに船からひきおろさせて、はるかな吉備きびの国まで、わざと歩いておかえしになりました。

天皇はその後、黒媛くろひめのことをしじゅうあわれに思い思いお暮らしになっていました。そんなわけで、天皇はついにある日、淡路島あわじしまを見に行くとおっしゃって皇后のお手前をおつくろいに

なり、いったんその島へいらしたうえ、そこから、黒媛くろひめをたずねて、こつそり吉備きびまで、おくだりになりました。

黒媛くろひめは天皇を山方やまかたというところへおつれ申しました。そして、召めし上がり物にあつものをこしらえてさしあげようと思ひまして、あおなをつみに出ました。すると天皇もいつしよに出てご覧になり、たいそうお興きよう深くおぼしめして、そのお心持をお歌にお歌いになりました。

天皇がいよいよお立ちになるときには、黒媛くろひめもお別れの歌を歌いました。媛ひめは天皇がわざわざそんなになすつて、隠かくれ隠かくれてまでおたずねくだすつたもつたいなさを、一生わすお忘れ申すことができませんでした。

三

皇后はその後、ある宴えんかい会をおもよおしになるについて、そのお酒をおつぎになる御綱みつながしわ柏というかしわの葉をとり、わざわぎ紀伊きいのくに国までお出かけになったことがありました。

そのおるすの間、天皇のおそばには八田やたのわかいらつめ若郎女という女じよかん官がお仕え申しておりました。

皇后はまもなく御綱みつながしわ柏の葉をお船につんで、難波なにわへ向かつて帰っていらつしやいました。そのお途中で、お供の中のある女たちの乗っている船が、皇后のお船におくれて行き行きするうちに、

難波なにわの大渡おおわたりという海まで来ますと、向こうから一そうの船が来かかりました。その中には、高津たかつのお宮のお飲み水を取る役所で働いていた、吉備きびの生まれの、ある身分みぶんの低い仕丁よぼろで、おいとまをいただいておうちへ帰るのが、乗り合わせておりました。その者が船のすれちがいに、

「天皇さまは、このごろ八田若郎女やたのわかいらつめがすっかりお気に入りです、それはそれはたいそうごちよう愛になつてゐるよ」としやべつて行きました。それを聞いた女どもはわざわざ大急ぎで皇后のお船に追いついて、そのことを皇后のお耳に入れました。

そうすると、例のご気性きしやうの皇后は、たちまちじりじりなすつて、せつかくそこまで持つておかえりになつた御綱柏みつながしわの葉を、

すつかり海へ投げすてておしまいになりました。それからまもなく船はこちらへ帰りつきました。が、皇后は若郎女わかいらつめのことをお考えになればなるほどおくやしくて、そのお腹立ちはらだまぎれに、港へおつけにならないで、ずんずん船を堀江ほりえへお入れになり、そこから淀川よどがわをのぼって山城やましろまで行つておしまいになりました。

その時皇后は、

「私わたしはあんまりにくらしくてたまらないので、こんなにあてもなく山城やましろの川をのぼつて来たものの、思えばやつぱり天皇のおそばがなつかしい。今この目の前の川べりには、鳥葉樹さしづのきがはえている。その木の下には、茂しげつた、広葉ひろはのつばきがてかてかとまつかに咲さいている。ああ、あの花のように輝かがやきに充みち、あの広葉の

ようにお心広く、おやさしくいらっしやる天皇を、どうして私はおしたわしく思わないでいられよう」とこういう意味のお歌をお歌いになりました。

しかしそれかといつてこのまま急にお宮へお帰りになるのも少しいまいましくおぼしめすので、とうとう船からおあがりになつて、大和やまとの方へおまわりになりました。

そのときにも皇后は、

「私わたしはとうとう山城川やましろうがわをのぼり、奈良ならや小楯おだてをも通りすぎて、

こんなにあちこちさまよつてはいるけれど、それもどこをひとつ見たいのでもない。見たいのは高津たかつのお宮よりほかにはなんにもない」という意味をお歌いになりました。

それからまた山城やましろへひきかえして、筒木つつぎというところへおいでになり、そこに住まっている朝鮮ちようせんの歸化人きかじんの奴里能美ぬりのみという者のおうちへおとどまりになりました。

天皇はすべてのことをお聞きになりますと、鳥山とりやまという舎人とねりに向かつて、

「おまえ早く行つて会つてこい」という意味をお歌でおつしやつて、皇后のところへおつかわしになりました。そのつぎには、丸わ瀬にのおみくちこ臣め口子めという者をお召しになつて、

「皇后はあんなにいつまでもすねて、お宮へもかえつて来ないけれど、しかし心の中ではわしのことを思っているに相違そちない。二人の間であるものを、そんなに意地いじを張らないでもよいであろう

に」という意味を二つのお歌にお歌いになって、また改めてくちこ口子をお迎えにおやりになりました。

お使いのくちこ口子は、ぬりのみ奴里能美のおうちへ着きますと、天皇のそのお歌をかたときも早く皇后に申しあげようと思ひまして、ござしよ御座所のお庭にわさき先へうかがいました。

そのときにちようどひどい大雨がざあざあ降っておりまして。

くちこ口子はその雨の中をもいとわず、皇后のおへやの前の地じびたへ平いふく伏しますと、皇后は、つんとして、いきなり後ろの戸口の方へ

立って行つておしまいになりました。くちこ口子は怖おそる怖るそちらがわにまわつて平伏しました。そうすると皇后はまたついと前の方の戸口へ来ておしまいになりました。くちこ口子はあつちへ行つたりこつ

ちへ来たりして土の上にひざまずいているうちに、雨はいよいよどしゃぶりに降りつがつて、そのたまり水が腰まで浸すほどになりました。口子は赤いひものついた、あい染めの上着を着ておりましたが、そのひもがびしょびしょになって赤い色がすっかり流れ出したので、しまいには青い着物もまっかに染まってしまった。

そのとき皇后のおそばには、口子の妹の口媛という者がお仕え申しております。口媛はおにいさまのそのありさまを見て、「まあおかわいそうに、あんなにまでしておものを申しあげようとしているのに、見ている私には涙がこぼれてくる」といいう意味を歌に歌いました。

皇后はそれをお聞きになって、

「兄とはだれのことか」とおたずねになりました。

「さつきから、あすこに、水の中にひれ伏ふしておりますのが私の兄の口子くちこでございませう」と、口子くちこ媛ぬめは涙をおさえてお答え申しました。

口子くちこはそのあとで、口子くちこ媛ぬめと奴里能美ぬりのみの二人に相談して、これはどうしても天皇にこちらへいらしつていただくよりほかには手だてがあるまいと、こう話を決めました。そこで口子くちこは急いでお宮へかえつて申しあげました。

「まいりまして、すっかりわけをお聞き申しますと、皇后さまがあちらへお出向きになりましたのは、奴里能美ぬりのみのうちに珍めづらしい虫

を飼かつておりますので、ただそれをご覧らんになるためにおでかけに
 なりましたのでございます。そのほかにはけつしてなんのわけも
 おありにはなりません。その虫と申しますのは、はじめはう虫
 でございますが、つぎには卵たまごになり、またそのつぎには飛ぶ虫にな
 りまして、順々に三度姿すがたをかえる、きたいな虫だそうでございます
 す」と、口子くちこは子供でも心得ているかいこのことを、わざと珍めづらし
 そうに、じょうずにこう申しあげました。

すると天皇は、

「そうか、そんなおもしろい虫がいるなら、わしも見に行こう」
 とおっしゃって、すぐにお宮をお出ましになり、奴里能美ぬりのみのおう
 ちへ行ぎようこう幸こうになりました。

奴里ぬりの能美のみは、口子くちこが申しあげたとおりの三みとおりの虫を、前もつて皇后に献けん上じょうしておきました。

天皇は皇后のおへやの戸の前にお立ちになつて、

「そなたがいつまでも怒おこつたりしているので、とうとうみんながここまで出て来なければならなくなつた。もうたいていにしてお帰りなさい」とお歌いになり、まもなくおともどもに難波なにわのお宮へご還幸かんこうになりました。

天皇はそれといつしよに、八田やた若郎女わかいらつめにおいとまをおつかわしになりました。しかしそのかわりには、郎女いらつめの名まえをいつまでも伝え残すために、八田部やたべという部族をおこしらえになりました。

四

それからあるとき天皇は、めどりのみこ女鳥王という、あるお血筋ちすじの近い方きゆうちゆうを宮中にお召めしかかえになろうとして、弟さまの速はやぶさ総わけ別の王みこをお使いにお立てになりました。

みこ王はさつそくいらして、そのおぼしめしをお伝えになりますと、めどりのみこ女鳥王はかぶりをふって、

「いえいえ私はきゆうちゆう宮中へはお仕え申したくございません。皇后さまがあんなにごしつと深くいらつしやるので、やたのわかいらつめ八田若郎女だつてご奉公ができませんでさがつてしまいましたではございません

か。それよりもこんな私でございませうが、どうぞあなたのお嫁よめにしてくださいまし」とお頼たのみになりました。

それで王みこはその女鳥王めとりのみこをお嫁になさいました。そして天皇に對しては、いつまでもご返事を申しあげないままです。いらっしやいました。

すると天皇は、しまいにご自分で女鳥王めとりのみこのおうちへお出かけになり、戸口のしきいの上にお立ちになってのぞいてご覧になりますと、王みこはちようど中でお機はたを織はつていらっしやいました。

天皇は、

「それはだれの着物を織はつているのか」とお歌に歌うつてお聞きになりました。すると女鳥王めとりのみこもやはりお歌で、

「これは速はやぶさ総さわけのみこ別王にお着せ申しますのでございます」とお答えになりました。

天皇はそれをお聞きになつて、二人のことをすつかりおさとりになり、そのままお宮へおかえりになりました。

女鳥王はそのあとで、まもなく速はやぶさ総さわけのみこ別王が出ていらつしやいますと、

「もし。あなたさまよ。ひばりでさえもどんどん大空へかけのぼるではございせんか。あなたはお名まえもたかの中のはやぶさと同じでいらつしやるのに、さあ早くささぎをとり殺しておしまいなさい」とこういう意味をお歌いになりました。それはいうまでもなく、天皇のお名がおおささぎのみこと大雀命なので、それをささぎにか

よわせて、一ときも早く天皇をお殺し申してご自分でお位におつきになるようにと、怖ろしい入れぢえをなすつたのでした。

そうすると、そのお歌のことが、いつのまにか天皇のお耳にはいりました。天皇はすぐに兵をあつめて速総別王を殺しにおつかわしになりました。

速総別王はそれと感づくつと、びっくりして、女鳥王とい

つしよにすばやく大和へ逃げ出しておしまになりました。そのお途中、倉橋山という険しい山をお越えになるときに、かよわい女鳥王はたいそうご難澁をなすつて、夫の王のお手にすがりすがりして、やつと上までお上りになりました。

お二人はそこからさらに同じ大和の曾爾というところまでいら

つしやいますと、天皇の兵がそこまで追いついて、お二人を刺^さし殺してしまいました。

そのとき軍勢を率^{ひき}いて来たのは山^{やま}辺^べ大^{おお}楯^{だて}連^{のむらじ}というつわも
 のでした。連^{むらじ}は女^め鳥^{とりの}王^{のみこ}のお死^しがいのお手^て首^{くび}に、り^うつ^でば^かな^お腕^{うでか}
 飾^ざりがついていてのを見て、さっそくそれをはぎ取^とつて、自^じ分^{ぶん}
 の家^{かない}内^{ない}に持^もつてかえつてやりま^した。

そのうちに宮中にあるご宴^{えん}会^{かい}があつて、臣^お下^おの者^{もの}の妻^{つま}女^{むすめ}たち
 が、お^めお^めぜ^いいお召^めしにあ^あず^かり^ました。すると大^{おお}楯^{だて}連^{のむらじ}の妻^{つま}
 は、女^め鳥^{とりの}王^{のみこ}のお腕^{うで}飾^{かざ}りを得^{とく}意^いらしく手^て首^{くび}に飾^{かざ}つてま^まい^りま^した。
 皇后はそれらの女^{むすめ}たちへ、お手^てず^から、お酒^{さけ}を盛^もるか^かし^わの葉^はを
 お^おく^くだ^だし^しにな^なり^りま^ました。みんなはか^かわ^わる^るが^がわ^わる^る御^ご前^{ぜん}へ出^でて、それ

をいただいてさがりました。

皇后はそのときに、ふと、連むらじの妻の腕飾りにお目がとまりました。するとそれはかねてお見覚えみおぼのある女鳥王めとりのみこのお持物もちものでした。なので皇后はにわかにお顔色をお変えになり、この女にばかりはかしわの葉をおくだしにならないで、そのまますぐにご宴えんせき席せきから追い出しておしまいになりました。そしてさつそく夫むらじの連をお呼びつけになつて、

「そちは人の腕飾りをぬすんで来て家内にやつたろう。あの速はやぶ総別さわわけと女鳥めとりの二人は、天皇に対して怖おそろしい大罪を犯そうとしたのだから、かれたちが殺されたのはもとよりあたりまえである。しかしそちなぞからいえば、二人とも目上みこの王たちではないか。

その人が身につけている物を、死んでまだ膚はだのあたたかいうちにはぎとつて、それをおのれの妻に与あたえるなぞと、まあ、よくもそんなひどいことができたね」とおつしやつて、ぐんぐんおいじめつけになつたうえ、ようしやなくすぐ死刑しけいに行なわせておしまいになりました。

五

この天皇の御代みよに、兔寸川とさがわというある川の西に、大きな大きな木が一本立っております。いつも朝日がさすたんびに、その木の影かげが淡路あわじの島までとどき、夕日ゆうひが当たると、河内かわちの高山たかやすやま山

よりももつと上まで影がさしました。

土地の者はその木を切つて船をこしらえました。するとそれはそれはたいそう早く走れる船ができました。みんなその船に「か枯野」という名前をつけました。そして朝晩それに乗つて、あわじし淡路島まのわき出るきれいな水をくんで来ては、それを宮中きゆうちゆうのお召めし料にさしあげておりました。

後にみんなは、その船が古びこわれたのを燃やして塩を焼き、その焼け残った木で琴ことを作りました。その琴をひきますと、音が遠く七つの村々まで響ひびいたということです。

天皇はついにおん年八十三でおかくれになりました。

おおすずこすず
大鈴小鈴

一

仁徳天皇には皇子が五人、皇女が一人おありになりました。
た。その中で伊邪本別、水齒別、若子宿禰のお三方がつぎ
つぎに天皇のお位におのぼりになりました。

いちばんのお兄上の伊邪本別皇子は、お父上の亡きおあとをお
つぎになつて、同じ難波のお宮で、履仲天皇としてお位にお

つきになりました。

そのご即位そくいのお祝いいらいのときに、天皇はお酒をどつきり召めしあがって、ひどくお酔よいになったままおやすみになりました。

すると、じき下の弟さまの中津王なかつのみこが、それをしおに天皇をお殺し申してお位を取ろうとおぼしめして、いきなりお宮へ火をおつけになりました。火の手は、たちまちぼうぼうと四方へ燃え広がりました。お宮じゆうの者はふいをくって大あわてにあわて騒さわぎました。

天皇は、それでもまだ前後もなくおよつていらつしやいました。それを阿知直あちのあたえという者が、すばやくお抱かかえ申しあげ、むりやりやまとにうまにお乗せ申して、大和へ向かつて逃げ出して行きました。

お酔いつぶれになつていた天皇は、河内かわちの多遅比野たじひのというところまでいらしたとき、やつとおうまの上でお目ざめになり、

「ここはどこか」とおたずねになりました。阿知直あちのあたえは、

なかつのみこ

「中津王がお宮へ火をお放ちになりましたので、ひとまず大和やまとの方へお供ともをしてまいりますところでございます」とお答え申しました。

天皇はそれをお聞きになつて、はじめてびつくりなさり、

「ああ、こんな多遅比たじひの野の中に寝ねるのだとわかつていたら、夜よ風かぜを防ぐたてごもりと持つて来ようものを」

と、こういう意味のお歌をお歌いになりました。

それから埴生坂はにうぎかという坂までおいでになりました、そこから、

はるかに難波なにわの方をふりかえつてご覧らんになりますと、お宮の火はまだ炎えんえん々とまっかに燃え立っております。天皇は、

「ああ、あんなに多くの家が燃えている。わが妃きさきのいるお宮も、あの中に焼けているのか」という意味をお歌いになりました。

それから同じ河内かわちの大坂おおさかという山の下へおつきになりますと、向こうから一人の女が通りかかりました。その女に道をおたずねになりますと、女は、

「この山の上には、戦道具いくさどうぐを持った人たちがおおぜいで道をふさいでおります。大和やまとの方へおいでになりますのなら、当麻道たしまじからおまわりになりましたほうがよろしゅうございましょう」と申しあげました。

天皇はその女の言うとおりになすつて、ご無事に大和へおはいりになり、石^{いそのかみ}上の^{じんぐう}神宮へお着きになつて、仮にそこへおとどまりになりました。

すると二ばんめの弟さまの水^{みず}齒^は別^{わけ}王^{のみこ}が、その神宮へおうかがいになつて、天皇におめみえをしようとなさいました。天皇はおそばの者をもつて、

「そちもきつと中津王^{なかつのみこ}と腹^{はら}を合せているのであろう。目どおりは許されない」とおおせになりました。王^{みこ}は、

「いえいえ私はそんなまちがった心は持つておりません。けつして中津王^{なかつのみこ}なぞと同腹^{どうふく}ではございません」とお言いになりました。天皇は、

「それならば、これから難波^{なにわ}へかえつて、中津王^{なかつのみこ}を討ちとつてまいれ。その上で対面しよう」とおつしやいました。

二

水齒^{みずは}別王^{わけのみこ}は、大急ぎでこちらへおかえりになりました。そして中津王^{なかつのみこ}のおそばに仕えている、曾婆加里^{そばかり}というつわものをお召^めしになつて、

「もしそちがわしの言うことを聞いてくれるなら、わしはまもなく天皇になつて、そちを大臣にひきあげてやる。どうだ、そうして二人で天下を治めようではないか」とじょうずにおだましかけ

になりました。すると曾婆加里は大喜びで、

「あなたのおおせなら、どんなことでもいたします」

と申しあげました。皇子はその曾婆加里にさまざまのお品物を
おくだしになつたうえ、

「それでは、そちが仕えているあの中津王を殺してまいれ」と
お言いつけになりました。曾婆加里は、

「かしこまりました」と、ぞうさもなくおひき受けて飛んでか
えり、王がかわやにおはいりになろうとすると、ところを待ち受けて、
一刺しに刺し殺してしまいました。

水齒別王は、曾婆加里とごいつしよに、すぐに大和へ向か
つてお立ちになりました。その途中、例の大坂の山の下までお

いになつたとき、命はつくづくお考えになりました。

「この曾婆加里めは、私のためには大きな手柄を立てたやつではあるが、かれ一人からいえば、主人を殺した大悪人である。こんなやつをこのままおくと、さきざきどんな怖ろしいことをしだすかわからない。今のうちに手早くかたづけしてしまつてやろう。しかし、手柄だけはどこまでも賞めておいてやらないと、これから後、人が私を信じてくれなくなる」

こうお思いになつて急にその手だてをお考えさだめになりました。それで曾婆加里に向かつて、

「今晚はこの村へとまることにしよう。そしてそちに大臣の位をさずけたうえ、あすあちらへおうかがいをしよう」とおつしや

つて、にわかえんかいにそこへ仮のお宮をおつくりになりました。そして
 さかなえんかいなご宴会をお開きになつて、そのお席で曾婆加里そばかりを大臣
 の位におつけになり、すべての役人たちに言いつけて礼拝をおさ
 せになりました。

曾婆加里そばかりはこれでいよいよ思いがかなつたと言つて大得意だいとくいに
 なつて喜びました。水齒みずはわけのみこ別王は、

「それでは改めて、大臣のおまえと同じさかずきで飲み合おう」
 とおっしゃりながら、わざと人の顔よりも大きなさかずきへなみ
 なみとおつがせになりました。そして、まずご自分で一口めしあ
 がつた後、曾婆加里そばかりにおくだしになりました。曾婆加里そばかりはそれを
 いただいて、がぶがぶと飲みはじめました。

王は曾婆加里の目顔めがほがそのさかずきで隠かくれるといっしよに、か
 ねてむしろの下にかくしておおきになつた剣つるぎを抜き放して、あツ
 というまに曾婆加里そばかりの首を切り落としておしまいになりました。
 それからあくる日そこをお立ちになり、大和やまとの遠飛鳥とのおあすかという
 村までおいでになつて、そこへまた一晩ばんおとまりになつたうえ、
 けがれ払いばらいのお祈りをなすつて、そのあくる日石上いそのかみの神宮へ
 おうかがいになりました。そしておおせつけのとおり、中津王なかつのみこ
 を平たいらげてまいりましたとご奏そうじょう上うへになりました。

天皇はそれではじめて王みこを御前ごぜんへお通しになりました。それか
 ら阿知直あちのあたえに対しても、ごほうびに蔵くらの司つかさという役におつけにな
 り、たいそうな田地でんちをもおくだしになりました。

三

天皇は後に大和の若桜宮にお移りになり、しまいにおん年六十四でおかくれになりました。そのおあととは、弟さまの水齒別王がお継ぎになりました。後に反正天皇とお呼び申すのがこの天皇のおんことです。

天皇はお身のたけが九尺二寸五分、お齒の長さが一寸、幅が二分おありになりました。そのお齒は上下とも同じようによくおそろいになつて、ちようど玉をつないだようにおきれいでした。河内の多遅比の柴垣宮で、政をおとりになり、おん年六十でお

かくれになりました。

四

はんしやうてんのう
 反正天皇のおあとには、弟さまの若子宿禰王わくごこのすくねのみこが允恭いんきよ
 うてんのう
 天皇としてお位におつきになり、大和やまとの遠飛鳥宮ととおすかのみやへお移り
 になりました。

天皇は、もとからある不治のご病気がおありになりましたので、このからだでは位にのぼることはできないとおっしゃって、はじめには固かたくご辞退じたいになりました。しかし、皇后やすべての役人がしいておねがい申すので、やむなくご即位そくいになったのでした。

するとまもなく新羅国しらぎのくにから、八十一そうの船で貢物みつぎものを献けんじて来ました。そのお使いにわたって来た金波鎮こんばちん、漢起武かんきむという二人の者が、どちらともたいそう医薬のことに通じておりまして、天皇の永ながい間のご病気を、たちまちおなおし申しあげました。そのために天皇はついにおん年七十八までお生きのびになりました。

天皇は日本じゅうの多くの部族の中で、めいめいいいかげんなかつてな姓せいを名のっているものが多いのをお嘆なげきになり、大和やまとのある村へ玖訂瓮くかえといって、にえ湯のたぎっているかまをおすえになつて、日本じゅうのすべての氏姓しせいを正しくお定めになりました。そのにえ湯の中へ一人一人手を入れさせますと、正直しょうじきにほん

とうの姓せいを名のっている者は、その手がどうにもなりません、偽りいつわを申し立てているものは、たちまち手が焼けただれてしまうので、いちいちうそとほんとうを見わけることができました。

五

天皇がおかくなつたあとにはいちばん上の皇子おうじの、木梨きなしの
かるのおうじ 軽皇子がお位におつきになることにきまつておりました。ところが皇子はご即位そくいになるまえに、お身持ちの上について、ある言
うに言われぬまぢがいごとをなすつたので、朝ちやうてい廷のすべて
の役人やしもじもの人民たちがみんな皇子をおいとい申して、弟

さまの穴穂王あなほのみこのほうへついでしてしまいました。

軽皇子かるのおうじはこれでは、うっかりしていると、穴穂王あなほのみこ方からど

んなことをしむけるかもわからないとお怖おそれになり、大前宿

禰ね、小前宿禰こまえのすくねという、きょうだい二人の大臣のうちへお逃にげ

こみになりました。そしてさつそくいくさ道具をおととのえにな
り、軽矢かるやといって、矢やの根を銅でこしらえた矢なども、どつさ
りこしらえて、待ちかまえていらつしやいました。

それに対して、穴穂王あなほのみこのほうでもぬからず戦いくさの手配てくばりをなさ
いました。こちらでも穴穂矢あなほやといって、後の代よの矢と同じように

鉄の矢じりのついた矢を、どんどんおこしらえになりました。そ
してまもなく王みこご自身が軍務をおひきつれになって、大前おおまえ、小

前の家をお攻め囲みになりました。

王はちようどそのとき急に降り出したひようの中を、まっ先に突進して、門前へ押しよせていらつしやいました。

「さあ、みんなもわしのとおり進んで来い。ひようの雨は今にやむ。そのひようのやむように、すべてを片づけてしまうのだ。さあ来い来い」という意味をお歌いになって、味方の兵をお招きになりました。

すると大前、小前の宿禰は、手をあげひざをたたいて、歌い踊りながら出て来ました。

「何をそんなにお騒ぎになる。宮人のはかまのすそのひもについた小さな鈴、たとえばその鈴が落ちたほどの小さなことに、宮

人も村の人も、そんなに騒ぐにはおよびますまい」

こういう意味の歌を歌いながら穴穂王あなほのみこのご前ぜんに出て来て、

「もしあなたさま、軽皇子かるのおうじさまならわざわざお攻めになります

には及びません。ご同腹どうふくのお兄上をお攻めになつては人が笑わらい

ます。皇子さまは私わたくしがめしとつてさし出します」と申しあげました。

それで穴穂王あなほのみこは囲みかこみを解といて、ひきあげて待つておいでにな

りますと、二人の宿禰すくねは、ちやんと軽皇子かるのおうじをおひきたて申して

まいりました。

かるのおうじ
 軽皇子には、かるのおおいらつめ 軽大郎女とおつしやるたいそう仲なかのよいご

どうぶく 同腹のお妹さまがおありになりました。大郎女は世よにまれな

お美しい方で、そのきれいなおからだの光がお召物めしものまでも通し

て光っていたほどでしたので、またの名を衣そとおし通郎女いらつめと呼ばれ

ていらつしやいました。

あなほのみこ 穴穂王ての手にわたお渡されになつた軽皇子は、その仲のよい大

おいらつめ 郎女のお嘆なげきを思いやつて、

「ああ郎女いらつめよ。ひどく泣なくと人が聞いて笑わらいそしる。羽狭はさの山

のやまばとのように、こつそりと忍しのび泣なきに泣なくがよい」という

意味の歌をお歌いになりました。

あなほのみこ かるのおうじ
 穴穂王は、軽皇子を、そのまま伊予へ島流しにしておしま
 いになりました。そのとき おおいらつめ 大郎女は、

「どうぞ浜べをお通りになつても、かきがらをお踏ふみになつて、
 けがをなさらないように、よく氣をつけてお歩きくださいまし」
 という意味の歌を、泣き泣きお兄上にお捧ささげになりました。

おおいらつめ 大郎女はそのおあとでも、お兄上のことばかり案じつつけて
 いらつしやいましたが、ついにたまりかねてはるばる伊予いよまでお
 あとを追つていらつしやいました。

かるのおうじ 軽皇子はそれはそれはお喜びになつて、
おおいらつめ 大郎女のお手をと
 りながら、

「ほんとうによく来てくれた。鏡のように輝き、玉のように光つ

ている、きれいなおまえがいればこそ、大和やまとへも帰りたいたもだえていたけれど、おまえがここにいてくれれば、大和やまともうちもな
んであろう」とこういう意味のお歌をお歌いになりました。

まもなくお二人は、その土地で自殺しておしまいになりました。

しかの群むれ、ししの群むれ

一

穴穂王あなほのみこは、おあにいさまの軽皇子かるのおうじを島流しにおしになった
 後、第二十代の安あん康こう天てん皇のうとしてお立ちになり、大やまと和いの石そのか
 上みの穴穂宮あなほのみやへおひき移りになりました。

天皇は弟さまのおおはつせのおうじ大長谷皇子おほくさかのみこのために、仁徳にんとくてんのう天てん皇のうの皇子おうじで、
 ちようど大おじさまにおあたりになる大日下王おほくさかのみことおつしやる

方のお妹さまの、若日下王わかくさかのみこという方を、お嫁よめにもらおうとお
 思いになりました。

それで根臣ねのおみという者を大日下王おおくさかのみこのところへおつかわしに
 なつて、そのおぼしめしをお伝えになりました。大日下王おおくさかのみこは
 それをお聞きになりますと、四たび礼拝をなすつたうえ、

「実は私も、万一そういうご大命たいめいがくだるかもわからないと思
 いましたので、妹は、ふだん、外へも出さないようにしていまし
 ました。まことにおそれ多いことながら、それではおおせのままにさ
 しあげますでございませう」とたいそう喜んでお受けをなさい
 ました。しかしただ言葉ことばだけでご返事を申しあげたのでは失礼だ
 とお考えになつて、天皇へお礼のお印しるしに、押木おしぎの玉かずらという

りつばな髪飾りを、若日下王から献上品としておこと
づけになりました。

するとお使いの根臣は、乱暴にも、その玉かずらを途中で
自分が盗み取ったうえ、天皇に向かつては、

「おおせをお伝えいたしました^{みこ}が、王はお聞き入れがございませ
ん。おれの妹ともあるものを、あんなやつ^{しきもの}の敷物にやれるかと
おっしゃって、それはそれは、刀の柄^{つか}に手をかけてご立腹になり
ました」

こう言つて、まるで根のないことをこしらえて、ひどいざん言^{げん}
をしました。

天皇は非常にお怒り^{いか}になつて、すぐに人を派^はせて大日下王^{おおくさかのみこ}

を殺しておしまいになりました。そして王のお妃の長田大郎みこ女めをめしいれて自分の皇后になさいました。

あるとき天皇は、お昼寝ひるねをなさろうとして、お寢床ねどこにおよこたわりになりながら、おそばにいらした皇后に、

「そちはなにか心の中に思っていることはないか」とおたずねになりました。皇后は、

「いいえけっしてそんなはずはございません。これほどおてあついお情けをいただいておりますのに、このうえ何を思いましよう」とお答えになりました。

そのとき、ちようど御殿ごてんの下には、皇后が先の大日下王おおくさかのみことの間におもうけになった、目弱王まよわのみことおつしやる、七つにおなり

になるお子さまが、ひとりで遊んでおいでになりました。

天皇はそれとはご存じないものですから、ついうっかりと、

「わしはただ一つ、いつも気になってならないことがある。それは目弱まよわが大きくなつた後に、あれの父はわしが殺したのだと聞くと、わしに復しゆうをしはしないだろうかと、それが心配である」とこうおおせになりました。

目弱まよわ王は下でそれをお聞きになつて、それではお父上を殺したのは天皇であつたのかとびつくりなさいました。

そのうちに、まもなく天皇はぐつすりお眠りねむになりました。目ま

弱王よわのみこはそこをねらつてそつと御殿ごてんへおあがりになり、おまくらもとにあつた太刀たちを抜き放して、いきなり天皇のお首をお切りに

なりました。そしてすぐにお宮を抜け出して、都つぶら夫良意富美おおみという者のうちへ逃にげこんでおしまいになりました。

天皇はそのままお息がお絶えになりました。お年は五十六歳でいらつしやいました。

そのときには、弟さまのおおはつせのおうじ大長谷皇子は、まだ童どうはつ髪をおゆいになつてゐる一少年でおいでになりましたが、目弱まよわのみこ王が天皇をお殺し申したとお聞きになりますと、それはそれはお憤いきどおりになつて、すぐにお兄上の黒日子王くろひこのみこのところへかけつけておいでになり、

「おあにいさま、たいへんです。天皇をお殺し申したやつがいま
す。どういたしましょう」とご相談をなさいました。すると、黒く

ろひこのみこ
日子王は天皇のご同腹どうふくのおあにいさままでおありになりながら、
てんで、びつくりなさらないで平氣にかまえていらつしやいまし
た。おおはつせのおうじ
大長谷皇子はそれをご覽らんになりますと、くわツとお怒いかりに
なり、

「あなたはなんとという頼たのもしげもない人でしよう。われわれの天
皇がお殺されになつたのじやありませんか。そして、それは、ま
たあなたのおあにいさまじやありませんか。それを平氣で聞いて
いるとは何ごとです」とおつしやりながら、いきなりえりもとを
ひツつかんでひきずり出し、刀を抜くなり、一打ひとちに打ち殺して
おしまいになりました。

おうじ
皇子はそれからまたつぎのおあにいさまの白日子王しらひこのみこのところ

へおいでになつて、同じように、天皇がお殺されになつたことをお告げになりました。しろひこのみこ白日子王は天皇のご同腹どうふくの弟さままでいらつしやいました。それなのに、この方も同じく平気な顔をして、すましておいでになりました。皇子はまたそのおあにさまのえり首をつかんでひきずり出して、おはりだ小治田という村まで引っぱつていらつしやいました。そしてそこへ穴あなを掘つて、その中へまつすぐに立たせたまま、生き埋うめに埋めておしまいになりました。みこ

りようほう両方のお目の玉が飛び出して、それなり死んでおしまいになりました。

おおはつせのおうじ
大長谷皇子はそれから軍勢をひきつれて、目弱王まよわのみこをかくま
つている都夫良意富美の邸つぶらのおおみやしきをおとり囲みになりました。すると、
こちらでもちやんと手くばりをして待ちかまえておりまして、そ
れツというなり、ちようどあしの花が飛び散ちるように、もうもう
と矢やを射い出だしました。

おおはつせのおうじ
大長谷皇子は、その前から、この都夫良つぶらの娘むすめの訶良媛からひめという
人をお嫁よめにおもらいになることにしていらつしやいました。皇子おうじ
は今どんどん射い向けける矢やの中に、矛ほこを突ついてお突ツ立ちになりな
がら、

「都夫良よ、訶良媛はこのうちにいるか」と大声でおどなりになりました。

都夫良はそれを聞くと、急いで武器を投げすてて、皇子の御前へ出て来ました。そして八度伏し拝んで申しあげました。

「娘の訶良媛はお約束のとおり必ずあなたにさしあげます。また五か村の私の領地も、娘に添えて献上いたします。ただどう

ぞ、今しばらくお待ちくださいまし。私がただ今すぐに娘をさしあげかねますわけは、昔から臣下の者が皇子さま方のお宮へ逃かくれたことは聞いておりますが、貴い皇子さまがしもの者のところへお逃れになったためしはかつて聞きません。私はいかに力いっぱい戦いまして、あなたにお勝ち申すことができない

のは十分わきまえております。しかし、目弱王は、私ごとき者をも頼りにしてくださって、いやしい私のうちへおはいりくださっているのです。ごぎいますから、私といたしましては、たとえ死んでもお見捨て申すことはできません。娘はどうぞ私が討ち死にをいたしましたあとで、おめしつれくださいますし」

こう申しあげて御前をさがり、再び戦道具を取って邸にはいつて、いっしょうけんめいに戦をいたしました。

そのうちに都夫良はとうとうひどい手傷を負いました。みんなも矢だねがすっかり尽きてしまいました。それで都夫良は目弱王に向かつて、

「私もこのとおりで、もはや戦を続けることができません。いか

がいたしまししょう」と申しあげました。

お小さな目弱王は、

「それではもうしかたがない。早く私を殺してくれ」とおつしや
 いました。都夫良はおおせに従つてすぐに王をお刺し申した上、
 その刀で自分の首を切つて死んでしまいました。

三

このさわぎが片づくとももなく、ある日、大長谷皇子の
 ところへ、近江の韓袋という者が、そちらの蚊屋野というところ
 に、ししやしかがひじょうにたくさんおりますと申し出ました。

「そのどつさりおりますことと申しますと、群がり集まった足はちようどすすきの原のすすきのようでございますし、群がった角は、ちようど枯木かれきの林のようでございます」と韓袋からぶくろは申しあげました。

皇子おうじは、ようし、とおつしやつて、履仲りちゆうてんのう天皇の皇子で、ちようどおいところにおあたりになる、忍齒王おしほのみことおつしやるお方とお二人で、すぐに近江おうみへおくだりになりました。お二人は蚊屋野かやのにお着きになりますと、ごめいめいに別々の飯屋かりやをお立てになつて、その中へおとまりになりました。

そのあくる朝、忍齒王おしほのみこは、まだ日も上らないうちにお目ざめになりました。それでまったくなんのお気もなく、すぐにおうま

にめして、おおはつせのおうじ大長谷皇子のお飯屋へ出かけておいでになりました。

こちらでは、おうじ皇子はまだよくおよつていらつしやいました。王は、みこ

皇子のおつきの者に向かつて、

「まだお目ざめでないようだね。もう夜よも明けたのだから、早くお出かけになるように申しあげよ」とおつしやつて、そのままおうまをすすめて、りよう場へお出かけになりました。

皇子のおつきの者は、皇子に向かつて、

「ただ今おしはのみこ忍齒王がおいでになりました、これこれとおつしやいました。なんだかおつしやることが変ではございませんか。けつしてごゆだんをなさいますな。お身固かためも十分になすつてお出かけなさいますように」と悪く疑うたがつてこう申しあげました。それで

皇子も、わざわざお召物めしものの下へよろいをお着こみになりました。そして弓矢ゆみやを取っておうまを召めすなり、大急ぎで王みこのあとを追つてお出かけになりました。

皇子はまもなく王に追いついて、お二人でうまを並ならべてお進みになりました。そのうちに皇子はすきまをねらつて、さつと矢をおつがえになり、罪もない忍齒王おしはのみこを、だしぬけに射落いとしておしまいになりました。そして、なお飽あき足たらずに、そのおからだをずたずたに切り刻きざんで、それをうまの飼葉かいばを入れるおけの中へ投げ入れて、土の中へ埋うめておしまいになりました。

四

おしほのみこ
忍齒王には意富祁王、
おおけのみこ
袁祁王というお二人のお子さまがい
らっしやいました。

お二人はお父上がお殺されになつたとお聞きになりまして、そ
れでは自分たちも、うかうかしてはいられないとおぼしめして、
急いで大和やまとをお逃げにになりました。

そのお途中でお二人が、山城やましろの苅羽井かりはいというところでおべん
とうをめしあがつておりますと、そこへ、ちよう役えきあがりの印しるしに、
顔かおへ入墨いれずみをされている、一人の老人ろうじんが出て来て、お二人が食
べかけていらっしやるおべんとうを奪うばい取りました。お二人は、
「そんなものは惜おしくもないけれど、いったいおまえは何者だ」

とおたしなめになりました。

「おれは山城やましろでお上かみのししを飼かっているしし飼かいだ」とその悪わるも者の老人は言いました。

お二人は、それから河内かわちの玖須婆川くすばがわという川をお渡りわたになり、とうとう播磨はりままで逃げのびていらつしやいました。そして固くご身分をかくして、志し自じ牟むという者のうちへ下男におやとわれになり、いやしいうし飼、うま飼の仕しごと事をして、お命をつないでいらつしやいました。

とんぼのお歌

一

おおはつせのおうじ
 大長谷皇子は、まもなく雄略天皇としてご即位になり、
やまと あさくらのみや
 大和の朝倉宮にお移りになりました。皇后には、例の大日
かのみこ
 下王のお妹さまの若日下王をお立てになりました。
わかくさかのみこ
 その若日下王が、まだ河内の日下というところにいらしつ
かわち くさか
やまと
 たときに、ある日天皇は、大和からお近道をおとりになり、日く

下の直越さかただごえという峠とうげをお越えこになつて、王みこのところへおいでになつたことがあります。

そのとき天皇は、山の上から四方の村々をお見わたしになりますと、向こうの方に、一軒けん、むねにかつお木をとりつけているうちがありました。かつお木というのは、天皇のお宮か、神さまのお社やしろかでなければつけないはずの、かつおのような形をした、むねの飾りかざりです。

天皇はそれをご覧らんになつて、

「あの家はだれの家か」とおたずねになりました。

「あれは志幾しきの大おお県あがたぬし主ぬしのうちでございます」と、お供の者がお答え申しました。天皇は、

「無礼なやつめ。おのれが家をわしのお宮に似せて作っている」とお怒りになり、

「行ってあの家を焼きはらって来い」とおっしゃって、すぐに人をおつかわしになりました。

すると おおあがたぬし 大県主はすっかりおそれいってしまいました。

「実は、おろかな私どものことでございますので、ついなんにも存じませんで、うっかりこしらえましたものでございます」と言つて、縮みあがつてお申しわけをしました。そして、そのおわびの印に、一ぴきの白いぬにぬのを着せ、鈴の飾りをつけて、それを身内の者の一人の、腰佩こしはきという者に綱つなで引かせて、天皇に献けん上じょういたしました。

それで天皇も、そのうちをお焼きはらいになることだけは許しておやりになり、そのまま若^{わか}日^か下^{かの}王^{のみこ}のおうちへお着きになりました。

天皇はお供^{とも}の者をもつて、

「これはただいま途中で手に入れたいぬだ。^{めずら}珍しいものだから進^しんもつ物にする」とおつしやつて、さっきの白いぬを若^{わか}日^か下^{かの}王^{のみこ}におくだしになりました。しかし王^{みこ}は、

「きよう天皇は、お日さまをお背^せ中^{なか}になすつておこしになりました。これではお日さまに対しておそれおおうございますので、きようはお目にかかりません。そのうち、私のほうからすぐにまかり出まして、お宮へお仕え申しあげます」

こう言つて、おことわりをなさいました。

天皇はお帰りのお途中、山の上にお立ちになつて、若^{わか}日^ひ下^さ王^{みこと}の^こことをお慕^{した}いになるお歌をおよみになり、それを王^{みこと}へお送りになりました。王^{みこと}はそれからまもなくお宮へおあがりになりました。

二

天皇はあるとき、大^{やまと}和^{みわ}の^{がわ}美^み和^わ川^{がわ}のほとりへお出ましになりました。そうすると、一人の娘^{むすめ}が、その川で着物^{ぎぬ}を洗つておりました。それはほんとうに美しい、かわいらしい娘でした。天皇は、

「そちはだれの子か」とおたずねになりました。

わたくしひけたべ

「私は引田郎の赤猪子あかいのこと申します者でございます」と娘はお答

え申しました。天皇は、

「それでは、いずれわしのお宮へ召めし使つてやるから待つていよ」とおっしゃつて、そのままお通りすぎになりました。

あかいのこ

赤猪子あかいのこはたいそう喜んで、それなりお嫁よめにも行かないで、一

ほうこう

心にご奉公ほうこうを待つておりました。しかし宮中きゆううちゆうからは、何十

年たつても、とうとうお召めしがありませんでした。そのうちに、もうひどいおばあさんになつてしまいました。赤猪子あかいのこは、

「これではいよいよお宮へご奉公にあがることはできなくなつた。しかしこんなになるまで、いっしょうけんめいにおめしを待つて

いたことだけは、いちおう申しあげて来たい」こう思つて、ある日、いろいろの鳥やお魚さかなや野菜ものをおみやげに持つて、お宮へおうかがいいたしました。すると天皇は、

「そちはなんとという老婆ろうばだ。どういうことでまいったのか」とおたずねになりました。赤猪あかいのこ子は、

「私は、いついつの年のこれこれの月に、これこれこういうおおせをこうむりましたものでございます。こんにちまでお召めしを待ち申ししてとうとう何十年という年を過すごしました。もはやこんな老婆ろうばになりましたので、もとよりご奉ほう公には堪たえられません。ただ私がどこまでもおおせを守まもつておりましたことだけを申しあげたいと存じましてわざわざおうかがいいたしました」と申

しあげました。天皇てんのうはそれをお聞きになつて、びつくりなさいました。

「私わしはそのことは、もうとつくに忘わすれてしまつていた。これはこれはすまないことをした。かわいそうに」とおっしゃつて、二つのお歌をお歌いになり、それでもつて、赤猪子あかいのこのどこまでも正しようじき直ちよくな心根こころねをおほめになり、ご自分のために、とうとう一生お嫁よめにも行かないで過あやごしたことをしみじみおあわれみになりました。赤猪子あかいのこは、そのお歌を聞いて、たまりかねて泣なきだしました。その涙なみだで、赤色にすりそめた着物の袖そでがじとじとにぬれましました。そして泣き泣き歌つて、

「ああああ、これから先はだれにすがつて生きて行いこう。若い女わか

の人たちは、ちようど日下くさかの入江いりえのはすの花のように輝かがき誇やほこっている。私もわたしそのとおりの若わかさでいたら、すぐにもお宮みやで召めし使つかっていただけようものを」と、こういう意味をお答え申しあげました。

天皇はかずかずのお品物をおくだしになり、そのままおうちへおかえしになりました。

三

またあるとき天皇は、大和やまとの阿岐あき豆野つのという野のへりようごりよう獵りよう場ばでおいすにおかけになっておりますになりました。そして獵場りようばでおいすにおかけになっております

と、一ぴきのあぶが飛とんで来て、お腕うでにくいつきました。すると一ぴきのとんぼが出て来て、たちまちそのあぶを食くい殺ころして飛とんで行きましました。

天皇はこれをご覧らんになつて、たいそうお喜びになり、

「なるほどこんなふうには天皇のことを思う虫だから、それでこの日本のことをあきつ島というのであろう」という意味をお歌に歌つておほめになりました。とんぼのことを昔むかしの言葉ではあきつと呼よんでおりました。

そのつぎにはまた別のときに、大和やまとの葛城山かつらぎやまへお上りになりました。そうすると、ふいに大きな大いのししが飛び出して来ましました。天皇はすぐにかぶらや矢をおつがえになつて、ねらいをたが

えず、ぴゅうとお射いあてになりました。すると、ししはおそろしく怒いかり狂くるつて、うううとううなりながら飛びかかって来ました。

それには、さすがの天皇もこわくおなりになつて、おそばに立つていたはんのきへ、大急ぎでお逃にげのぼりになり、それでもつて、やつと危あぶいところをお助かりになりました。

天皇はそのはんのきの上で、

「ああ、この木のおかげで命びろいをした。ありがたいありがたい」とおつしやる意味を、お歌にお歌いになりました。

四

天皇はその後、また葛城山かつらぎやまにおのぼりになりました。そのときお供の人々は、みんな、赤いひものついた、青ずりのしよろぐをいただいて着ておりました。

すると、向こうの山を、一人のりっぱな人がのぼって行くのがお目にとまりました。その人のお供の者たちも、やはりみんな、赤ひものついた、青ずりの着物を着ていまして、だれが見ても天皇のお行列と寸すんぶん分ちがも違ちがいませんでした。

天皇はおどろいて、すぐに人をおつかわしになり、

「日本にはわしを除いて二人の天皇はいないはずだ。それなのに、わしと同じお供を従えて行くそちは、いったい何者だ」と、きびしくお問いつめになりました。すると向こうからも、そのおたず

ねと同じようなことを問いかえしました。

天皇はくわツとお怒いかりになり、まつ先に矢をぬいておつがえになりました。お供の者も残らず一度に矢をつがえました。そうすると、向こうでも負けていないで、みんなそろつて矢をつがえました。天皇は、

「さあ、それでは名を名乗れ。お互たがいに名乗り合つたうえで矢を放とう」とお言い送りになりました。向こうからは、

「それではこちらの名まえもあかそう。私わたしは悪いことにもただ一ひ言こと、いいことにも一言だけお告げをくだす、葛城山かつらぎやまの一ひと言こと主ぬし神のかみだ」とお答えがありました。天皇はそれをお聞きになると、びつくりなすつて、

「これはこれはおそれおおい、大神おおかみがご神体をお現わしになつたとは思ひもかけなかつた」とおつしやつて、大急ぎで太刀たちや弓ゆ矢みやをはじめ、お供ともの者一同の青ずりの着物をもすつかりおぬがせになり、それをみんな、伏ふし拜おがんで、大神おおかみへご献けんじよう上じようになりました。

すると大神おおかみは手を打つてお喜びになり、その献けんじよう上じよう物ものをすつかりお受けいれになりました。それから天皇がご還かんこう幸こうになるときには、大神おおかみはわざわざ山をおりて、遠く長谷はつせの山の口までお見送りになりました。

天皇はつきにはまたあるとき、その長谷はつせにあるももえつきとい
う大きな、大けやきの木の下でお酒さかもり宴もよおをお催しになりました。
そのとき伊勢いせの生まれの三重采女みえのうねめという女官じよかんが、天皇におさ
かずきを捧ささげて、お酒をおつき申しました。すると、あいにく、
けやきの葉が一つ、そのさかずきの中へ落ちこみました。采女うねめは
それとも気がつかないで、なおどんどんおつき申しました。天皇
はふと、その木の葉をらん覧らんになりますと、たちまちむツとお怒いか
りいになって、いきなり采女うねめをつかみ伏ふせておしまいになり、お刀を
おぬきになって、首を切ろうとなさいました。采女うねめは、

「あッ」と怖おそれちぢかんで、

「どうぞ命いのちだけはお許しくださいます。申しあげたいことがございます」と言いながら、つぎのような意味の、長い歌を歌いました。

「このお宮は、朝日も夕日もよくさし入る、はればれとしたよいお宮である。堅かたい地ぢ伏ふくの上に立てられた、がっしりした大きなお宮である。お宮のそとには大きなけやきの木がそびえたっている。その大たい木ぼくの上の枝えだは天をおおっている。中ほどの枝は東の国においかぶさり、下の枝はそのあとの地方をすっかりおおっている。上の枝のこずえの葉は、落ちて中の枝にかかり、中の枝の落ちた葉は下の枝にふりかかる。下の枝の葉は采女うねめが捧ささげたおさかずきの中へ落ち浮うかんだ。

それを見ると、おおむかし大昔、天地がはじめてできたときに、この

世界が浮き油のように浮かんでいたときのありさまが思い出される。また、神さまが、たいかい大海のまん中へこの日本の島を作りお浮かべになった、そのときのありさまにもよく似にている。ほんとは尊とうとくもめでたいことである。これはきつと、後の世までも話し伝えるに相違そういない」

うねめ采女はこう言つて、むかし昔からの言い伝えを引いておもしろく歌いあげました。天皇はこの歌に免めんじて、うねめ采女の罪を許しておやりになりました。すると皇后もたいそうお喜びになつて、

「この大和やまとのたかいちごおり高市郡の高いところに、大きく茂しげつた広葉ひろはのつばきが咲さいている。今、天皇は、そのつばきの葉と同じように、

大きなお寛ひろい、そして、その花と同じように美しくおやさしいお心で、采女うねめをお許しくだすつた。さあ、この貴とうとい天皇にお酒をおつぎ申しあげよ。このありがたいお情けは、みんなが後の世まで永ながく語り伝えるであろう」と、こういう意味のお歌をお歌いになりました。

それについて天皇も楽しくお歌をお歌いになり、みんなでぎやかに酒盛さかもりをなさいました。

采女うねめは罪を許されたばかりでなく、そのうえに、さまざまのおくだし物をいただき、大喜びに喜びました。

天皇はしまいに、おん年百二十四歳でおかくれになりました。

うし飼、うま飼

一

雄略天皇のおあとには、お子さまの清寧天皇がお立ち
ゆうりやくくてんのう になりまして。天皇はしまいまで皇后をお迎えにならず、お子さ
 まもお一人もいらつしやいませんでした。

ですから天皇がおかくれになると、おあとをお継ぎになるお方
 がいらつしやらないので、みんなはたいそう当惑して、これま
とうわく

でどの天皇かのお血筋ちすじの方をいっししようけんめいにお探さがし申しました。すると、さきにおおはつせのおうじおおはつせのおうじ大長谷皇子にお殺ころされになつた、忍おしは齒王のみこのお妹さまで忍海郎女おしぬみのいらつめ、またのお名まえを飯豊王いいとよのみことおつしやる方が、大和やまとの葛城かつらぎの角刺宮つのさしのみやというお宮みやにおいてになりました。それで、このお方にともかく一時政まじりごとをおとりになつていただきました。みんなは、例れいの忍齒王おしはのみこのお子さまの意い富お祁お、袁お祁おのお二人が、播磨はりまの国くにでうし飼かい、うま飼かいになつて、生きながらえておいでになるといふことはちつとも知らないでいました。

その後まもなく、その播磨はりまの国くにへ、山部連小楯やまべのむらじおだてという人がくにのみやつこ国造くにのみやつこになつて行きました。するとその地方しむの志む自む牟むという

者が新築しんちくしたおうちでお酒盛さかもりをしました。そのとき小楯おだてをはじめ、よばれた人たちも、お酒がまわるにつれて、みんなで代わる代わる立って舞まいを舞いました。しまいにはかまどのそばで火をたいていたきようだい二人の火たきの子供にも舞えと言いました。すると弟のほうの子は、兄の子に向かって、おまえさきにお舞いと言いました。兄は弟に向かって、おまえから舞えと言いました。みんなは、そんないやしい小やつこどもが、人なみに、もつともらしくゆずり合うのをおもしろがって、やんやと笑わらいました。そのうちに、とうとう兄のほうがさきに舞いました。弟はそのあとに舞い出そうとするときに、まず大声でつぎのような歌を歌って自分たちきようだいの身の上をうちあけました。

「男らしい大きな男が、太刀のつかに赤い飾りをつけ、太刀のお
 には赤いきれをつけて、いかにも人目を引く姿をしていても、深
 くおい茂しげつたたけやぶの後ろにはいれば、隠かくれて目にも見えない」
 と、こう歌いだして、たけやぶという言葉ことばを引き出した後、

「そんなたけやぶの大きなたけを割つて、それを並ならべてこしらえ
 た、八絃はちげん琴は、それはそれは調子がよく整ととのつて申し分がない。

今から五代前だいまえの履仲りちゆうてん天皇は、ちようどその琴ことのしらべと同じ
 ように、どこまでもりつぱに天下をお治めになつたお方である。

その皇子おうじに忍齒王おしはのみことおっしゃる方がいらした。みんなの人々

よ、われわれ二人は、その忍齒王おしはのみこの子であるぞ」と歌いました。

小楯おだてはそれを聞くとびっくりして、床ゆかからころがり落ちてしま

いました。そして大あわてにあわてて、さつそくみんなを残らず
 追い出したうえ、意外なところでお見出し申した、意富^{おおけ}禰^{おけ}、袁^{おけ}禰^{おけ}
 のお二人を左右のおひぎにお抱^{かか}え申しながら、お二人の今^{こんにち}日^ちま
 でのご辛^{しん}苦^くをお察し申しあげて、ほろほろと涙^{なみだ}を流して泣^なきまし
 た。

^{おだて}小楯はそれから急いでみんなを集めて、仮のお宮をつくり、お
 二人をその中にお移し申しました。そして、^{やまと}すぐに大和へ早うま
 の使いを立てて、おんおぼ上の^{いとよのみこ}飯^{いとよのみこ}豊^{いとよのみこ}王^{いとよのみこ}にご注^{ちゆうしん}進^{ちゆうしん}申しあげ
 ました。^{いとよのみこ}飯^{いとよのみこ}豊^{いとよのみこ}王^{いとよのみこ}はそれをお聞^ききになると、大喜びにお喜^{よろこ}びに
 なり、すぐにお二人をお呼^よびのぼせになりました。

お二人は、つのさし角刺のお宮でだんだんにごせいじん成人になりました。

あるときおけのみこ袁祁王は、歌がきと行って、男や女がおおぜい

しよに集まつて、歌を歌いかわすもよお催しへおでかけになりました。

そのときうたのおびと菟田首という人のむすめ娘で、王がみこかねがねお嫁よめにもら

うと思つておいでになる、おうお大魚という美しい女の人も来あわせて

おりました。するとそのころ、臣下の中でおそろしくはば幅をきかせ

ていたしびのおみ志毘臣というものが、そのおうお大魚の手を取りながら、おけの袁

みこ祁王にあてつけて、

「ああ、おかしやおかしや、お宮の屋根がゆがんでしまった」と

歌いだし、そのあとの歌のむすびを王にさし向けました。王は、
すぐにそれをお受けになつて、

「それは大工がへただからゆがんだのだ」とお歌いになりました。
すると志毘は重ねて、

「いや、どんなに王があせられても、わしがゆいめぐらした、八
重のしばがきの中へははいれまい。大魚とわしとの仲をじやます
ることはできまい」と歌いかけました。王はすかさず、

「潮の流れの上の、波の荒いところにしばが泳いでいる。しばの
そばにはしばの妻がついている。ばかなしばよ」とお歌いになり
ました。

そうすると志毘はむつと怒つて、

「王みこのゆつたしばがきなぞは、いかに堅固けんこにゆいまわしてあろうとも、おれがたちまち切り破つて見せる。焼き払はらつて見せてやる」と歌いました。王みこはどこまでも負けないで、

「あはは、しびよ。そちは魚さかなだ。いかにいばつても、そちを突つきに来る海人あまにはかなうまい。そんなにこわいものがないては悲しからう」とお歌いになりました。

王みこは、そんなにして、とうとう夜があけるまで歌い争つておひきあげになりました。そして、お宮へお帰りになるとすぐに、お兄上の意富おおけのみこ祁王とご相談なさいました。志毘しびはひとりでつけあがつて、われわれをもまるで踏ふみつけている。われわれのお宮に仕えている者も、朝はお宮へ来るけれど、それからさきは昼じゆう

志毘しびの家に集まってこびいつている。あんなやつは後々のために早く討ち亡うほろぼしてしまわなければいけない。志毘しびは今ごろは疲つかれて寝入ねいっているにちがいない。門には番人もいまい、襲おそうのは今だとお二人でご決心になりました。そしてすぐに軍勢を集めて志毘しびの家をお取り囲みになり、目あての志毘しびを難なく切り殺しておしまいにりました。

三

お二人はもはや、お年の上でも十分おひとり立ちで天下をお治めになることがおできになるので、順じゆんじよ序じよからいつて、お兄上

のおおけのみこ
の意富祁王が、まず第一にご即位そくいになるのがほんとうでした。し

かし、命みことは弟さまに向かつて、

「二人が志し自じ牟むのうちにいたときに、もしそなたが名まえを名乗

らなかつたら、二人ともあのままあそこに埋うずもれていなければな

らなかつたはずであつた。お互たがいにこんなになつたのもみんなそ

なたのお手柄てがらである。それで、私は兄あにに生まれてはいるけれど、

どうかそなたからさきに天下を治めておくれ」とおっしゃいました

た。袁祁王おけのみこはそのことだけはどこまでもご辞退じたいになりましたが、

お兄上あにがどうしてもお聞きいれにならないので、とうとうしかた

なしに、第一にお位におつきになりました。後に顯宗けんそう天皇てんのうと

申しあげるのがすなわちこの天皇でいらつしやいます。

天皇はそれといっしよに大和やまとの近飛鳥宮ちかあすかのみやへお移りになり、
 石木王いしきのみこという方のお子さまの難波王なにわのみことおっしやる方を、皇后
 にお迎えになりました。

天皇は、お父上の忍齒王おしはのみこのご遺骨いこつをおさがし申そうとおぼし
 めして、いろいろ、ご苦心をなさいました。すると、近江おうみから一
 人の卑いやしい老婆ろうばがのぼって来て、

「王みこのお骨こつをお埋め申したところは私がちやんと存じております。
 おそれながら、王みこには、ゆりの根のようにお重かさなりになったお齒
 がおありになりました。そのお齒らんをご覧らんになりませば、王みこのお骨こつ
 ということはすぐにお見分けがつかます」と申しあげました。天
 皇はさっそく近江おうみの蚊屋野かやのへおくだりになって、土地の人民にお

おせつけになつて、老婆ろうばの指す場所をお掘ほらせになり、たしかにお父上のご遺骨をお見出しになりました。それで蚊屋野かやのの東の山にみささぎを作つてお葬ほうむりになり、さきに、お父上たちに獵をおすすめ申しあげた、あの韓からん袋ぶくろの子孫をお墓守はかもりにご任命になりました。

天皇はそれからご還御かんぎよの後、さきの老婆ろうばをおめしのぼせになりました、

「それは大事な場所をよく見届みとどけておいてくれた」とおほめになり、置目老嫗おきめのおみなという名をおくだしになりました。そして、とうぶんそのまま宮きゆうちゆう中へおとどめになつて、おてあつくおもてなしになつた後、改めてお宮の近くの村へお住ませになり、毎日一

度はかならずおそばへめして、やさしくお言葉ことばをかけておやりになりました。天皇はそのためにわざわざお宮の戸のところへ大きな鈴すずをおかけになり、置目おきめをおめしになるときは、その鈴をお鳴らしになりました。

後には置目おきめは、

「私もたいそう年をとりましたので、生まれた村へ帰りたくなりました」と申しあげました。

天皇は置目おきめのおねがいをお許しになり、それではもうあすからそなたを見ることもできないのかとおっしゃる意味の、お別れの歌をお歌いになりながら、わざわざ見送りまでしておやりになりました。

つぎに天皇は、昔お兄上とお二人で大和からお逃げになる途中で、おべんとうを奪い取った、あのしし飼の老人をおさがし出しになって大和の飛鳥川の川原で死刑にお行ないになりました。その悪者の老人は志米須というところに住んでおりました。天皇はなおその上の刑罰として、その老人の一族の者たちのひぎの筋を断ち切らせておしまいになりました。これらの者たちは、その後大和へのぼるのに、いつもびっこを引いて出て来ました。

四

天皇は、お父上をお殺しになった雄略天皇を、深くお恨み

になりました、せめてそのみ霊たまに向かつて復しゆうをしようというおぼしめしから、人をやって、河内かわちの多治比たじひというところにある、天皇のみささぎをこわさせようとなさいました。

するとお兄上の意富祁王おおけのみこが、

「天皇のみささぎをこわすためなら、ほかのものをやってはいけません。私わたしが自分で行っておぼしめしどおりこわして来ます」と

ご奏そうじょう上じょうになりました。天皇は、

「それではあなたがおいでになるがよい」とお許しになりました。意富祁王おおけのみこは急いでお出かけになりました。そしてまもなくお帰りになって、

「ちやんとこわしてまいりました」とおっしゃいました。

しかし、そのお帰りがあんまりお早いので、天皇は変だとおぼしめし、

「いったいどんなふうにおこわしになったのです」とおたずねになりました。するとお兄上は、

「実はみささぎの土を少しだけ掘りかえしてまいりました」とお答えになりました。天皇は、それをお聞きになって、

「それはまたどういうわけでしょう。お父上の復しゆうをするのに、土を少し掘って帰られただけでは飽あきたりないではありませんか。なぜみささぎをすっかりこわして来てくださらないのです」とおっしゃいました。お兄上は、

「そのおおせはいちおうごもつともです。しかし、相手の方はい

くら父上のかたきとはいえ、一方はわれわれのおじであり、またわれわれの天皇のお一人でいらつしやるお方です。私たちがただ父上のかたきということだけ考えて天皇ともある方のみささぎをこわしたとなりますと、後の世の人から必ずそしりを受けます。ただかたきはどこまでも報いねばならないので、その印しるしに土を少し掘ほつて来たのです。このくらいの恥はじを与えたのならば、後世こうせいだれにもはばかることはありませんまいから」

こう言つて、そのわけをお話しになりました。すると天皇も、「なるほどそれは道理である。あなたのなさつたとおりでよろしい」とおっしゃつてご満足になりました。

天皇は八年の間天下をお治めになつた後、おん年三十八歳でお

かくれになりました。天皇はお子さまが一人もおありになりました。それで、おあとにはお兄上の意富祁王が仁賢天皇としてご即位になりました。

天皇は大和の石上の広高宮へお移りになり、皇后には雄略天皇のお子さまの春日大郎女とおつしやる方をお立てになりました。

天皇のおつきには、皇子小長谷若雀命が武烈天皇としてお位におつきになりました。そのおあとには、継体、安閑、宣化、欽明、敏達、用明、崇峻、推古の諸天皇がつぎつぎにお位におのぼりになりました。

青空文庫情報

底本：「古事記物語」角川文庫、角川書店

1955（昭和30）年1月20日初版発行

1968（昭和43）年8月10日31版発行

1980（昭和55）年9月30日改版19刷

初出：女神の死「赤い鳥」赤い鳥社

1919（大正8）年7月

天の岩屋「赤い鳥」赤い鳥社

1919（大正8）年8月

八俣の大蛇「赤い鳥」赤い鳥社

1919 (大正8) 年9月

むかでの室、へびの室「赤い鳥」赤い鳥社

1919 (大正8) 年10月

きじのお使い「赤い鳥」赤い鳥社

1919 (大正8) 年11月

笠沙のお宮「赤い鳥」赤い鳥社

1919 (大正8) 年12月

満潮の玉、干潮の玉「古事記物語上巻」赤い鳥社

1920 (大正9) 年12月

八咫鳥「赤い鳥」赤い鳥社

1920 (大正9) 年1月

赤い盾、黒い盾「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年2月

おしの皇子「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年3月

白い鳥「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年4月

朝鮮征伐「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年5月

赤い玉「古事記物語下巻」赤い鳥社

1920（大正9）年12月

宇治の渡し「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年6月

難波のお宮「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年7月

大鈴小鈴「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年8月

しかの群、ししの群「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年9月

とんぼのお歌「古事記物語下巻」赤い鳥社

1920（大正9）年12月

うし飼、うま飼「古事記物語下巻」赤い鳥社

1920（大正9）年12月

※「八俣の大蛇」の初出時の表題は「赤い猪」です。

※「八咫鳥」の初出時の表題は「毒の大熊」です。

※「朝鮮征伐」の初出時の表題は「神功皇后」です。

※「白日子王」に対するルビの「しろひこのみこ」と「しらひこのみこ」の混在は、底本通りです。

入力：jupier

校正：鈴木厚司

2001年11月19日公開

2014年8月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

古事記物語

鈴木三重吉

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>